

総社市埋蔵文化財調査年報 6

(平成 7 年度)

1996年11月

総社市教育委員会

序

総社市は、岡山県南部に位置し、全国有数の重要な遺跡を保有する、緑豊かな田園都市で、まさに古代吉備の中枢地と誇りうるものであります。

さて、本市におきましては、岡山県内十市のうち、第四番めに埋蔵文化財専門の調査員を配置し、すでに十余年が経過しました。その間、数多くの発掘調査を手掛け、成果をあげてまいりました。近年はバブル経済の破綻によって、大規模な開発工事は沈静化に向かっておりますが、このような時代にこそ私たちの郷土の歴史をふりかえり、明日への展望をひらくために、先人たちの偉大な足跡をたどることが重要であります。そのための一助として、一昨年は出土品の収蔵管理の拠点施設として「総社市埋蔵文化財学習の館」をオープンいたしました。幅広い年齢層の利用があり、今後さらに充実したものにしてまいりたいと思っております。私たちは、文化財保護の重要性を認識し、また社会との接点を常に模索し、社会のなかの文化財としての意義を確立しなければなりません。

そのために、今後とも皆さまのさらなる御援助・御理解を賜りますよう切に願するものであります。

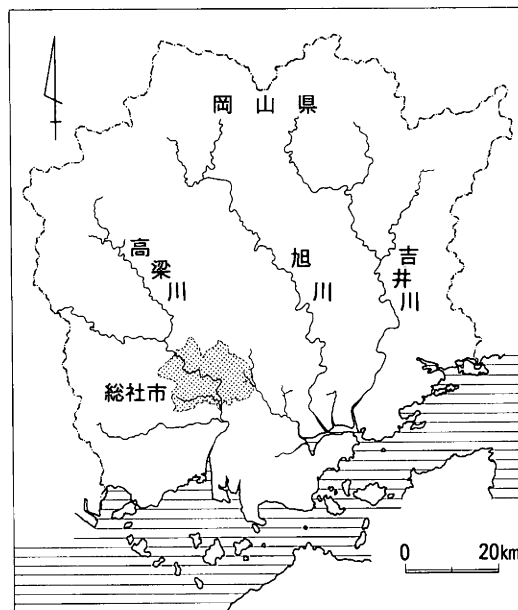
平成8年11月

総社市教育委員会

教育長 中山 英夫

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成7年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会確認調査等について、その概要をまとめたものである。
2. 本書は、それぞれの調査担当者である谷山雅彦、高田明人、武田恭彰、平井典子、前角和夫、高橋進一、松尾洋平が執筆し、それを編集したものである。全体の編集は高田が行った。
3. 遺物整理及び資料の整理にあたっては、西平登代子・近藤雅子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は特記するもの以外は海拔高で、また遺構実測図の方位は特に記していないものは磁北を示す。
5. 本書にかかわる実測図・写真及び遺物などの資料は総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）で保管している。
6. 本書の刊行にあたり御指導・御教示を賜った関係の皆様には厚くお礼申し上げます。



第1図 位置図

目 次

序

例 言

1. 総社市埋蔵文化財保護行政の概要

平成7年度の概要 1

2. 立会及び確認調査等の概要

国分寺公衆便所の改修に伴う確認調査 9

共同住宅建設に伴う確認調査（井手村後遺跡） 11

共同住宅建設に伴う確認調査 23

店舗建設に伴う確認調査 25

工場建設に伴う確認調査 26

秦原廃寺確認調査 27

消防署西出張所（仮称）建設に伴う確認調査 30

J A きびじ西部ライスセンター関連施設建設に伴う確認調査 31

新本川流域における遺跡分布調査その1 32

塔坂古墳群周辺における土砂採取事業2 36

墓地拡張工事に伴う遺物採集 39

個人住宅造成に伴う遺物採集 41

3. 発掘調査の概要

駅南区画整理事業に伴う発掘調査 43

携帯電話無線鉄塔新設に伴う発掘調査（伊与部山遺跡） 48

西団地拡張に伴う発掘調査 50

新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査その6 63

鬼城山第1城門跡の発掘調査 68

4. 発掘調査報告

中須賀遺跡 77

古開遺跡 83

兎登木21号墳 95

目 次

| | | |
|--------------------------------------|--|----|
| 第1図 位置図 | 第28図 出土遺物 (S=1/3) …………… | 34 |
| 第2図 平成7年度調査地点位置図1 (S=1/80,000) …… | 第29図 採集遺物(2) (S=1/4) …………… | 35 |
| 第3図 平成7年度調査地点位置図2 (S=1/30,000) …… | 塔坂古墳群周辺における土砂採取事業 | |
| 国分寺公衆便所の改修に伴う確認調査 | 第30図 調査地位置図 (S=1/10,000) …… | 36 |
| 第4図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第31図 採集遺物 (S=1/3) …………… | 37 |
| 第5図 トレンチ配置図 (S=1/400) …………… | 墓地拡張工事に伴う遺物採集 | |
| 共同住宅建設に伴う調査(井手村後遺跡) | 第32図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 39 |
| 第6図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第33図 採集遺物 (S=1/4) …………… | 40 |
| 第7図 発掘調査位置図 (S=1/200) …………… | 個人住宅造成に伴う遺物採集 | |
| 第8図 出土遺物1 (S=1/4) …………… | 第34図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 41 |
| 第9図 出土遺物2 (S=1/4) …………… | 第35図 採集遺物 (S=1/4) …………… | 42 |
| 第10図 出土遺物3 (S=1/4) …………… | 駅南区画整理事業に伴う発掘調査 | |
| 第11図 出土遺物4 (S=1/4) …………… | 第36図 調査地位置図 (S=1/6,000) …… | 43 |
| 第12図 出土遺物5 (S=1/4) …………… | 第37図 惣善寺遺跡Ⅰ区縄文時代遺構配置図 (S=1/400) …………… | 47 |
| 第13図 出土遺物6 (S=1/4) …………… | 第38図 惣善寺遺跡Ⅱ区出土縄文土器実測図 (S=1/4) …………… | 47 |
| 第14図 出土遺物7 (S=1/4) …………… | 携帯電話無線鉄塔新設に伴う発掘調査 (伊与部山遺跡) | |
| 第15図 出土遺物8 (S=1/4) …………… | 第39図 発掘調査位置図 (S=1/5,000) …… | 48 |
| 共同住宅建設に伴う調査 | 第40図 遺構配置図 (S=1/300) …………… | 49 |
| 第16図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 西団地拡張に伴う発掘調査概要報告 | |
| 第17図 トレンチ配置図 (S=1/800) …………… | 第41図 計画地内遺跡分布図(S=1/5,000) | 51 |
| 第18図 遺物出土状況 (S=1/100) …………… | 第42図 調査終了・保存遺跡分布図 (S=1/3,000) …… | 52 |
| 第19図 出土遺物 (S=1/4) …………… | 新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査 | |
| 店舗建設に伴う確認調査 | 第43図 調査区位置図 (S=1/5,000) …… | 63 |
| 第20図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第44図 第1調査区 (S=1/600) …………… | 64 |
| 工場建設に伴う確認調査 | 第45図 第2調査区 (S=1/600) …………… | 65 |
| 第21図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 鬼城山第1城門跡の発掘調査 | |
| 秦廃寺確認調査 | 第46図 調査地位置図 (S=1/10,000) …… | 68 |
| 第22図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第47図 調査区位置図 (S=1/200) …………… | 69 |
| 消防署西出張所建設に伴う確認調査 | 第48図 門の遺構 (S=1/60) …………… | 70 |
| 第23図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第49図 城門断面図 (S=1/150) …………… | 71 |
| J A きびじ西部ライスセンター関連施設建設に伴う確認調査 | 第50図 トレンチ5断面図 (S=1/50) …… | 71 |
| 第24図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第51図 柱穴7平・断面図 (S=1/50) …… | 71 |
| 新本川流域における遺跡の分布調査 | 第52図 トレンチ6断面図 (S=1/100) …… | 72 |
| 第25図 調査地位置図 (S=1/5,000) …… | 第53図 出土遺物 (S=1/4) …………… | 74 |
| 第26図 採集遺物(1) (S=1/4) …………… | | |
| 第27図 土壌平・断面図 (S=1/20) …… | | |

| | | | |
|-------------------------------------|----|----------------------------|-----|
| 中須賀遺跡 | | 第65図 出土遺物 3 (S=1/4) …… | 88 |
| 第54図 調査区配置図 (S=1/5,000) …… | 77 | 第66図 出土遺物 4 (S=1/4) …… | 89 |
| 第55図 遺構配置図 (S=1/300) …… | 78 | 第67図 出土鉄製品・土製品(S=2/3) …… | 90 |
| 第56図 地下タンク建設予定地西壁断面図 (S=1/60) …… | 78 | 兔登木21号墳 | |
| 第57図 竪穴住居址・平・断面図(S=1/80) …… | 79 | 第68図 位置図 (S=1/5,000) …… | 95 |
| 第58図 柱穴1-平・断面図(S=1/40) …… | 80 | 第69図 調査前地形測量図(S=1/200) …… | 96 |
| 第59図 出土遺物 (S=1/4) …… | 80 | 第70図 調査後墳丘測量図(S=1/100) …… | 97 |
| 古開遺跡 | | 第71図 墳丘断面図 (S=1/80) …… | 98 |
| 第60図 位置図 (S=1/5,000) …… | 83 | 第72図 蓋石検出状況 (S=1/30) …… | 98 |
| 第61図 遺構配置図 (S=1/200) …… | 84 | 第73図 第1主体平・断面図(S=1/30) …… | 99 |
| 第62図 P-36・P-40遺物出土状況 (S=1/10) …… | 85 | 第74図 第1主体掘り形平面図(S=1/30) …… | 100 |
| 第63図 出土遺物 1 (S=1/4) …… | 86 | 第75図 第2主体平・断面図(S=1/30) …… | 100 |
| 第64図 出土遺物 2 (S=1/4) …… | 87 | 第76図 第3主体平・断面図(S=1/30) …… | 101 |
| | | 第77図 第3主体出土遺物(S=1/4) …… | 101 |
| | | 第78図 墳丘出土遺物 (S=1/4) …… | 101 |

図 版 目 次

| | | | |
|----------------------------------|----|---------------------------------------|----|
| 国分寺公衆便所の改修に伴う確認調査 | | 第13図版 西三軒屋遺跡Ⅱ区全景(真上から) 44 | |
| 第1図版 予定地調査前 …… | 10 | 第14図版 牛神上・上川原遺跡土層断面(西北から) …………… 45 | |
| 共同住宅建設に伴う調査(井手村後遺跡) | | 携帯電話無線鉄塔新設に伴う発掘調査 (伊与部山遺跡) | |
| 第2図版 円形土城断面 …… | 12 | 第15図版 発掘調査地近景 …… | 49 |
| 秦廃寺確認調査 | | 西団地拡張に伴う発掘調査概要報告 | |
| 第3図版 1.秦廃寺全景空撮 …… | 28 | 第16図版 1.A地区遺構検出状況 …… | 53 |
| 2.調査区近景(南から) …… | 28 | 2.A地区検出の住居址 …… | 53 |
| 第4図版 1.塔西辺掘り込み …… | 29 | 3.B地区検出の住居址 …… | 53 |
| 2.東西トレンチ(西から) …… | 29 | 第17図版 土師器窯跡 …… | 54 |
| 新本川流域における遺跡の分布調査 | | 第18図版 1.黒谷古墳群全景(東部地区) …… | 56 |
| 第5図版 遺物出土状況 …… | 34 | 2.9号墳第二次埋葬 …… | 56 |
| 第6図版 出土遺物 …… | 34 | 3.9号墳第一次埋葬 …… | 56 |
| 第7図版 調査地近景 …… | 35 | 4.19号墳 …… | 56 |
| 塔坂古墳群周辺における土砂採取事業 | | 第19図版 1.黒谷古墳群全景(西部地区) …… | 58 |
| 第8図版 塔坂前1号墳全景 …… | 37 | 2.3・25号墳 …… | 58 |
| 第9図版 塔坂前1号墳近景 …… | 37 | 第20図版 1.炭窯全景 …… | 61 |
| 墓地拡張工事に伴う遺跡採集 | | 2.2号炭窯 …… | 61 |
| 第10図版 調査地遠景 …… | 40 | 新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査 | |
| 個人住宅造成に伴う遺物採集 | | 第21図版 1.小砂遺跡全景 …… | 67 |
| 第11図版 土層断面 …… | 42 | 2.小砂遺跡第2調査区 …… | 67 |
| 駅南区画整理事業に伴う発掘調査 | | | |
| 第12図版 西三軒屋遺跡Ⅰ区下層土城 (焼土検出中) …… | 44 | | |

| | | |
|---------------------------|------------------------------|-----|
| 鬼城山第1城門跡発掘調査 | 2. 柱穴礎石検出状況 …………… | 93 |
| 第22図版 1. 第1城門跡調査後1 …………… | 3. P-36遺物出土状況 …………… | 93 |
| 2. 第1城門跡調査後2 …………… | 4. P-40遺物出土状況 …………… | 93 |
| 中須賀遺跡 | 第27図版 1. 調査区西半部（北から） …………… | 94 |
| 第23図版 1. 住居址完掘状況 …………… | 2. 土壙-4 出土遺物 …………… | 94 |
| 2. 住居址内炉状遺構 …………… | 兎登木21号墳 | |
| 第24図版 1. 住居址内柱穴-1完掘状況 …… | 第28図版 1. 調査地遠景 …………… | 102 |
| 2. 廃油タンク建設予定地完掘状況 …… | 2. 21号墳全景 …………… | 102 |
| 古開遺跡 | 第29図版 1. 第1主体蓋石検出状況(目張粘土) …… | 103 |
| 第25図版 1. 古開遺跡調査前（北東から） …… | 2. 第1主体蓋石除去後 …………… | 103 |
| 2. 調査区東半部（西から） …………… | 第30図版 1. 第2主体 …………… | 104 |
| 第26図版 1. 土壙-13（南から） …………… | 2. 第3主体土器出土状況 …………… | 104 |

表 目 次

| | |
|----------------------------------|----|
| 第1表 平成7年度文化財保護法関係届出等一覧表 …………… | 4 |
| 第2表 平成7年度立会確認調査等一覧表 …… | 5 |
| 第3表 西団地拡張に伴う発掘古墳集計表 …… | 59 |

グ ラ フ 目 次

| | |
|----------------------------------|---|
| グラフ1 総社市における埋蔵文化財発掘調査件数の推移 …………… | 3 |
|----------------------------------|---|

1. 総社市埋蔵文化財保護行政の概要

平成7年度の概要

総社市教育委員会では、平成6年7月からそれまで体育も含めて社会教育に関わる領域を包括的に担当していた社会教育課から、文化財保護を担当する部門として文化財室が、独立した組織となり、新たに発足した。また、平成6年8月には、総社市南溝手に既存の出土品等の整理収蔵施設を全面的に改修して「総社市埋蔵文化財学習の館」としてオープンした。担当部門の専門化と整理作業の環境が大きく改善され、より一層きめ細かい文化財保護行政を推進してゆくための条件が整ったといえよう。

<組織> (平成7年度)

総社市教育委員会

教育長 中山 英夫

教育次長 秋田 皓二

参事兼文化財室長

室長補佐 (市史編さん事務局次長兼務)

村上 幸雄 (調整)

加藤 信二 (庶務)

主任 谷山 雅彦 (調査)

主任 高田 明人 (調査)

主事 武田 恭彰 (調査)

主事 平井 典子 (調査)

同 樋上 文子 (庶務)

同 前角 和夫 (調査)

同 高橋 進一 (調査)

同 松尾 洋平 (調査)

総社市埋蔵文化財学習の館

臨時職員 西平登代子・近藤 雅子

1. はじめに

本市は内陸の周囲を丘陵地あるいは山地に囲まれた立地条件から、古くから生活環境に優れていたらしく、高梁川の氾濫原や険しい山地などの一部を除き、明らかに遺跡が存在しないと断言できる場所は事実上皆無と言ってよく、本来はすべての開発工事が文化財に関わるとみなされる。しかしながら、開発を行う側は、総社市は文化財が多いことは理解しているにせよ、一般的に丘陵地の古墳など、外見上の特徴から文化財と認識できるものを除き、地中に包蔵されている文化財に対して認識される場合が少ないのが実情である。また、文化財が豊富に所在していることから、個々がそれぞれに重要で価値があることがあって理解されないという側面もある。残念ながら現実には文化財といえば、開発に対して障害となるものという消極的な面ばかりが見られがちで、なぜ文化財を保護しなければならないかという基本的な問題を語れないまま、意識の隅に追いやられているかのようである。このような現状のなかで、今後わ

れわれは、国民共有の財産である文化財を一体どのように保護・保存してゆくべきかについて、より効果的な方法を考えなければならない。そのためには、文化財の意義と役割について重大なものとして認識し、一般を対象とした普及活動等の機会を積極的につくり、文化財保護に対する意識を高めることが今最も求められているのではなかろうか。

2. 埋蔵文化財

これまで、本市の埋蔵文化財の調査は、開発に伴う緊急調査が圧倒的であった。近年は、調査主体が県ではあるが山陽自動車道・中国横断自動車道の高速自動車道の建設、前川の河川改修に伴う、あるいは岡山県立大学の建設に伴う発掘という未曾有の大規模な調査があいつぎ、多大な成果がおさめられているが、それ以後大規模な開発は一応沈静化しているようではある。

現在進行しつつある総社市内での開発は、農地にかかわるほ場整備や、住環境の改善をめざす区画整理事業が大きなもので、あとは民間のアパート等の建設がやや目立つ程度である。これらによって調査される遺跡は、この数年間を振り返れば漸減傾向と言える。

主要な発掘調査として、公共事業関係では、総社駅南区画整理事業に伴う発掘調査の2年次め、県営新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘の最終年度であり、いずれもかなりの調査面積を消化した。また、民間の開発事業に伴うものとしては、水島機械金属工業団地西団地の拡張部分約10haを対象とした調査があった。その他短期間の調査については、調査報告を掲載したのでそちらを参照されたい。また、軽微な立会や確認調査は表にまとめた。これらについては、将来にわたっては、利用しやすい形にまとめて昔の総社のありさまを理解できるための資料として活用されるよう検討をすすめたい。

これらの開発行為に伴う埋蔵文化財の保護策としては、発掘調査を行ったもの、掘削の及ぶ範囲に限って確認調査あるいは立会調査を行ったものなどがある。その大要は別項に掲げた。

開発行為に対する文化財保護の方法については、いずれの立場においても非常に判断のむずかしい場合もあるが、本市においては、平成7年度から共同住宅等の建築確認申請書について全数をチェックするという方法を取り、基礎的データの収集に努めることとしている。この直接的な契機は、総社市内の詳細な遺跡分布図の完成していないという事情もある。その一方で、遺跡地図を公表すると、それに所在が掲載されていない場所の開発行為を見逃してしまうおそれのあることが予想されることから、遺跡地図を一般向けに公表することがためられるのは事実ではある。今後は、これまで調査を行った遺跡すべてを収録した資料、あるいは今後さらに内容が変わりうることを明記したうえで周知の遺跡を掲載した遺跡地図の公表することが文化財保護の基本であることを認識し、早急に最善の解決方法をとらなければならないのはいくまでもない。

3. 普及活動及び事業等

おもなものは、総社市埋蔵文化財学習の館における展示室の公開、小学生を対象とした文化財教室の開催、各地博物館等施設への出土遺物の貸出、写真資料等の貸出などがある。

埋蔵文化財学習の館の利用は、市内の小学校児童の授業の一環としての見学や、老人福祉施設のレクリエーション活動の一部としての利用が定着してきたようであり、幅広い年齢層の利用を特筆できる。また、展示解説は新たにカラー印刷のものを平成7年度で作成一層充実をはかる予定である。また、利用者数は前年度775人に対し1004人へと増加傾向を示している。

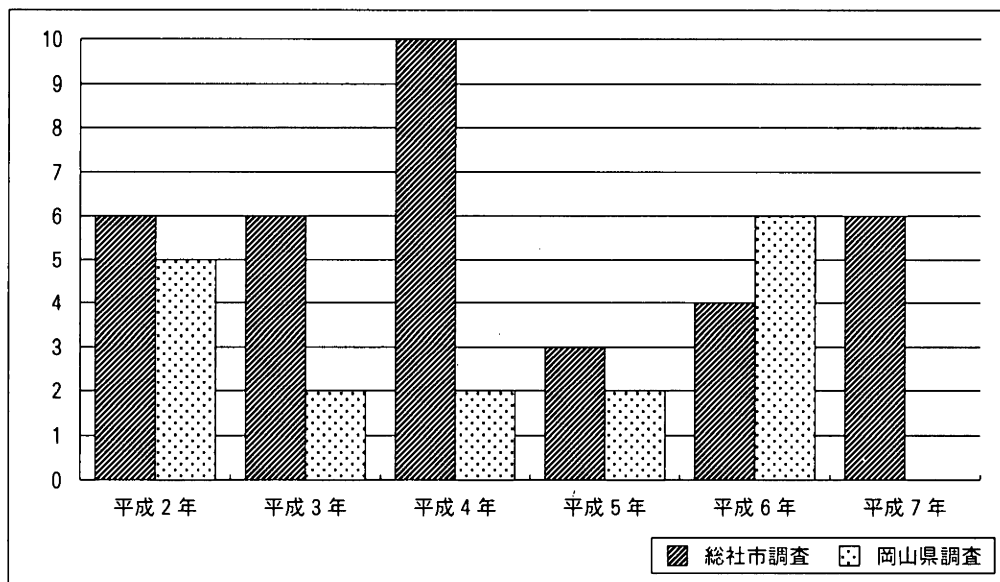
文化財教室は、平成7年10月22日（日曜日）に行った。参加者は14組32名。幸い好天に恵まれ、埋蔵文化財学習の館南側のグラウンドで火おこし、炊飯を行い、食事の後施設の見学、ガラス玉作りといった内容であった。

資料の貸出状況は、展示のための資料の貸出が2件、分析のための資料の提供が1件、また、写真の撮影及び掲載許可が5件などであった。

報告書の刊行は『総社市埋蔵文化財調査年報5』のみであった。一方、総社市教育委員会へご寄贈いただいた図書資料は延べ484冊であった。関係の方に厚くお礼申し上げます。

その他の事業として、平成6年度に新規に市指定史跡となった総社宮に標柱の設置を行った。

(高 田)



グラフ1 総社市における埋蔵文化財発掘調査件数の推移

文化財保護法98条の2（埋蔵文化財発掘調査通知）の届出数

【岡山県埋蔵文化財報告】21～26から作成

ただし、暦年ごとの集計である

また、必ずしも調査した遺跡数（たとえば古墳の数）を反映したものではない

2. 立会及び確認調査等の概要

表2 平成7年度立会確認調査等一覧表

1. 公共事業に関連するもの

| 番号 | 所在地 | 原因等 | 種別 | 調査日 | 出土遺物・遺跡の概要等 |
|----|-------------|---------|----|-------------|-------------------------|
| 1 | 北溝手646-1 | 上水道管渠埋設 | 不時 | H7. 6. 5 | 弥生土器片 |
| 2 | 総社1746外 | 上水道管渠埋設 | 不時 | 6. 5 | 遺構存在する可能性あり |
| 3 | 福井 | 土道路 | 分布 | ————— | 残土処分地内の分布調査 古墳はない |
| 4 | 櫃谷3032-1外 | ほ場整備 | 不時 | 6.16 | 工事中 岩石まじりの洪水層など |
| 5 | 上林996 | 公衆便所改修 | 確認 | 8.28 | 備中国分寺(史跡現状変更) 報告P. 9 |
| 6 | 真壁1435-2 | 下水道 | 不時 | 9. 1 | 砂層 |
| 7 | 久代2601外 | 消防署新設 | 確認 | 9.12 | 報告P. 29 |
| 8 | 原1709外 | ほ場整備 | 立会 | 9.13 | |
| 9 | 久代1233 | 市道改良 | 不時 | 10.27 | 表土下は砂層 |
| 10 | 三輪653 | 市道改良 | 立会 | 10.30・31 | 遺構遺物なし |
| 11 | 小寺880,886-1 | 市道改良 | 確認 | 11.7・8 | 古墳 兎登木21・22号墳 |
| 12 | 井尻野1658-2外 | 下水道 | 不時 | 11.15 | 遺構遺物不明 |
| 13 | 小寺 | 市道改良 | 確認 | 11.24 | 藪田兎登木線 遺構遺物なし |
| 14 | 藪297 | 市道改良 | 不時 | 11.28 | |
| 15 | 久米225外 | 市道改良 | 不時 | 12. 3 | 一部に遺跡? |
| 16 | 見延1290外 | 橋梁工事 | 不時 | 12. 3 | 道路付け替え部 磨滅した土器片ごく少量 |
| 17 | 藪297 | 市道改良 | 不時 | 12. 3 | 951128調査地点 遺構遺物なし |
| 18 | 三輪1164外 | 区画立会 | 立会 | 12. 5 | 低湿地状 |
| 19 | 上原356 外 | 市道改良 | 不時 | 12.25 | 微高地? 遺構遺物なし |
| 20 | 三輪1123-1外 | 区画立会 | 立会 | H8. 1. 5・ 9 | 溝状遺構あり 遺物なし |
| 21 | 小寺 | 市道改良 | 立会 | 1.26・29 | 藪田兎登木線 |
| 22 | 総社731 | 標識設置 | 立会 | 2. 1 | 総社宮 池のへりで池がもとは広がったと思われる |
| 23 | 北溝手802 | 市道改良 | 立会 | 2. 9 | 遺構遺物なし |

2. 民間の開発行為等に関連するもの

| 番号 | 所在地 | 原因等 | 種別 | 調査日 | 出土遺物・遺跡の概要等 |
|----|-----------|-----------|----|----------|-----------------------|
| 24 | 下林1559-5外 | 造成 | 不時 | H7. 4.18 | 須恵器片など 古墳の可能性あり |
| 25 | 下林1552 | 池の減水による | 不時 | 4.18 | 遺物採集 国分尼寺に関連? |
| 26 | 下林1559-1外 | 植林 | 不時 | 4.18 | 古墳の存在する可能性あり 遺物なし |
| 27 | 下林1700-1外 | | 不時 | 4.22 | 国分尼寺付近 遺物採集 |
| 28 | 藪421-1 | 墓地 | 不時 | 5.19 | 弥生土器片 古墳 埴輪採集 報告P.38 |
| 29 | 久代1271外 | 造成 | 不時 | 5.22 | 埴輪片採集 古墳の存在した可能性あり |
| 30 | 新本25 | 工場団地 | 不時 | 5.22 | 探土予定地 平坦面だが遺構遺物なし |
| 31 | 新本161 | 墓地 | 不時 | 5.22 | 小道を開いた排土中から土器片採集 立坂付近 |
| 32 | 井手1056-1 | 共同住宅 | 確認 | 5.22~25 | 溝・土壙 井手村後遺跡 報告P.11 |
| 33 | 久代43-1外 | | 不時 | 5.24 | 埴輪片採集 午頭天王社頂上付近 |
| 34 | 八代 487-1外 | 植林 | 不時 | 5.24 | 弥生・土師・須恵器・鉄滓等採集 |
| 35 | 三輪1587-1外 | 個人 | 分布 | 6. 1 | 埴輪片 埋蔵文化財学習の館へ持ち込まれる |
| 36 | 上原481-1 | 店舗 | 立会 | 8. 1~ 3 | 遺構遺物なし |
| 37 | 三輪 | 独身寮 | 不時 | 6.23 | 不明 |
| 38 | 南溝手199 | 共同住宅(浄化槽) | 立会 | 8. 1~ 4 | 須恵器片少量 |

| 番号 | 所在地 | 原因等 | 種別 | 調査日 | 出土遺物・遺跡の概要等 |
|----|----------------|-----------|----|----------|------------------------|
| 39 | 駅前2-1-115 | 店舗付き住宅 | 立会 | H7. 8. 2 | 砂質土 |
| 40 | 上林252-1 | 個人住宅 | 不時 | 8. 5 | 遺跡の存在する可能性あり |
| 41 | 駅前2-1-115 | 店舗 | 不時 | 8. 5 | 遺構面まで掘削及ばず 39と同じ |
| 42 | 小寺1672-2外 | 土取り | 不時 | 8.13 | 報告P.35 |
| 43 | 久代4894外 | 擁壁工事 | 不時 | 8.22 | 盛土内 |
| 44 | 中央4丁目3 | 建物 | 不時 | 9. 1 | 盛土内 |
| 45 | 総社1145 | 造成 | 不時 | 9. 3 | 須恵器 土師質土器片 |
| 46 | 総社1167 | 自動車工場 | 不時 | 9. 3 | 円礫層 |
| 47 | 総社899 | 造成 | 不時 | 9. 8 | 遺構面まで掘削及ばず 微高地縁辺? |
| 48 | 中央1-5-113 | 建物 | 不時 | 9.10 | シルト層 |
| 49 | 久代527-1 | 造成 | 不時 | 9.14 | 住居址?露出 弥生土器片・剥片採集 |
| 50 | 中央1-4-109 | 駐車場 | 不時 | 9.15 | |
| 51 | 小寺1336-1 | 造成 | 不時 | 9.20 | 遺構・遺物なし |
| 52 | 中央3-15-104・114 | 飲食店 | 立会 | 9.21 | 遺跡内(法57条) |
| 53 | 南溝手334-2 | 浄化槽 | 不時 | 9.26 | 詳細不明 |
| 54 | 黒尾242-1 | 擁壁工事 | 不時 | 9.26 | 表土下は砂層・砂質土 |
| 55 | 中央3丁目14 | 建物 | 不時 | 9.30 | 職安の西 |
| 56 | 中央4丁目1 | 店舗 薬局 | 不時 | 9.30 | 盛土内 |
| 57 | 溝口369-10 | 建物 | 不時 | 9.30 | |
| 58 | 井手 | 共同住宅 | 不時 | 10.24 | |
| 59 | 井手698-1外 | 建物 | 不時 | 10.29 | 包含層あり 円礫層が露出 |
| 60 | 真壁 | 建物 | 立会 | 11. 6 | 遺構遺物なし |
| 61 | 久代223 | 駐車場 | 不時 | 11. 7 | 久代大塚に近接 緩斜面 周辺に遺跡の可能性 |
| 62 | 中央3-15-101・108 | 共同住宅 | 確認 | 11.15 | 遺跡内(法57条) 土師器 報告P.23 |
| 63 | 北溝手358-2 | 造成 | 不時 | 11.15 | 遺跡の一部 弥生・土師器片 報告P.40 |
| 64 | 北溝手595 | 建物 | 不時 | 11.15 | 表土除去のみ |
| 65 | 福谷672 | 土取り | 不時 | 12. 3 | 焼土塊 時期不明 |
| 66 | 中央3-15-104・114 | 共同住宅 | 立会 | 12. 4 | 掘削浅く不明 |
| 67 | 井手 | 共同住宅 | 立会 | 12. 4 | 58と同じ |
| 68 | 中央2丁目 | 学習塾 | 立会 | 12. 5 | 微高地 遺構遺物なし |
| 69 | 中央3-9 | 共同住宅 | 不時 | 12. 7 | 微高地縁辺?遺構遺物なし |
| 70 | 南溝手280-1 | 共同住宅 | 立会 | 12. 8 | 土器片ごく少量 土師質? |
| 71 | 富原1073 | 個人住宅? | 不時 | 12.25 | 遺構・遺物なし |
| 72 | 久代4703-1外 | 建物(JA) | 確認 | 12.25 | 報告P.31 |
| 73 | 真壁810-6外 | 造成(店舗) | 確認 | 12.26 | 報告P.26 |
| 74 | 駅前 | 住宅 | 立会 | H8. 1. 9 | 造成土まで掘削 |
| 75 | 中央6丁目 | マンション | 立会 | 1.16・18 | 溝状の遺構を確認 |
| 76 | 下原694-10 | 通信中継局 | 立会 | 1.24 | 伊与部山遺跡 箱式石棺(保存) 報告P.50 |
| 77 | 中央4丁目 | 住宅 | 立会 | 1.29 | 溝を確認 |
| 78 | 井尻野385-1外 | 工場建設 | 確認 | 2. 7 | 遺構遺物なし 報告P.26 |
| 79 | 真壁1175-6・8 | 個人住宅(浄化槽) | 立会 | 2.28 | 微高地だが、遺構遺物なし |
| 80 | 総社680-1 | 個人住宅 | 立会 | 3. 7 | 掘削が浅く、旧水田層までとまった |

※番号は市内調査地点位置図(第2図・第3図)に示した番号と一致する。



第3図 平成7年度調査地点位置図2 (S=1/30,000)

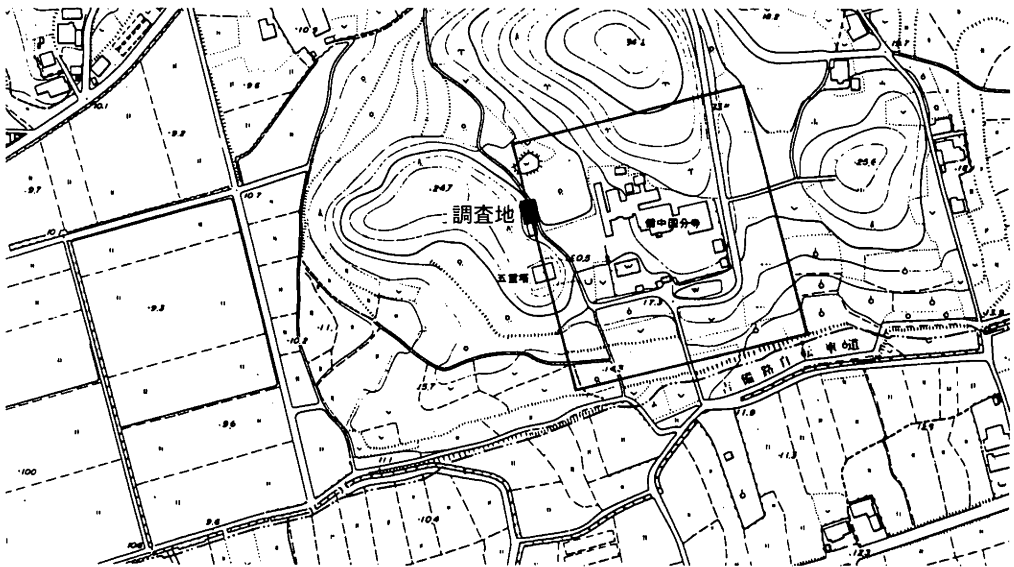
国分寺公衆便所の改修に伴う確認調査

遺跡名 備中国分寺跡
所在地 総社市上林996-4番地
調査期間 平成7年8月25日・28日
調査概要

備中国分寺跡は、市内南西部の三須丘陵に位置する。三須丘陵周辺は、古墳時代後期にこもり塚古墳・江崎古墳などの巨石墳や多くの横穴式石室が築かれた。奈良時代には、備中国分寺・尼寺が建立された。

備中国分寺跡は昭和42年に国指定史跡に指定された。昭和45年に県立自然公園吉備路風土記の丘条例が公布され、昭和46年から岡山県教育委員会が発掘調査を実施した。調査の結果、南門・中門の規模や西・東築地位置が明らかになった。この時の調査は、主に南部分が中心であった。その後、昭和63年に境内地内で地中レーダ探査を行い、中軸線から約14m東で塔基壇が確認された。また、平成2年から平成5年にかけて五重塔が解体修理されたのに伴い、平成3年に防火水槽建設に伴う確認調査、平成6年に境内池の改修に伴う立会調査などが行われた。これらの調査では、創建時の遺構は検出されなかった。

今回の調査は、国分寺五重塔北にある公衆便所が昭和40年頃に設置され老朽化したため、別の場所に立て替えることが計画されたのに伴って実施した。国分寺跡の西築地跡は、五重塔の南で確認されている。この確認されている築地跡が今回建設が予定されている竹藪に延びてい



第4図 調査地位置図 (S=1/5,000)

ることが予想された。調査前の現地は、五重塔の位置する丘が北に下がり始める部分にあたり、明瞭に東側が下げられていた。本来は、この段が南に伸びていたと考えられるが、公衆便所が位置する箇所はさらに東に隣接する市道の高さまで下げられていた。また、公衆便所の西側には大きな凹部があり、ため池として利用されていたと考えられる。

調査は、建設予定地内の南よりで東西方向にトレンチを設定して実施した。ここでは、地山が表土下30cmで認められる。山際では、地山を溝状に掘り込んでいる。溝の底から東に幅約2.5mの地山の高まりがあり、これより東は自然の傾斜で下がっていく。山側の溝は浅く、時期が不明である。東斜面では、若干の土師器片と瓦片が出土した。地山の高まりは時期を確定できないが築地の基礎である可能性が考えられた。このため、北にトレンチを1本追加し調査を行った。ここでも、地山の高まりが確認され東斜面の堆積中に焼土・炭が認められた。

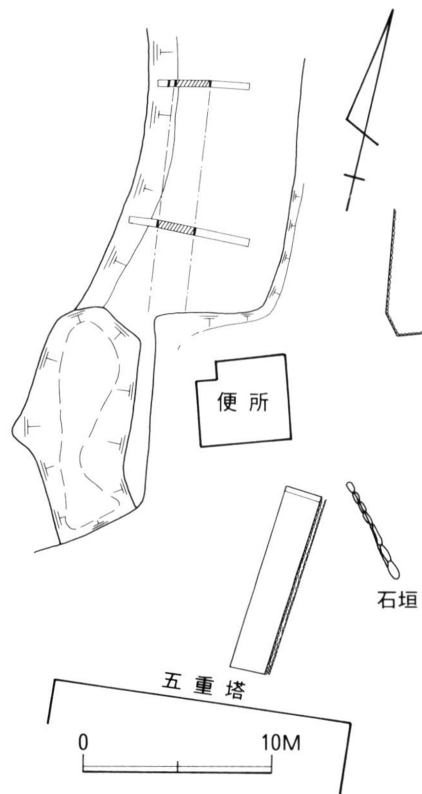
今回の調査では、築地想定位置で地山の整形跡が認められ、西端築地の基礎と考えられた。このため、建設予定の建物を公衆便所西の凹部に変更することとした。(谷山 雅彦)



調査地遠景（北東から）



第1図版 予定地調査前



第5図 トレンチ位置図 (S=1/400)

共同住宅建設に伴う発掘調査

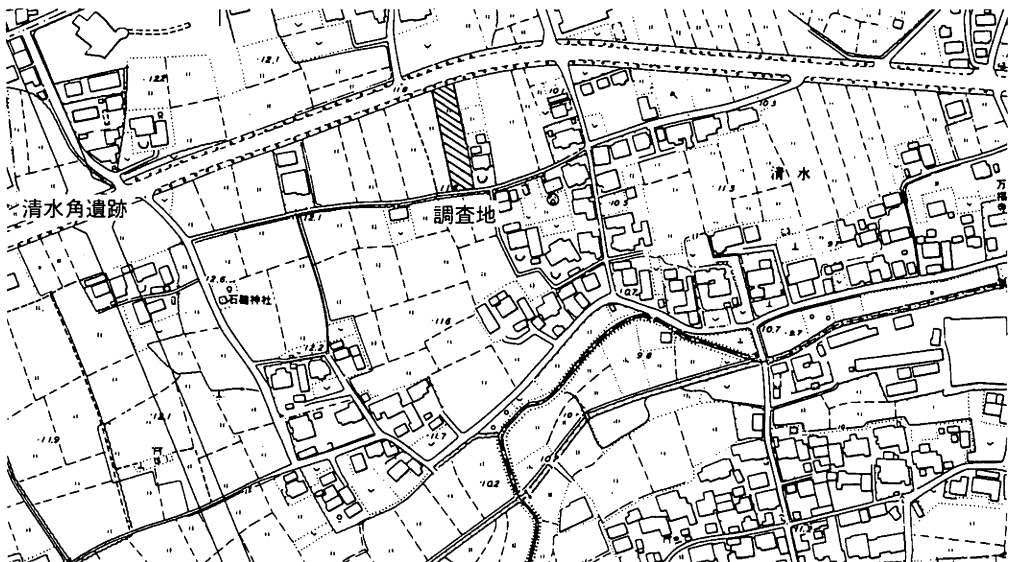
| | |
|------|--------------------|
| 遺跡名 | 井手村後遺跡 |
| 所在地 | 総社市井手1056-1 |
| 調査期間 | 平成7年5月22日～25日 |
| 調査面積 | 約100m ² |
| 調査概要 | |

本調査地は、市街地中心から東方約3kmに位置する。ここでは区画整理事業は行われておらず、古い地形が現在でも観察される地域である。調査地南には市内でも顕著な大きな河道跡が認められる。

近年本調査地周辺では、東西に通る幅16mの都市計画街路総社駅前線が南北に通る農道まで開通していることから、開発が急速に進みつつある。この道路と都市計画道路刑部一三須線が交差する地点周辺が清水角遺跡である。清水角遺跡以東では、微高地の土層が立会などで確認されているが、遺構は検出されていない。しかし、東端部分では農道が国道429号線に拡幅後昇格することから、事前の発掘調査が実施されており、遺跡の広がりが見らくなった。

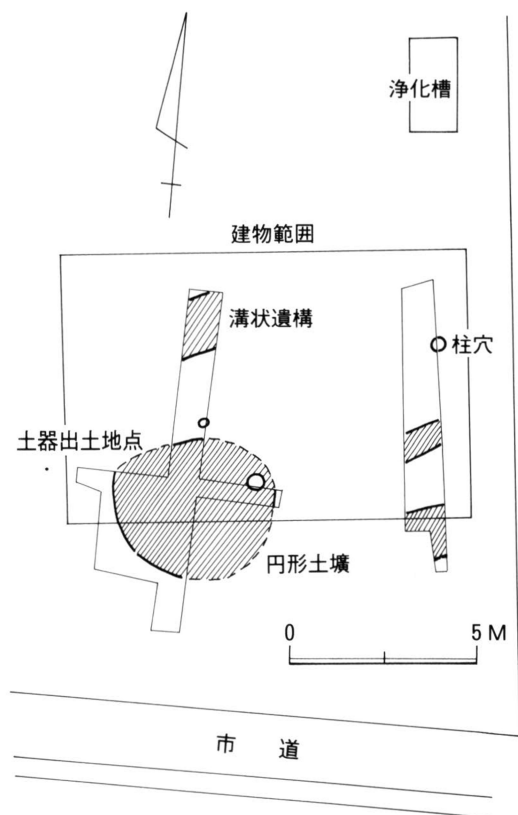
このため、本調査地においても事前の協議を行い、浄化槽設置予定地の確認調査を実施した。確認調査で、柱穴が認められたため、建物予定地の発掘調査と擁壁掘削時の立会調査を実施した。

調査は、建物予定地にトレンチを2本設定し遺構の検出を行った。調査の結果、3条の溝状



第6図 調査地位置図 (S=1/5,000)

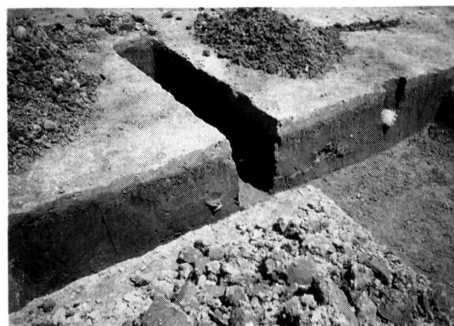
遺構と円形土壇と柱穴3を検出した。溝状遺構は、残存状況が悪く深さ5～10cmであり、トレンチ外に多くは延びない状況であった。円形土壇は、トレンチ南部分で検出され多くの土器を包含することから、全体を調査した。当初住居址を想定したが、柱穴は認められず、径が最大で4.2mと小型であることから、ここでは土壇として考えた。深さは約50cmで遺物は底より10cmほど高い位置にあり、南から北に向けて堆積していた。このことから、遺物は土壇が埋まり始めた早い段階にまとめて廃棄されたものと考えられる。また、土壇の西で甕形土器が検出されたがそれに伴う穴などは検出できなかった。擁壁掘削時の立会では遺構・遺物とも認められなかった。(谷山)



第7図 発掘調査位置図 (S=1/200)



溝検出状況



第2図版 円形土壇断面

遺物（第8図～第15図）

遺物は、土器がコンテナ22箱分出土しているが、そのほとんどが一土壙からの出土である。この土壙以外の出土遺物としては、第7図の遺物出土地点から出土した甕（第8図1）の他、図化にたえないが溝から出土した中世の土鍋片や吉備系土師器碗片を含め、小片数十点がみられるにすぎない。

なお、調査担当者によると、土壙内出土土器はまとめて検出されたとのことである。

以下、図示したものについて若干の説明を加えたい。

土器出土地点（第8図1）

1は、この地域では一般的な中期末の甕である。この地点では1以外にも数片の土器が出土しており、すべて胴部の小片であるが、中期に属するものと思われる。

円形土壙（第8図2～第15図）

壺（2～23）

2～5は、頸部を沈線で加飾する典型的な長頸壺で、図示したものがすべてである。2は、頸部下端付近にハケメの工具による刺突文を巡らす。

6、7も長い頸部をもつもので、この他に3点が出土している。6は、外面および口縁部内面に赤色顔料を塗布する。

広口壺8～14、16～21は、頸部と胴部の境が明瞭なものと、頸部から胴部へ緩やかに広がっていくのがみられる。14は甕に近い形態をもつ。20・21は口縁端部を丸く納めるもので、この他に1点が認められる。

15は台付直口壺で、口縁直下に凹線文が巡る。1点のみ出土している。

22、23は、壺の底部と思われる。

甕（24～62）

口縁形態には、古い様相と新しい様相をもつものがみられ、24～30は、口縁形態に中期末の様相を色濃く残す。

48は、口縁の拡張がほとんどなく、端面にも凹線文がみられないことから、新しい様相をもつものである。

49～51は、壺と甕の間接的な形態をもつがここでは甕として扱った。

52～62は、形態から甕の底部と思われる。

これらのうち、タタキメを有するものは27のみで、胎土も他の土器と異なりキメが細かい。

高坏（63～74）

出土した高坏は、小型で口縁端部を丸く収める63と、これに類似した口縁部1点を除き、他はすべて中型のもので、64～69同様口縁端部を外方に拡張し端面に凹線を数条施している。

脚部の透かし孔はすべて円形で、中には透かし孔が突き抜けず、竹管状の刺突文になっているものもある。69・72は単独で8箇所、65・68は2個一対で5カ所、74は現存で縦一列に4個5カ所の透かし孔をもつ。竹管状の文様は、67が4個5カ所、73が2個一対で5カ所の配置をもつ。

74のように、脚柱部全体に透かし孔が施され脚裾部に線状の文様がみられるものはこの1点のみであるが、この文様パターンは、備前・備中南部に特徴的なものである。

鉢（75～81）

75は、中期的な様相の強いもので、1点のみ出土している。

76・78は、口縁形態が同時期の甕と共通するため、口縁部のみでは器種の判別がしにくいもので、脚台が付くものと思われる。80も稀ではあるが、甕等に同様の口縁形態をもつものがある。

77・79は、この時期の鉢の口縁形態としては少なく、新しい様相が強い

81は、中期末の高坏型鉢の系譜を引くもので、脚は付かない可能性が高い。

器台（82～84）

82は、小型の器台で、方形の透かし孔を4箇所に穿つ。外面は、タテ方向のハケメを施した後、タテ方向のヘラミガキによって調整している。

器台の口縁部83は、口縁端面に凹線を施した後9本1単位のキザミメを施文するが、小片のため数カ所に存在するかどうかは不明である。84とは別個体と思われる。

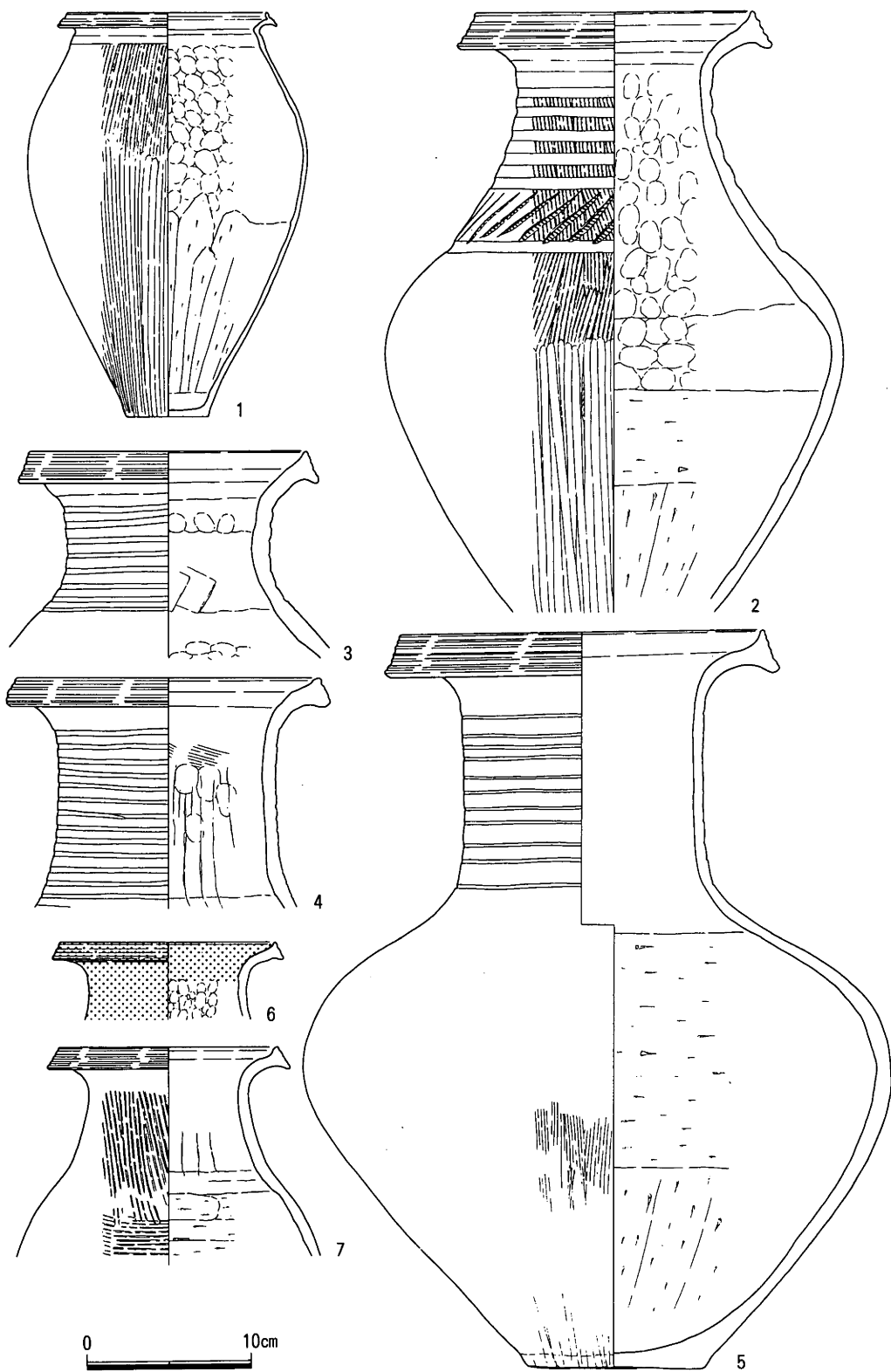
84は、方形の透かし孔を5カ所に配し、内外面に粗いハケメを施す。

以上、出土土器を概観したが、土壌内出土土器は甕等、一部にやや古い様相と新しい様相が混在するものの、高坏口縁形態の斉一性にみられるように同一時期の一括廃棄遺物と考えられる。従来の編年でいえば鬼川市1式の新相にあたる。約2～3km離れた南溝手遺跡（註1）からも、同時期の土器が多数出土しており、同様の組成を示す。

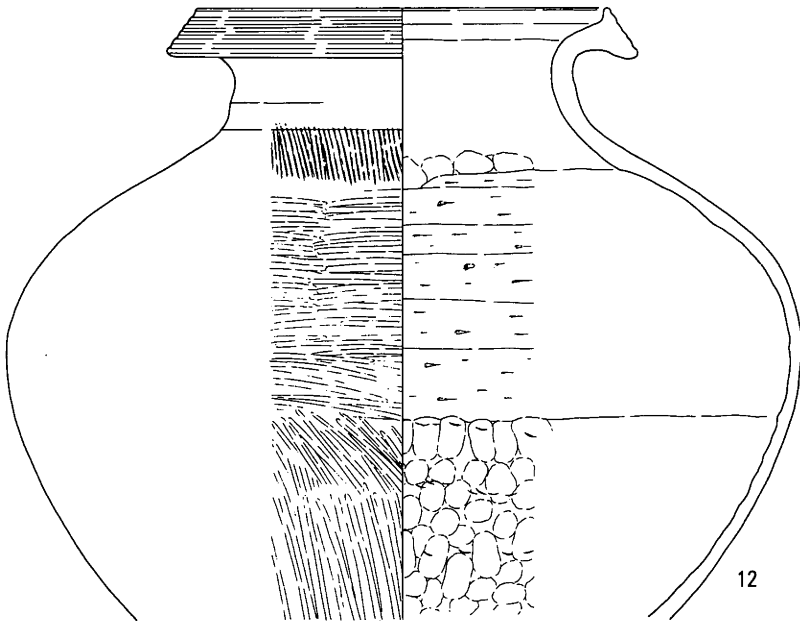
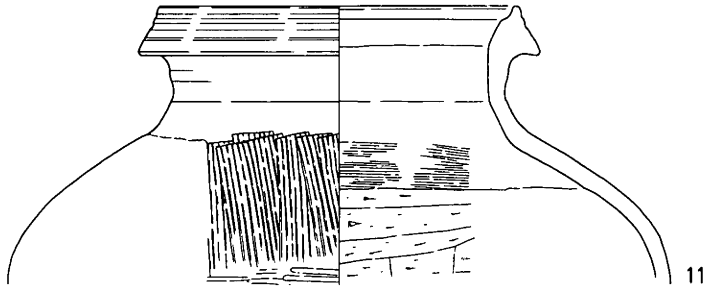
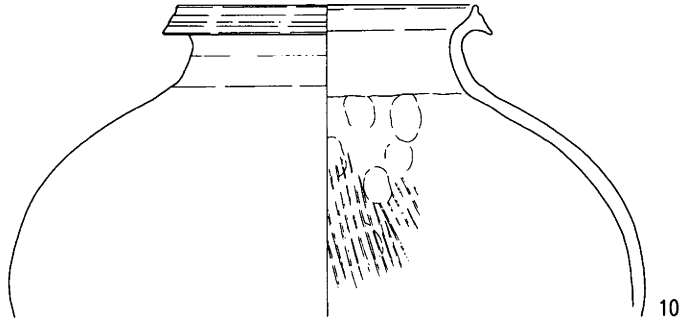
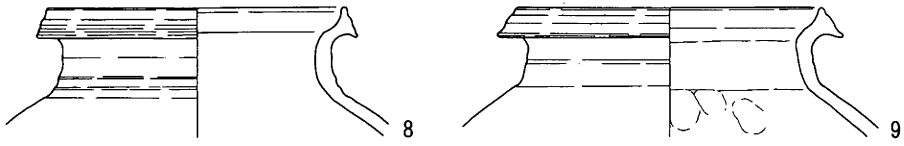
調査担当者によると、工事と競合し、時間的制約もあったため、土壌内すべてを掘りきったわけではないが、遺物はほぼ回収したとのことで、現状での組成から一定程度の傾向はつかめるものと思われるため、各点数を記すこととする。壺30点（24%）、甕51点（41%）、高坏19点（15%）、鉢16点（13%）、器台8点（7%）の計124点である。圧倒的に甕が多く、続いて壺、高坏となるが、器台の占める比率が比較的高いことが注目される。（平井 典子）

註1 平井泰男他「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995

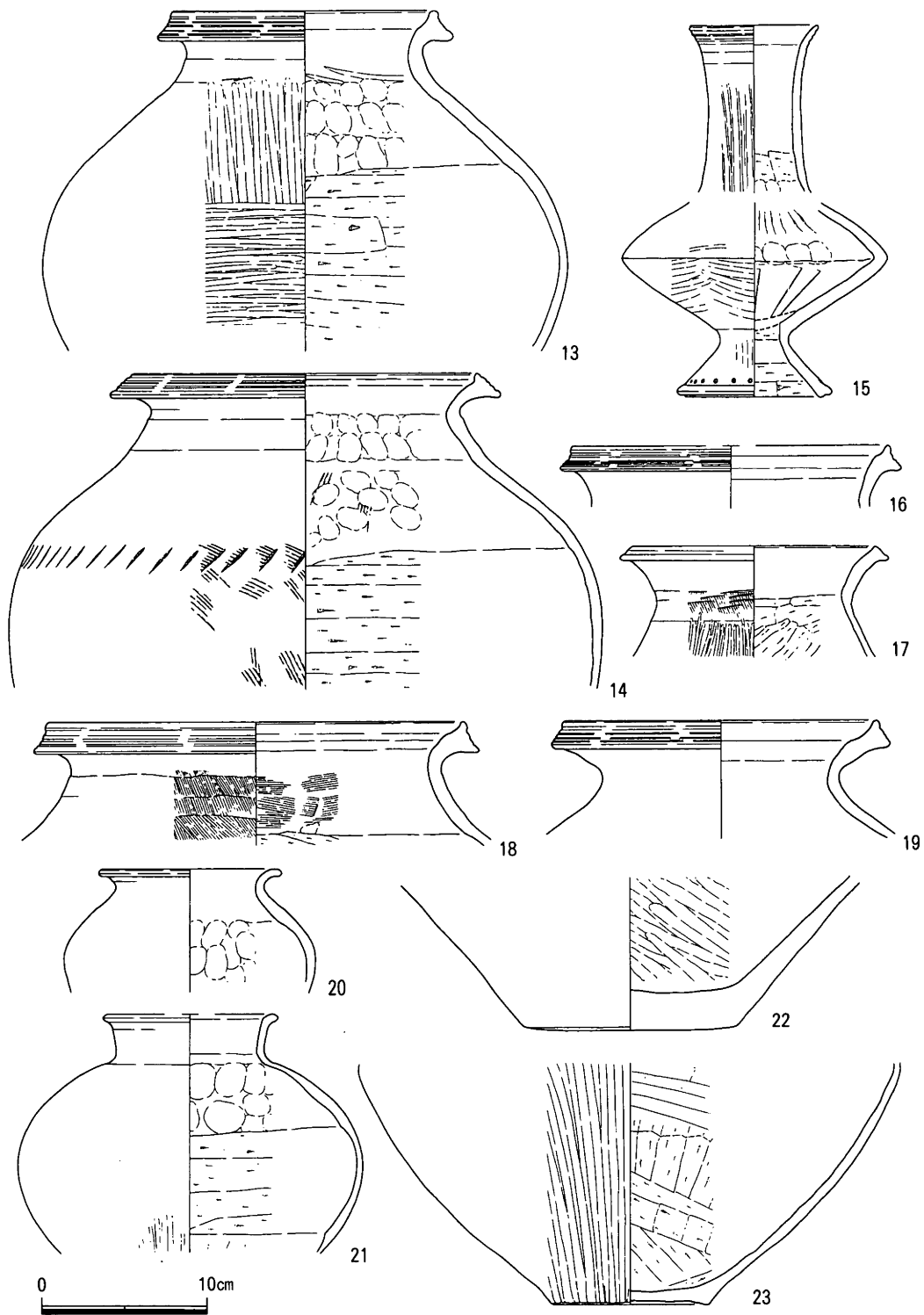
註2 壺、甕、鉢は口縁部の個体数で、高坏は台付鉢の脚部との判別が困難なため口縁部の個体数で、器台は特徴的なため筒部等も含めて個体数を割り出した。



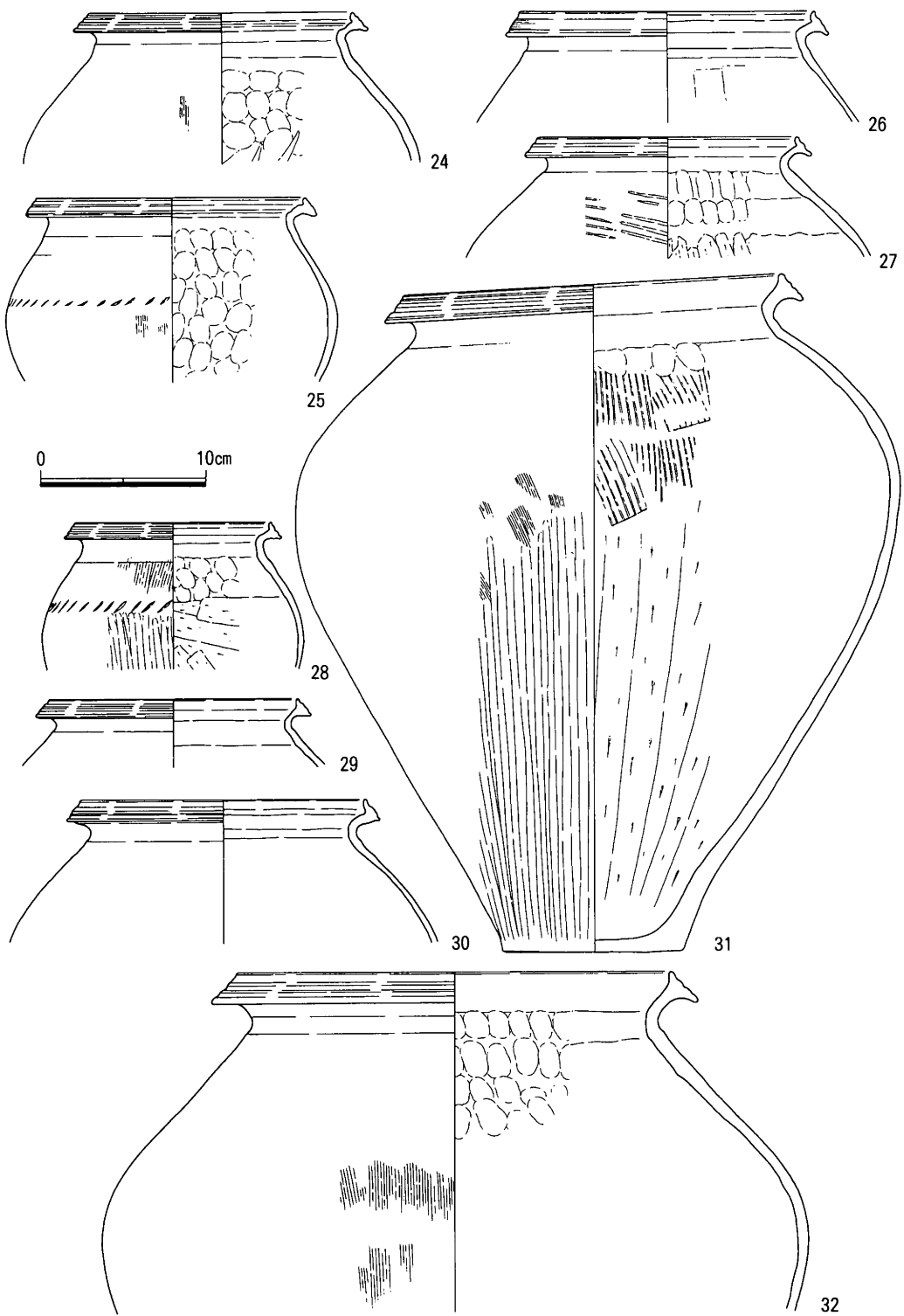
第8図 出土遺物1 (S=1/4)



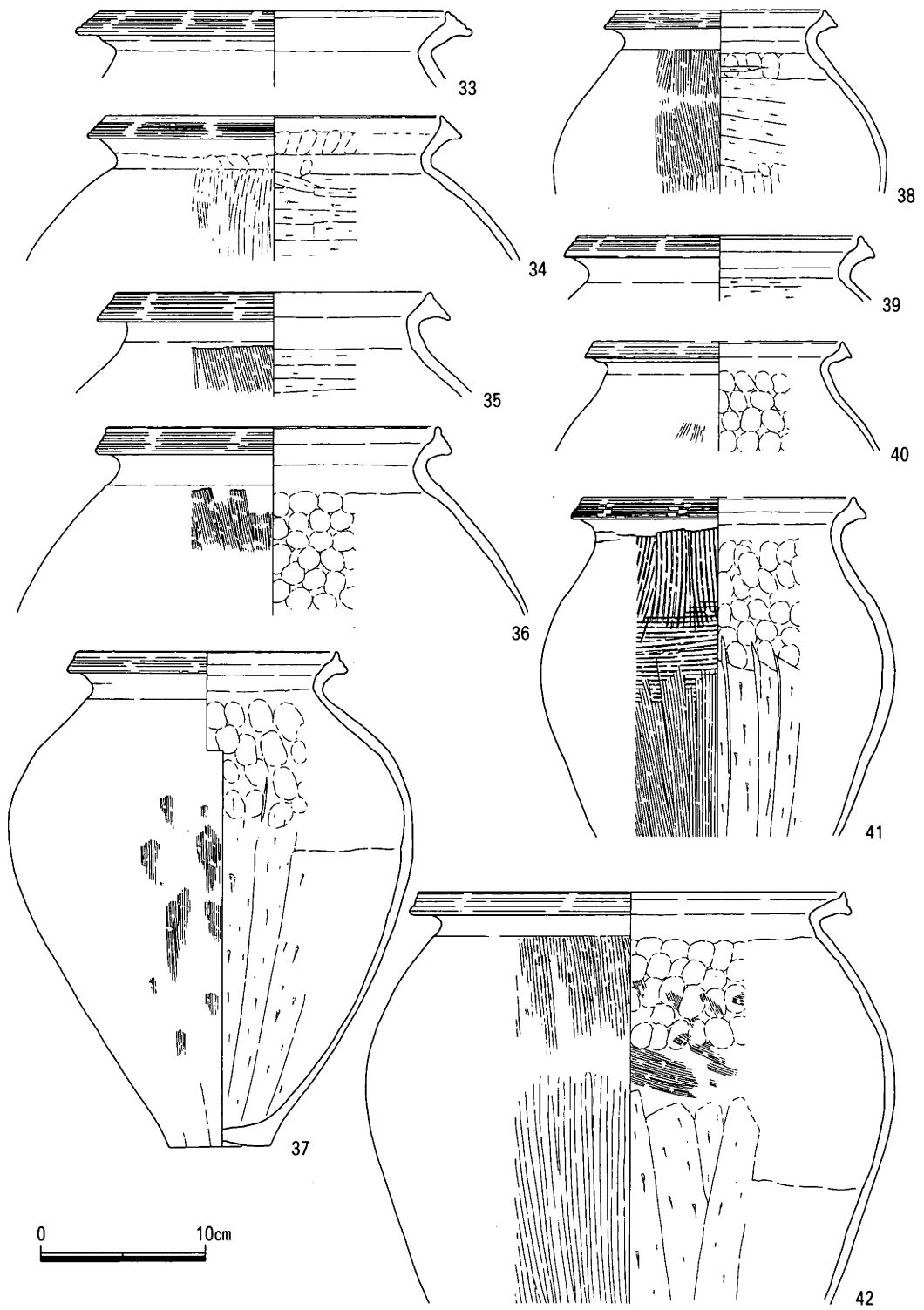
第9図 出土遺物2 (S=1/4)



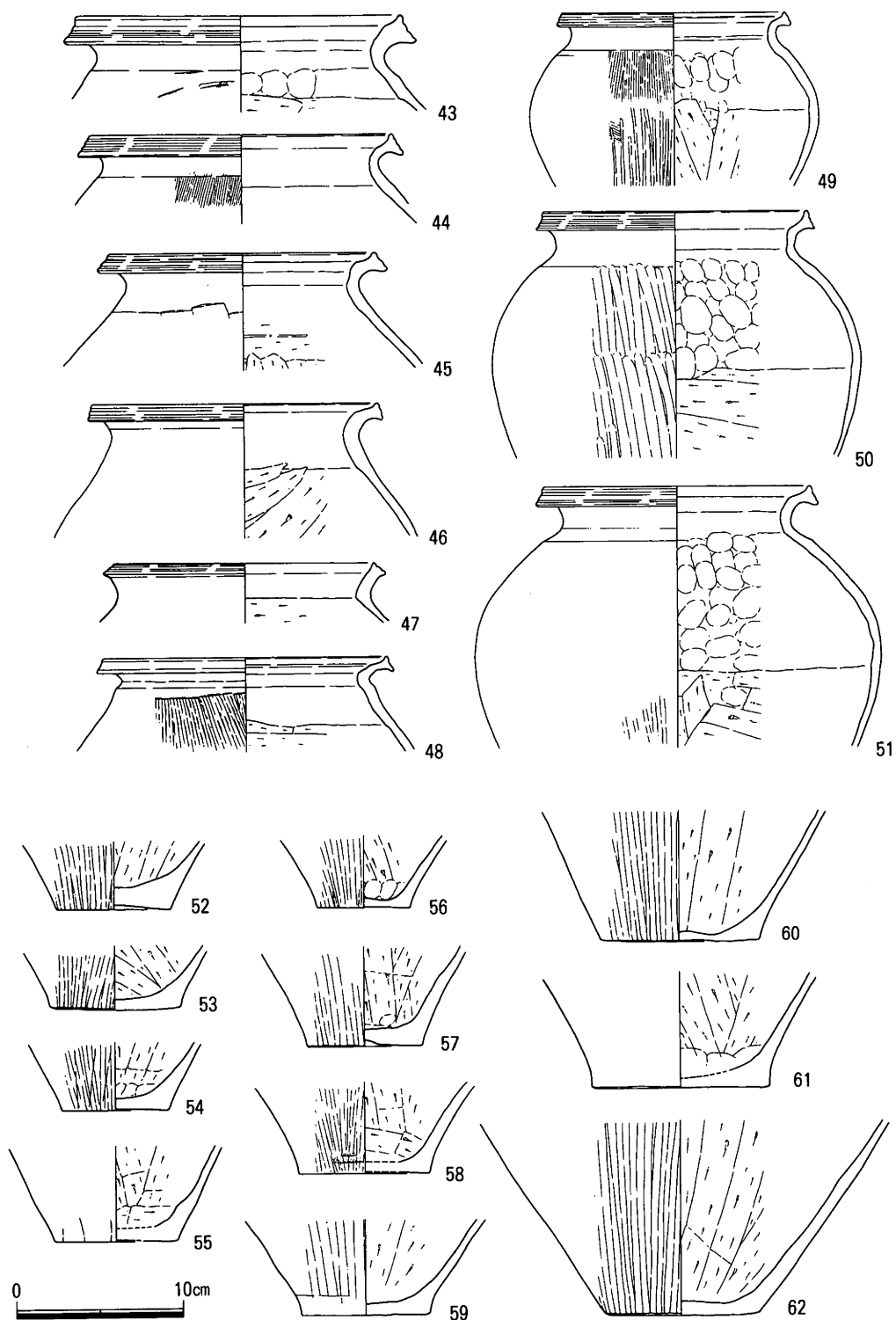
第10図 出土遺物 3 (S=1/4)



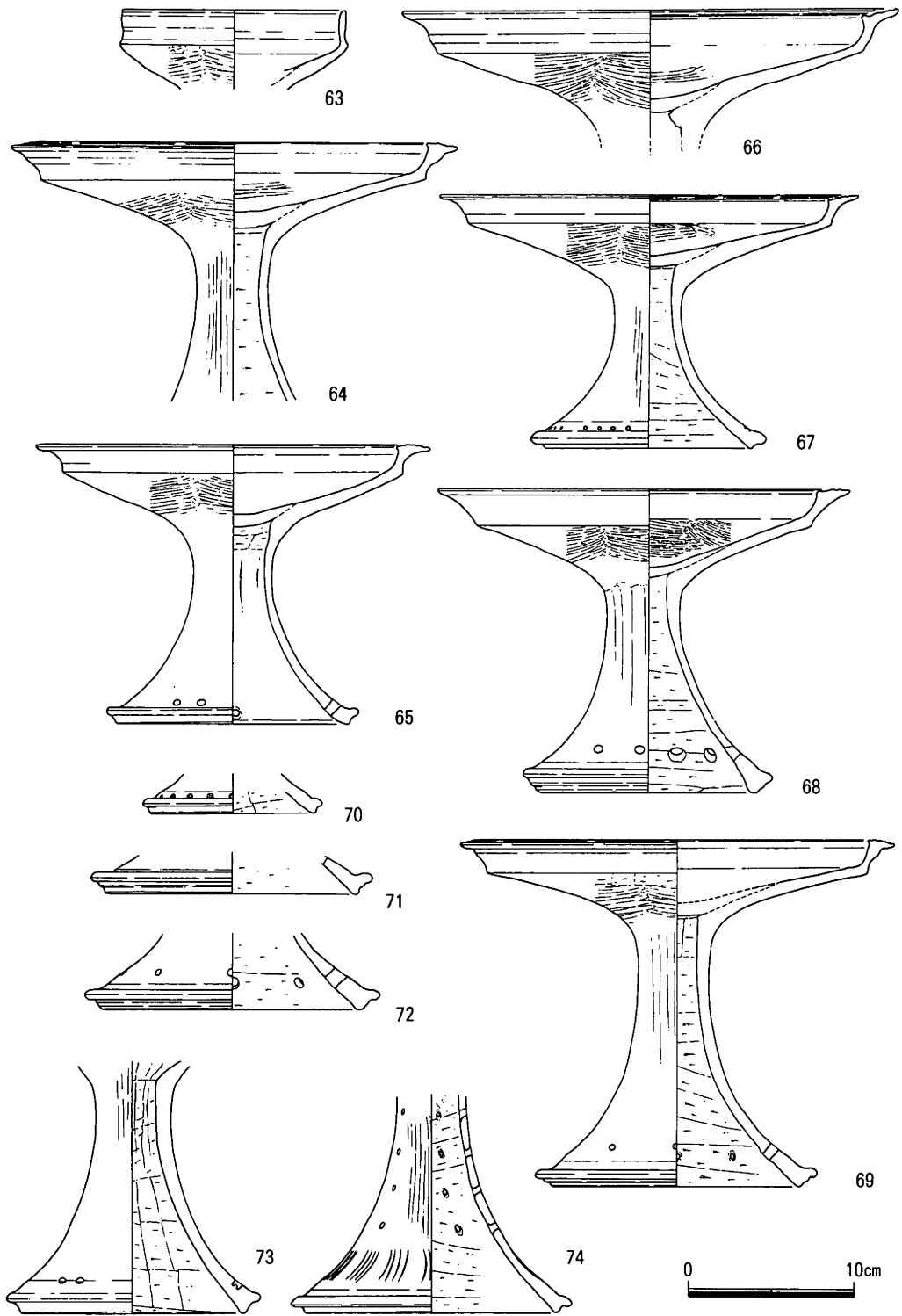
第11図 出土遺物4 (S=1/4)



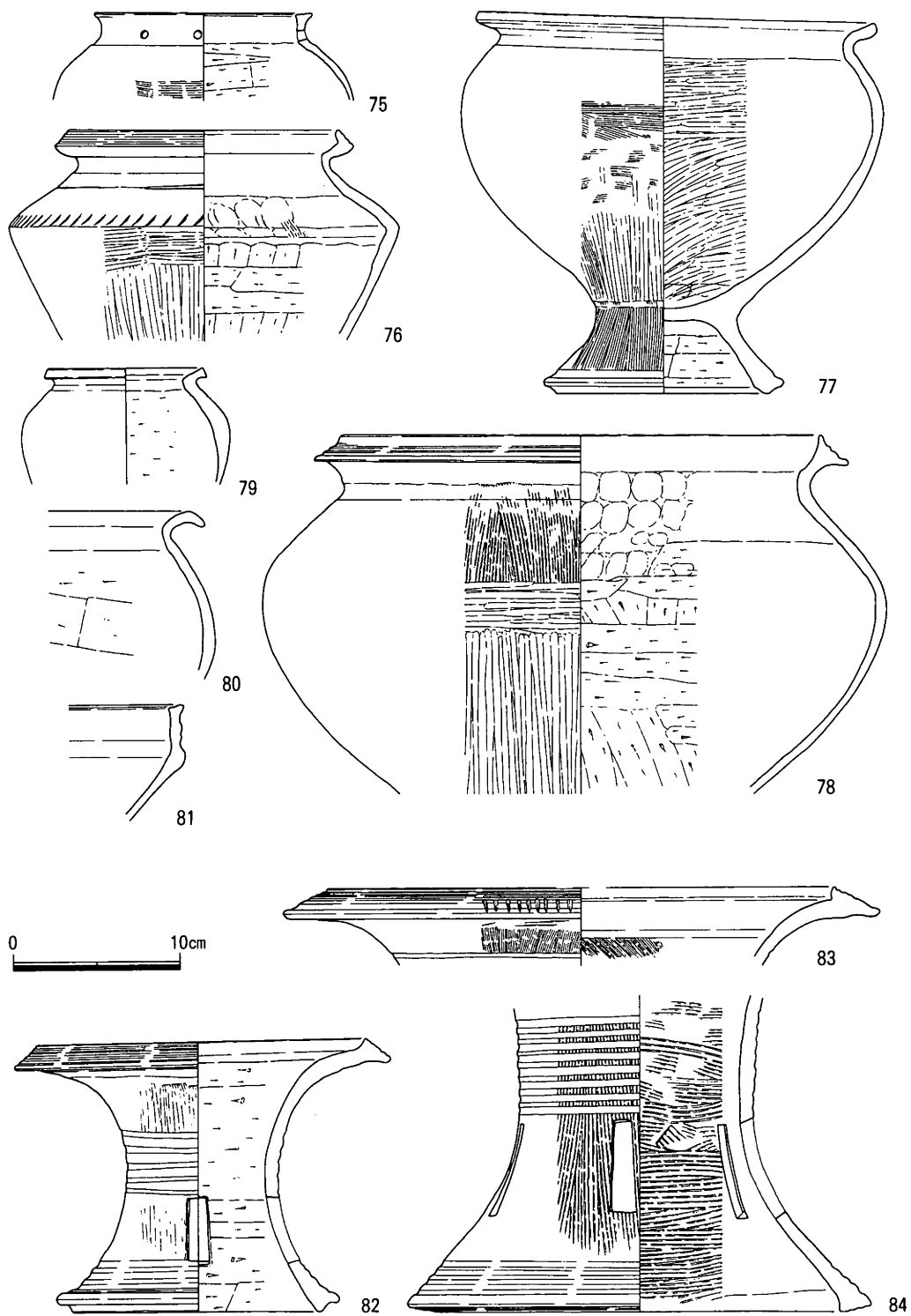
第12図 出土遺物 5 (S=1/4)



第13図 出土遺物6 (S=1/4)



第14図 出土遺物7 (S=1/4)



第15图 出土遺物 8 (S=1/4)

共同住宅建設に伴う確認調査

所在地 総社市中央3丁目9-101・108

調査期間 平成7年11月7日

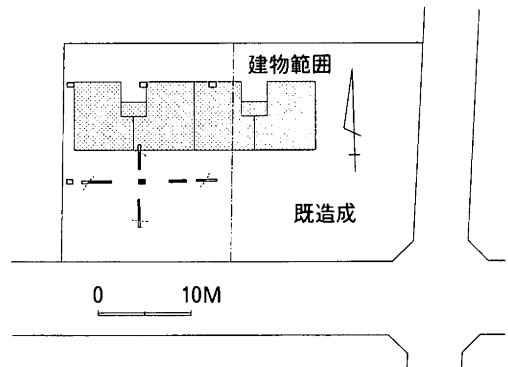
調査面積 5 m²

調査概要

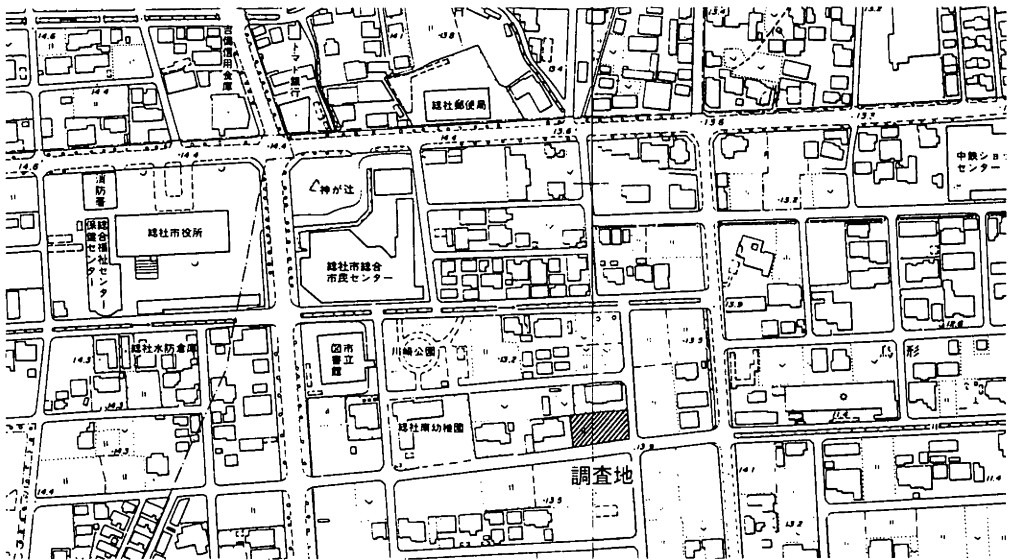
総社市街地の中心部は、高梁川の分流が西から東へ流れた河道と微高地上に位置する。昭和55年から区画整理事業に伴い、旧河道南に広がる集落跡が調査された。この時には、区画整理事業が6割近く終了していた。その後、周辺の開発に伴う調査で遺跡の広がりが見らなかりつつある。

今回確認調査を実施した地点は、遺跡の所在する微高地上であることから、事前に遺構の有無を確認することを目的とした。調査地東半分は既に駐車場として、以前に造成が終了していた。

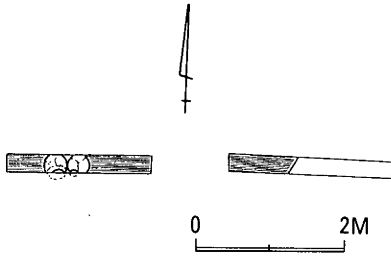
調査は、建物建設予定部分を中心に行った。北側に設定した3ヶ所では、表土直下で微高地の土が出るものの、遺構・遺物はなかった。このため、南に1ヶ所離して設定した。この部分



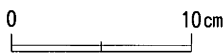
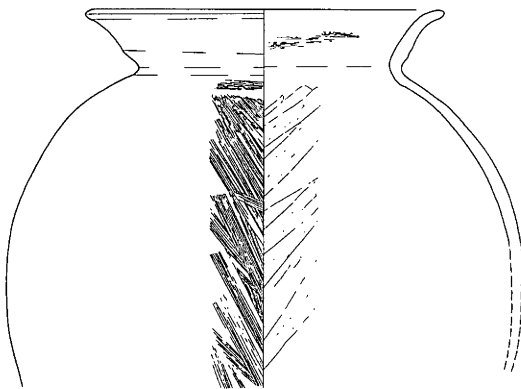
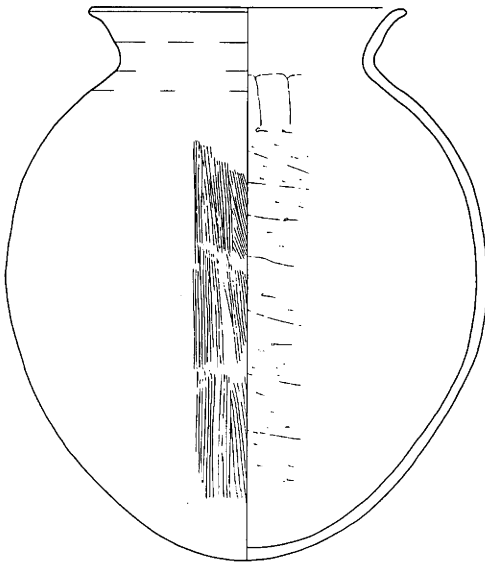
第17図 トレンチ配置図 (S=1/ 800)



第16図 調査地位置図 (S=1/ 5,000)



第18図 遺物出土状況 (S=1/100)



第19図 出土遺物 (S=1/4)

では、遺物包含層が確認された。南部分は駐車場予定であったが、包含層の広がりを押さえるため東西・南北方向にトレンチを設定した。

調査の結果、包含層は数軒の住居址が重なって存在することが明らかになった。また、東部分のトレンチからは、2個体の土師器甕が出土した。

本調査地周辺の状況から、遺構の広がりはいずれも南に中心があり、北に河道が推定される。調査結果をもとに開発業者と協議し、建物予定地の基礎杭を当初予定のものより細いものとし、基礎工事時に立会を実施した。 (谷山)

店舗建設に伴う確認調査

所在地 総社市真壁816-2外

調査期間 平成7年12月26日

調査面積 約20m²

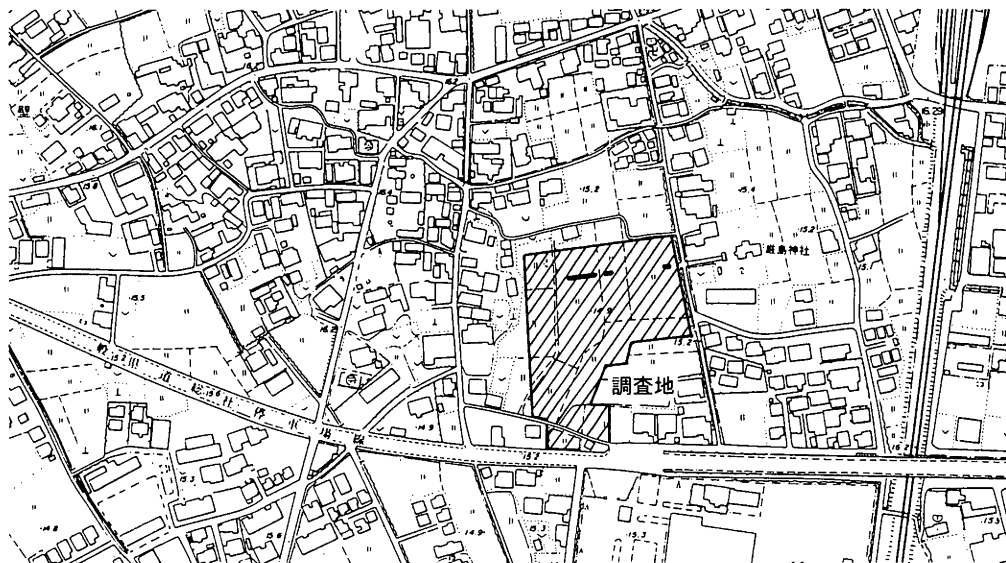
調査概要

調査地は、市内を南流する高梁川が、大きく東側に蛇行する付近にあたる。ここは、市街地西部に位置し南にはカルピス食品工業（株）岡山工場がある。近辺の確認調査では、水田層下で砂礫層または、厚い水田土壌が認められている。

今回の調査は、郊外型大型店舗の建設に伴い、店舗建物予定部分の確認調査を実施した。調査前の地上観察では、現水田面が南に向かってわずかずつ高くなり、調査地が低部であることが観察された。トレンチは、想定される河道に直交すると考えられる方向に設定した。

調査は西から掘削を開始し東に移動した。トレンチの土層は基本的に同じで、表土下に淡灰褐色土と黄褐色土の互層が約110cmの厚さで認められた。この層は、20mのトレンチ内では大きな変化は認められなかった。基盤層がわずかに東に向かって高くなる。このことから、トレンチをやや離し、東端近くに設定した。ここでは、表土下の互層の厚さは60cmであった。

調査の結果、建設予定地では厚い水田土壌が認められ、遺構の存在は確認されなかった。また、遺物も土器小片しか出土していない。このことから、用地東に所在する巖島神社付近に部分的な高まりが想定されるが、これを挟んだ両側は低地となることが考えられる。（谷山）



第20図 調査地位置図 (S=1/5,000)

工場建設に伴う確認調査

所在地 総社市井尻野385-1

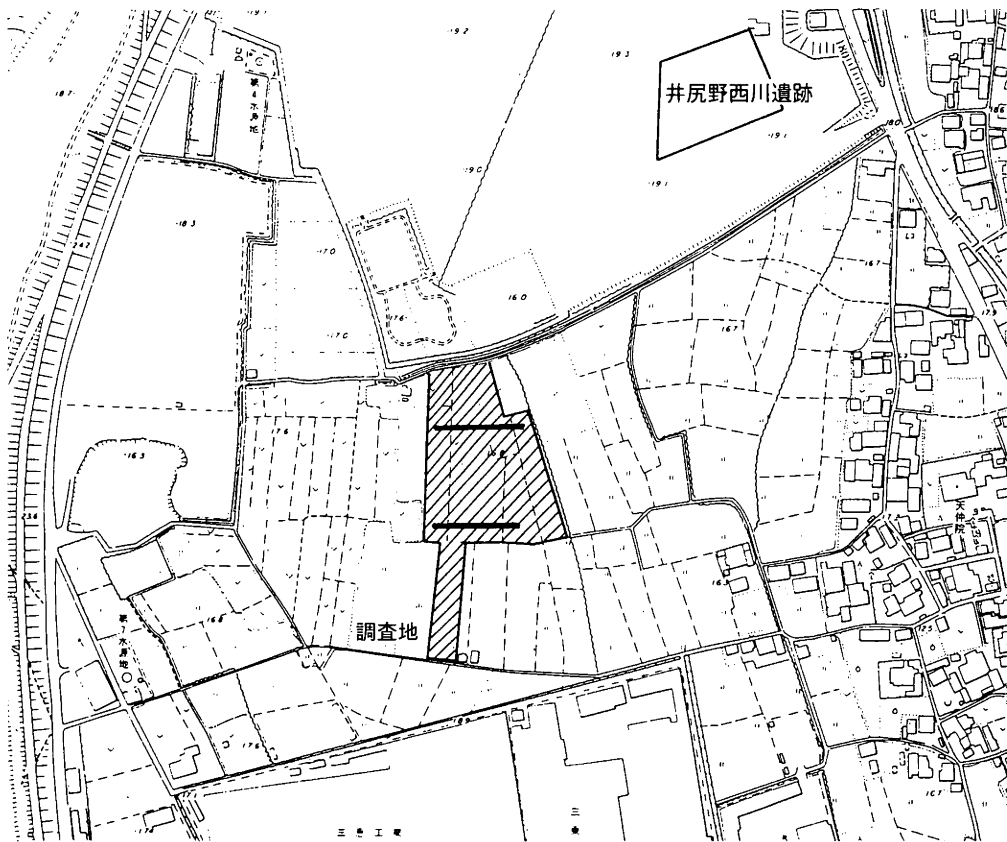
調査期間 平成8年2月7日

調査面積 約60m²

調査概要

本調査地は、高梁川に近接する。近年工業用適地として企業誘致が図られ、造成が進む地域である。近接する北側では既に工場用地として造成が終了した区域があり、西川遺跡が発掘調査されている。

今回の調査は、前述の西川遺跡に近接する地区の造成であるため事前の確認調査を実施した。調査は、トレンチを建物予定部分に推定河道と直交する方向に設定し行った。調査の結果、トレンチ東端は比較的砂礫層が高く、この層の厚さは1.5m以上ある。砂礫層の高低差はあるものの全体に砂層と砂礫層が認められ、遺構は検出できなかった。(谷山)



第21図 調査地位置図 (S=1/5,000)

秦（秦原）廃寺確認調査

遺跡名 秦廃寺（岡山県指定史跡）

所在地 総社市秦

調査期間 平成7年9月4日～10月25日・平成8年3月18日～31日

調査概要

秦廃寺は、飛鳥時代に創建された県内最古の寺院である。近年開発に伴う発掘調査により、岡山市で秦廃寺出土の飛鳥時代の瓦より古い瓦が出土したが、遺跡の内容は不明である。

秦廃寺は、永山卯三郎・石田茂作らにより貴重な遺跡として紹介された。両者では、方形の造りだしをもつ精巧な塔心礎が移動、不動のものとの見解が分かれていた。この時点では、境内地のほとんどが、後に再建され江戸期に廃寺となった川島山興禅寺の寺敷として残っていた。

戦後、この地が開発され多くの礎石が出土したことが伝えられている。

その後、地形図を手がかりに、葛原克人・岡本寛久らが伽藍配置を考察している。

今回行った調査は、出土した瓦・柱以外不明な部分が多い本遺跡の内容を少しでも明らかにし、今後の保存のための資料を得ることを目的に実施した。

調査は、塔心礎が現位置にあるかどうかを明らかにすることを意図し、トレンチを設定した。調査の結果、塔心礎の下には塔基壇の版築層は認められず、土壌の上に心礎が据えられていることが判明した。また、秦廃寺北に位置する天神社境内地から瓦が出土したことが教育委員会に報告されたため、今回確認を行った。ここでは、秦廃寺の瓦窯を1基検出した。

（谷山）



第22図 調査地位置図（S=1/5,000）



1. 秦麿寺全景空撮



2. 調査区近景（南から）



1. 塔西辺掘り込み



2. 東西トレンチ（西から）

消防署西出張所（仮称）建設に伴う確認調査

所在地 総社市久代2621

調査期間 平成7年9月12日

調査面積 約5 m²

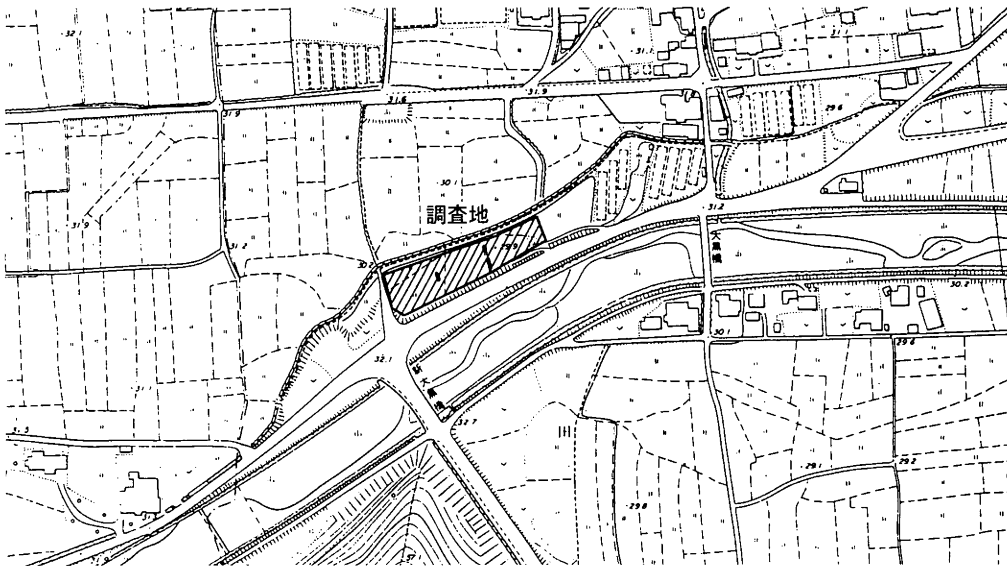
調査概要

調査地は高梁市右岸に位置し、東西に流れる新本川の北に近接した地区である。やや離れるが、南の丘陵では近年工業団地が造成され、多くの工場が稼働している。

今回の調査は、西部地区での消防活動の拠点として新たに西出張所を建設するのに伴って実施した。

調査前の観察では新本川に近く、周辺より用地が一段低いことから旧河道と推定された。調査は、建設予定地の東・西端で確認を行った。東では湧水が著しく地表から約80cmまですべて砂層であった。西は、東に比べるとやや高くよく締まった土壌であるが、砂の互層が確認された。

当初予想したように用地は、粗い砂層の堆積であり遺物もほとんど出土していないので遺跡は存在しないと考えられる。 (谷 山)



第23図 調査地位置図 (S=1/5,000)

J A きびじ西部ライスセンター関連施設建設に伴う確認調査

所在地 総社市久代4703-1,4704-1

調査期間 平成7年12月25日

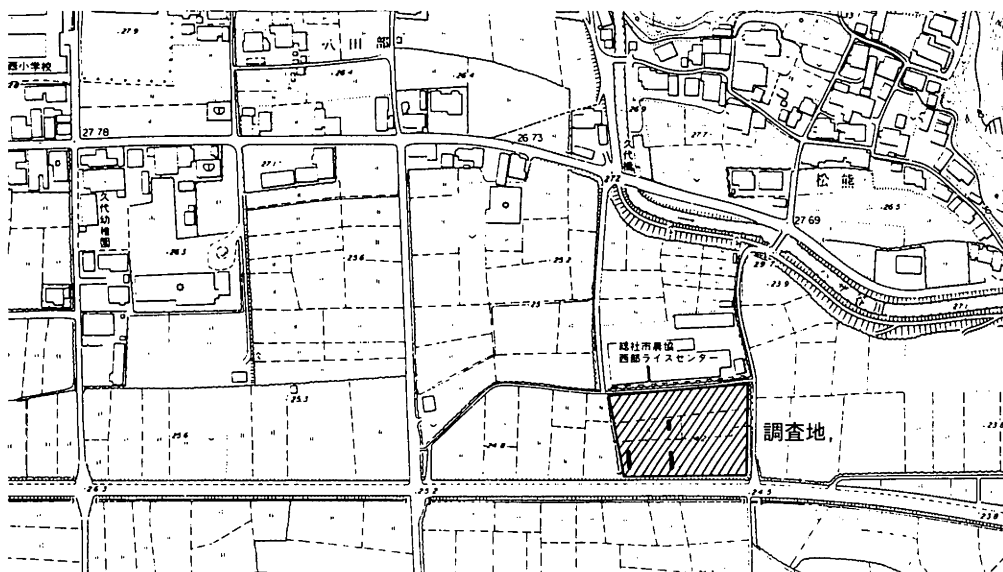
調査面積 約15m²

調査概要

調査地は総社市西部、高梁川右岸に位置する。周辺では、丘陵を除くと開発は少なく遺跡の存在は知られていない。この地域では、西部横断道が総社大橋から県道倉敷昭和線まで開通していることから利便性が増している。

調査は、将来掘削が地下に大きく影響を及ぼすと考えられる箇所で行った。トレンチは周辺の地形から南北方向に設定した。

トレンチの土壌はいずれも似た状況であった。基盤と考えられる土壌は、下層が砂質であり上部に鉄分の凝集が認められる。この層の上に、白色と灰色の互層が約40cm堆積していた。北に設定したトレンチの土壌は南の2本とは若干異なり、基盤が青灰色を呈し粘質が強い。これは、北に近接するハザ谷川の影響とも考えられる。しかし、いずれのトレンチにおいても遺構はもちろん、遺物もほとんど無く遺跡の存在は認められなかった。 (谷 山)



第24図 調査地位置図 (S=1/5,000)

新本川流域における遺跡分布調査—その1—

所在地 総社市八代・下原地内

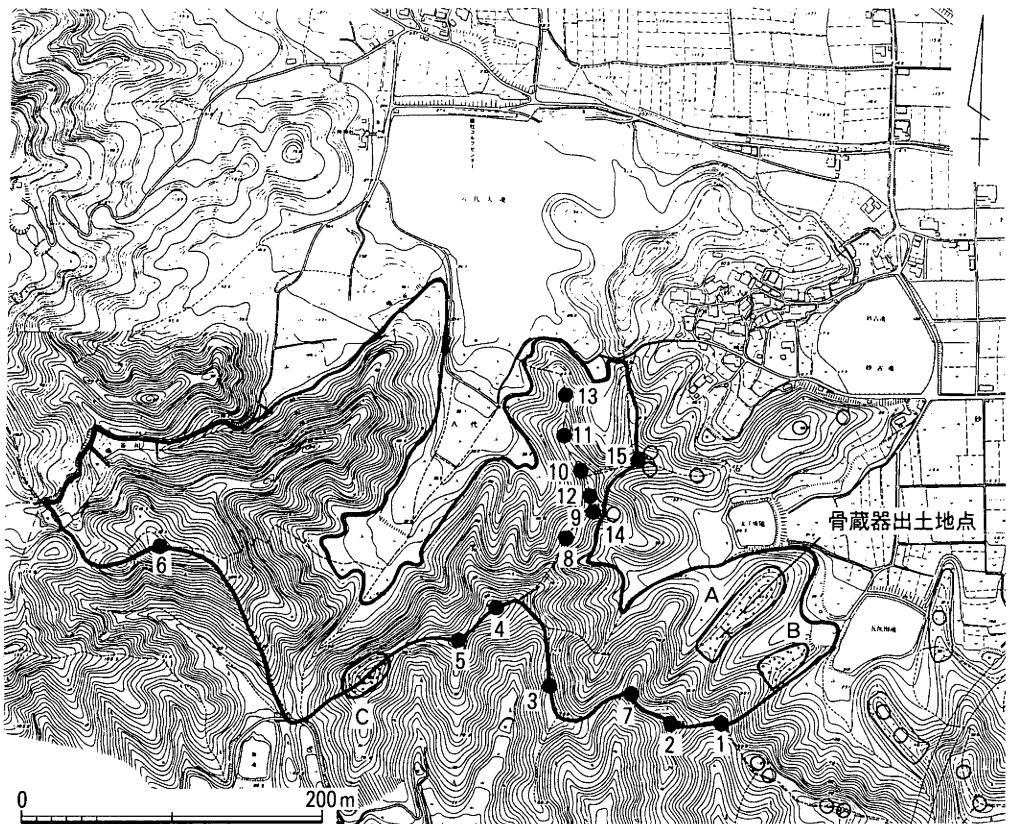
調査期間 平成7年5月24日

調査概要

調査地は、総社市の西部、新本川下流域の丘陵地である。

調査の契機は、総社市森林組合による保育事業として植林が行われ、そのための下草の伐採および作業道の敷設が実施されたことによる。対象面積は約24haにおよび、そのうちの約半分を踏査することができた。これまでに確認されている遺跡は、古墳が10基である。このほか、昭和57年に本調査地東側の丘陵地一帯を中心にして実施された分布調査および確認調査によって、本調査地の小丘陵上（A・B地点）に弥生～古墳時代の集落遺跡の存在が予想されている。

今回の調査では、遺跡台帳にのる周知古墳の再度確認と、新たな遺跡の発見を目的としたが、残る未踏査範囲と、今回の調査が作業道を中心に踏査したにすぎないことを勘案するとさらに遺跡数は増えるものであろうか。



第25図 調査地位置図 (S=1/5,000)

周知古墳10基の立地は、いずれも丘陵頂部と稜線上である。内部主体は、箱式石棺の露出する1基以外は不明である。しかし、その立地や墳丘の高まりなどから判断して横穴式石室墳になるとは考えられない。おそらく横穴式石室墳は、今回詳細に調査できなかった丘陵裾部周辺で発見されるであろうか。

まず、真備町との境界にある6基のうち、1基は今回の未調査区にあり、残る5基は箱式石棺の露出する1のほかは確実に古墳と断定できるものはなかった。4以外は作業道が尾根線上でなくやや下った斜面に取り付けられていることから地表観察のみとなり、その観察では明瞭な墳丘を確認することができなかった。しかし、丘陵の頂部に位置していることから古墳が築かれていてもおかしくないものと判断した。この点から7についても古墳と判断し、新規発見の古墳とする。

つぎに、北に派生する丘陵の尾根線上にある4基であるが、このうちの8～10の3基はほぼ確実な古墳と断定したが、11はさきの例同様に丘陵頂部にあることから古墳の可能性を、12・13も同様に一応新規発見の古墳とする。

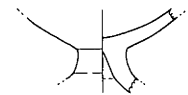
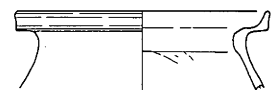
また、今回の事業範囲外であるが、14はこれまで前方後円墳とも考えられていたものである。しかし、地形観察の結果からは円墳もしくは古墳2基となる可能性が高い。

このように、下草の伐採によって古墳はかなり発見しやすくなったが、地表に痕跡を残しにくい遺跡の発見は通常の分布調査では困難であり、はからずも今回のように作業道の敷設による掘削がともなったことで土層断面の観察ができ、遺物の採集も可能となり、新規の遺跡が発見された。

今回の調査範囲である丘陵地群は真備町に抜ける峠道で2分され、その東半分を踏査したものであるが、この峠道にのぞむ標高88.9mの丘陵頂部とその周辺から土器が採集された（C地点）。

また、作業道の断面からはピット状の落ち込みも確認している。しかし、採集された遺物の点数は非常に少なく、この丘陵頂部には平坦面もなく、平地との比高差もあり、さらにはかなり奥まった位置になることから、通常では集落遺跡が営まれるような場所とは考えにくい。地形的には、本調査地の西、約2.9kmに位置する立坂墳丘墓の立地状況とかなり類似したものである。墳墓となる可能性も考えられるのではないだろうか。

集落遺跡の立地が予測されていたA・B地点では、伐採が行われたのみで、作業道の敷設はなかったことから遺物の採集はできなかった。しかし、A地点の丘陵上には送電線鉄塔があり、その管理道が丘陵を横断するように取り付けられており、これにともなって骨蔵器とそれを納めた土壙、土師器・鉄滓が発見・採集された。



0 10cm

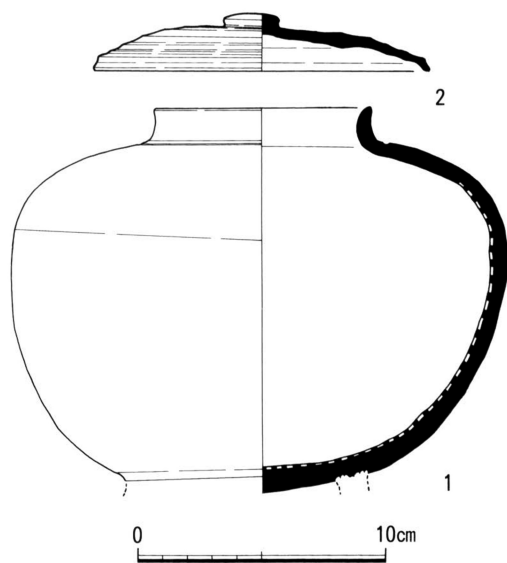
第26図 採集遺物(1)
(S=1/4)

本調査地内およびその周辺で計画された送電線鉄塔の建設にともなっては、平成3年度に事前審査があり、分布調査および立会調査を実施している（調査番号91122）。しかし、調査は鉄塔の建設範囲内であったことから、その後の作業兼管理道については未調査となり、その道路面および掘削排土より今回の骨蔵器と、土師器・鉄滓が採集されたものである。

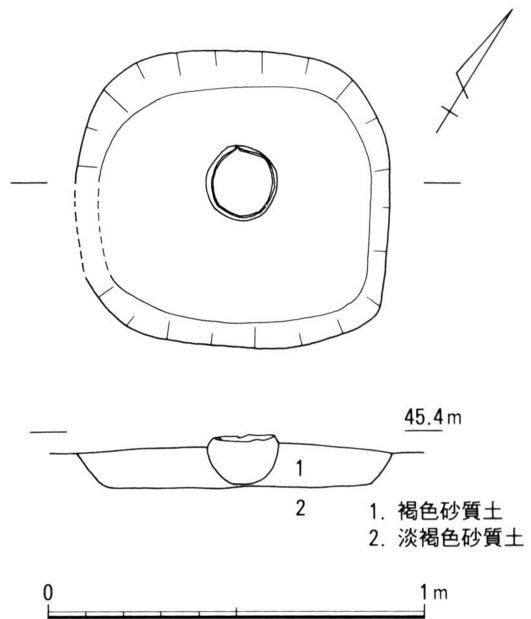
骨蔵器は丘陵の頂部平坦面よりわずかに下った東側の斜面で発見された。発見当初、すでに蓋は大部分が散乱し、壺の肩部が露出していた。

骨蔵器を納めた土坑は、一辺約80cmの隅丸方形で、深さ10cmを測る。このほぼ中央に正位置で1の壺が置かれ、2の蓋で口を塞いでいたものである。

壺は、高台部をすべて欠く。焼成後の穿孔



第28図 出土遺物 (S=1/3)



第27図 土坑平・断面図 (S=1/20)



第5図版 遺物出土状況



第6図版 出土遺物

が認められないことから高台は意識的に欠いたものであろうか。また、口縁部も削平により1/10ほどが残るのみで、あとの破片を採集することはできなかった。形態は、短く外反した口縁部をもち、胴部はやや扁平の楕円形を呈する。口径8.6cm・胴部最大径20.1cmを測る。

蓋は、口径13.4・最大径13.6・器高2.3cmを測る。天井部が丸みをもち、口縁部のと境は認められないが、端部にいたって短く外に屈曲した、碁石形つまみをもつ蓋である。

製鉄関連遺跡は、鉄滓の採集により予測されたものであるが、わずかに1点であることから、生産遺跡でなく集落遺跡にともなう鉄滓とも考えられる。しかし、鉄滓の採集地点が骨蔵器の発見地点よりさらに下った丘陵の裾部であり、丘陵頂部から転落したとするにはやや距離があることと、採集された遺物がわずかに1点であり、その時期的なことも考慮して、消極的ではあるものの製鉄関連遺跡と判断したものである。

鉄滓とともに採集された土師器の甕は、口径29.6cmを測り、口縁部をくの字に外反させた形態で、調整は内外面ともに荒いハケであるが、整形時の圧痕がかなり残されたものである。

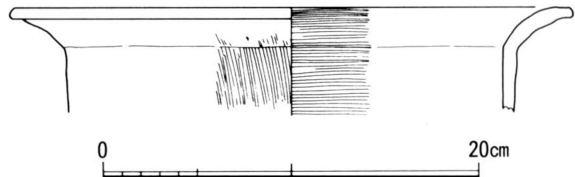
以上のように、周知遺跡の再度確認と新たに古墳が3基、集落ないし墳墓遺跡1カ所、製鉄関連遺跡1カ

所、骨蔵器の埋葬地1地点が発見された。それぞれの遺跡の時期については、採集された遺物がないかあっても少量であることから限定できないがあえて判断すると、古墳は箱式石棺などを内部主体とするような低墳丘の前期古墳、集落ないし墳墓遺跡は弥生後期後半、骨蔵器は8世紀初頭、製鉄関連遺跡は8世紀代と考えられようか。

(前角 和夫)



第7図版 調査地近景



第29図 採集遺物(2) (S=1/4)

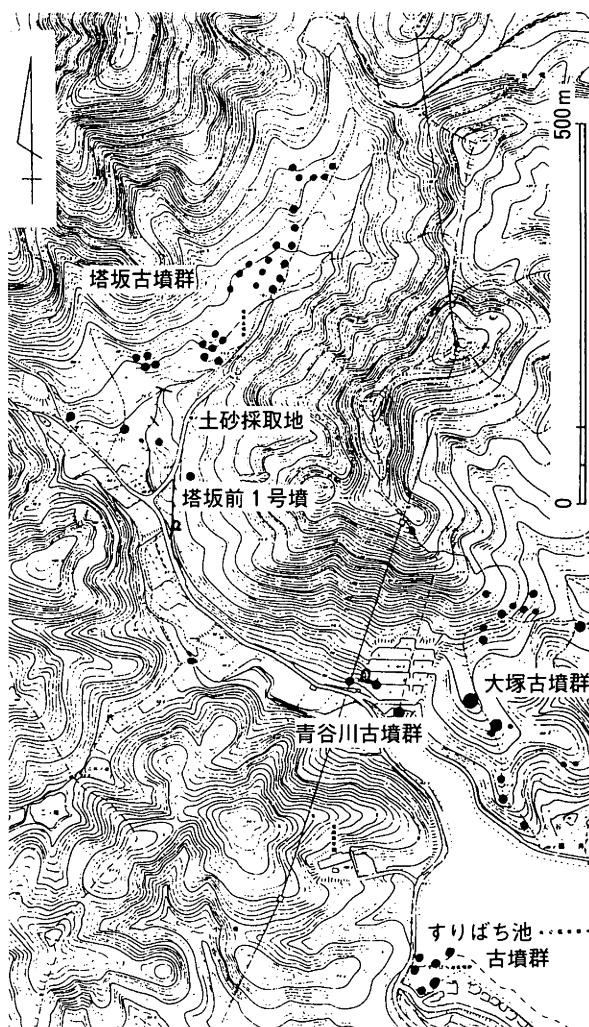
塔坂古墳群周辺における土砂採取事業 2

遺跡名 塔坂前1号墳
所在地 総社市小寺1672-2
調査期間 平成7年8月13日
調査概要

本調査地はすでに昨年度の年報において調査概要を報告したもの（「塔坂古墳群周辺における土砂採取事業」『総社市埋蔵文化財調査年報』5, 1995）であるが、新たな状況の変化が認められたので、再度ここに報告するものである。

今回の調査も昨年度同様、通常の開発申請にともなう事前審査によるものではなく、その開発行為が行われていた事実を不時で確認したことによる緊急の調査である。昨年度の段階で、新規発見の古墳1基と、周知の炭窯1基の所在を確認しており、その位置はすでに土砂採取の行われていた範囲でなく、それに隣接した伐採のみの行われていた範囲であった。そこで開発事業の確認を行ったところ、この伐採のみの範囲は土砂採取事業の予定地には含まれていなかった。しかし、このほかでの土砂採取事業の状況から判断して開発範囲を拡大することは十分に予想されたので、今後の状況を慎重にみまもることとした。

ところが、平成7年8月13日にいたって新たな変化が生じていたことが確認された。将来的に土砂採取が行われるであろうと予想していた伐採のみの範囲内に、石組みによる基壇状の造成が行われていたものである。この造成は



第30図 調査地位置図 (S=1/10,000)

数メートル四方程度のものであったが、丘陵斜面に築かれていたことから大きく地形の改変が行われ、基壇のまわりの表土が大きく削り取られたほか、山からの排水処理を目的とした溝も一部で掘削されていた。この状況から判断して、造成は墓地となるものと考えられた。

新規発見の古墳は、この基壇の位置と多少距離があったものの、さきの作業によって古墳全体の表土は削り取られ、古墳のおよそ1/2の範囲には芝貼りもなされていた。その結果、全周する周溝が明瞭に確認できていたものが、その痕跡すら残っておらず、さらには表土の掘削によって墳頂部に箱式石棺の一部と思われる石材も露呈することとなった。露呈した石材の位置関係からは石棺の主軸が丘陵斜面の等高線方向と同じほぼ南北にとられていたものと判断され、また、箱式石棺を内部主体とすることから、棺外に多くの副葬品が置かれていたものと予想し、表土が削り取られたことからそれらの採集される可能性は非常に高まったが、古墳の範囲内ではまったく採集されなかった。しかし、古墳からわずかにはずれた位置になるが、表土掘削にともなうと思われる排土内より遺物が採集された。

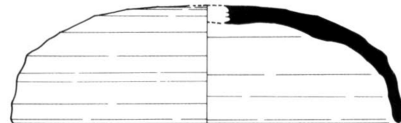
採集された遺物は須恵器で、わずかに3点である。坏蓋は、天井部を比較的平らに成形し、口縁部との境にはヨコナデによる凹線をめぐらして稜線を意識させている。ヘラケズリは丁寧で、天井部の2/3の範囲にまでおよぶが、その間隔は広い。口縁端部はわずかな傾斜をもつようであるが、ほぼ丸くおさめようとしている。残部は1/4であるが、口径15.6・最大径15.8・



第8図版 塔坂前1号墳全景



第9図版 塔坂前1号墳近景



第31図 採集遺物 (S=1/3)

器高4.7cmに復元計測される。

以上のように、昨年度、新規に発見した古墳は、この度の新たな開発によって一部分が破壊された。その反面、内部主体が箱式石棺になることが確認され、確実ではないものの、副葬品と推定される須恵器も採集されている。この須恵器がMT85期ないしTK43期ごろのものと推定されることから、本墳は6世紀後半に築造されたものと考えている。

なお、本墳のすぐ北側の谷川をはさんだ向かい側にはその数30基を越す塔坂古墳群の所在が知られており、横穴式石室墳のみの構成と判断されることから、本墳のように箱式石棺となる古墳は別の古墳群としてとらえ、塔坂古墳群より抽出し、塔坂前古墳群と仮称する。おそらく、塔坂前古墳群の構成墳は数基程度であり、その築造母体である集落はすぐ目の谷筋沿いに形成された小平地に営まれていたのではないかと予測される。

また、周知遺跡である青谷川製鉄関連遺跡の炭窯は、旧道の法面に露出していることから、今回の開発に関係なく、自然の崩落作用によって徐々に破壊されている状況が確認された。

(前 角)

周辺での調査状況。

高田明人「すりばち池3号墳」(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1, 1984)

総社市教育委員会『青谷川古墳群 青谷川製鉄関連遺跡』(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』8, 1990)

総社市教育委員会『すりばち池古墳群』(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13, 1993)

谷山雅彦「福井地内の山土採取事業および分譲住宅造成事業に伴う発掘調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報』4, 1994)

高橋進一「福井新田地区小規模は場整備事業に伴う発掘調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報』4, 1994)

高橋進一「福井地内における分譲宅地造成事業に伴う発掘調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報』5, 1995)

墓地拡張工事に伴う遺物採集

遺跡名 南山遺跡

所在地 総社市秦421-1

調査期間 平成7年5月19日

調査概要

遺物採集地は、総社市域の西部、新本川下流域の左岸に位置する独立丘陵の中腹南斜面である。標高52.1mを測る丘陵の頂部には、石塔塚古墳（秦茶臼山古墳）が築かれており、南に向いた全長約38mの前方後円墳と推定されている。この墳丘上をはじめとして、この丘陵一帯は墓地となっており、いたるところにいく段もの平坦面が造成されている。今回の遺物採集の契機も、この墓地の拡張工事によるもので、その工事を不時に確認したことから緊急で行ったものである。工事はコンクリート擁壁を立てるために、丘陵斜面を大きく削り込んでおり、遺物はその斜面の堆積土とその排土より採集された。

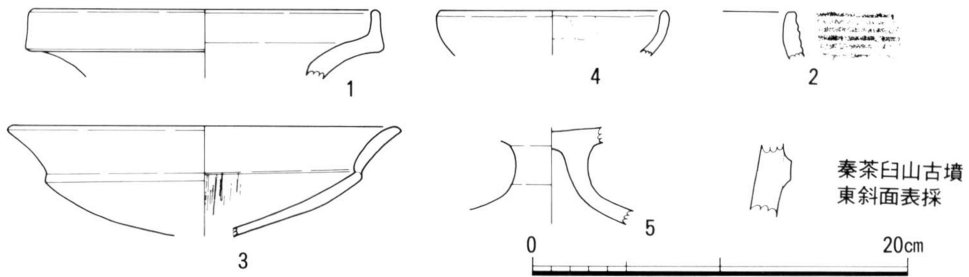


第32図 調査地位置図 (S=1/5,000)

採集された遺物はすべて弥生土器であるが、量的には少ない。

1は、壺の口縁部で、端部を上方に立ち上げる。口径16cm。2は口縁部のみで、細片のため口径の計測ができない。外面には多条の凹線をめぐらし、内外面には朱が塗られている。

3の高坏は、脚部をすべて欠損するが、坏部の残部が3/4あり、坏部と脚部との接合はソケット式となる痕跡を残す。形態は浅い坏部に外反する口縁部をもつが、非常に薄く仕上がっている。口径20.2cmを測り、調整は口縁部の内外面をヨコナデ、坏部の内面を細かいミガキ・外面をナデとし、内面の全面と口縁部の外面には朱を塗った痕跡が認められる。4も口縁部のみで、口径11.9cmを測る。形態は浅い碗状の坏部で、内面に指頭圧痕の残る手づくね風の整形である。5は脚部で、端部を残さないが、脚柱部は短く、端部に向かってはゆるやかに外反する。



第33図 採集遺物 (S=1/4)

このほかに平底の壺か甕の底部や、2段の鋸歯文を刻んだ高坏の脚部などがある。

これらの遺物は、標高30m地点で採集され、その斜面の傾斜は非常にきつい。通常では弥生集落を営むような場所ではない。しかし、新本川の氾濫によってやもおえず集落を移したものであろうか。おそらく集落



第10図版 調査地遠景

の存続期間は短く、弥生時代後期おわりごろの一時期であったと推定される。 (前角)

* 古墳の名称については、遺跡台帳(『全国遺跡地図 岡山県』1980、『岡山県遺跡地図(第三分冊)』1975)によると石塔塚古墳であるが、かつて「金子の石棺」と称された奥場2号墳を金子石塔塚古墳として混同したことにより、秦茶白山古墳の名称が使われたものであろうか(『総社市史 考古資料編』1987)。

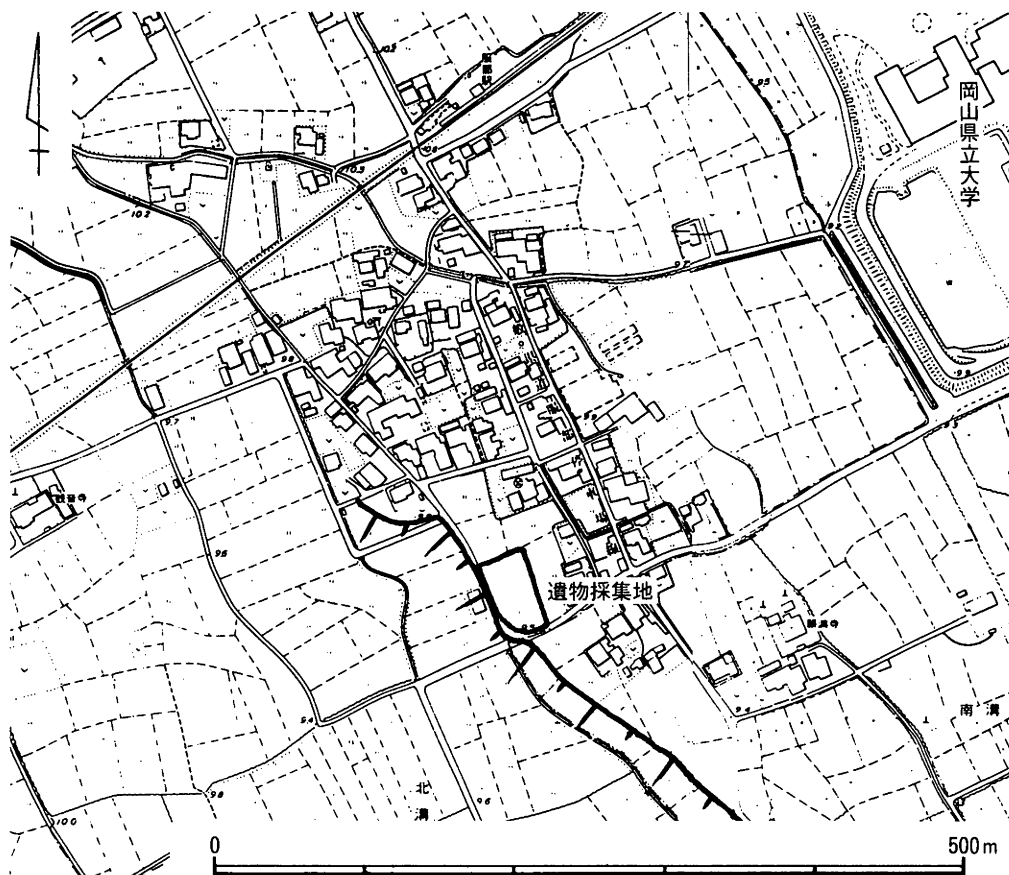
個人住宅造成に伴う遺物採集

遺跡名 深町遺跡
所在地 総社市北溝手358-2
調査期間 平成7年11月15日

調査概要

遺物採集地は、総社市域の東部、総社平野内にある古くからの集落地である。周辺での調査は、備中国府跡確認調査あるいは岡山県立大学建設にともなう窪木・南溝手遺跡の調査などがある。^註

遺物採集の契機は、掘削工事が行われていたことを不時に確認したことから緊急で行ったものである。工事は、地表下約0.7mの深さで、約500㎡の範囲にわたって掘り下げてあった。そこで開発事業の確認を行ったところ個人住宅の建設予定地であり、その造成にあたって土木業者が工事排土の臨時置場および一部埋立地として使用するものであった。造成工事段階である

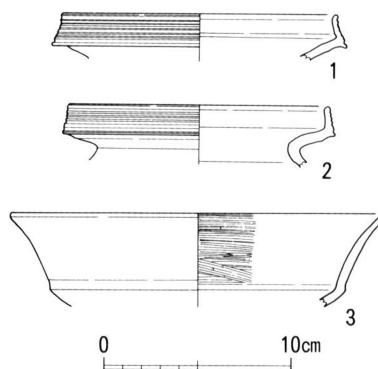


第34図 調査地位置図 (S=1/ 5,000)

ことから、建築確認申請の対象とはならないので事前審査を実施することはできない。遺物採集地周辺は、周知の遺跡内であるが、散布地としてであり、その内容や採集地が確実に遺跡内であるかどうかは不明であった。そこで遺物の採集を主目的としたものの、北東隅付近で長方形（幅0.6m・長さ1m以上）の土色・土質の違いを確認することができ、土壙墓の可能性が
あることや、ほかにも柱穴と思われる遺構も少なからず確認できた。また、遺物もまとめて採集できたものがあることから遺構にともなった出土
遺物と考えられる。



第11図版 土層断面



第35図 採集遺物 (S=1/4)

採集された遺物はすべて弥生土器である。

1・2は、口縁部のみで、残部は1/6である。いずれも口縁部外面に5～7本の沈線に近い凹線を施している。口縁端部の立ち上がりはやや内傾し、またわずかであるが下方に拡張する形態が残っている。

3の高坏は、口径20cmを測る。浅い坏部に、外反する高い口縁部をもつ。脚部は欠損するが、脚柱部が短く、端部に向かって外に大きく広がった、かなり短脚化したタイプと推定される。

以上のように、遺構や遺物が検出・採集されたことから確実に遺跡内であることが確認された。
(前角)

註 総社市教育委員会『備中国府跡緊急確認調査』（『総社市埋蔵文化財発掘調査報告書』7, 1989）
岡山県教育委員会『南溝手遺跡1』（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100, 1995）
岡山県教育委員会『南溝手遺跡2』（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107, 1996）

3. 発掘調査の概要

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 西三軒屋遺跡Ⅰ・Ⅱ区，惣善寺遺跡Ⅱ区，牛神上・上川原・三本松遺跡

所在地 総社市三輪

調査期間 平成7年4月1日～10月13日

調査面積 8000㎡

調査概要

(調査経緯)

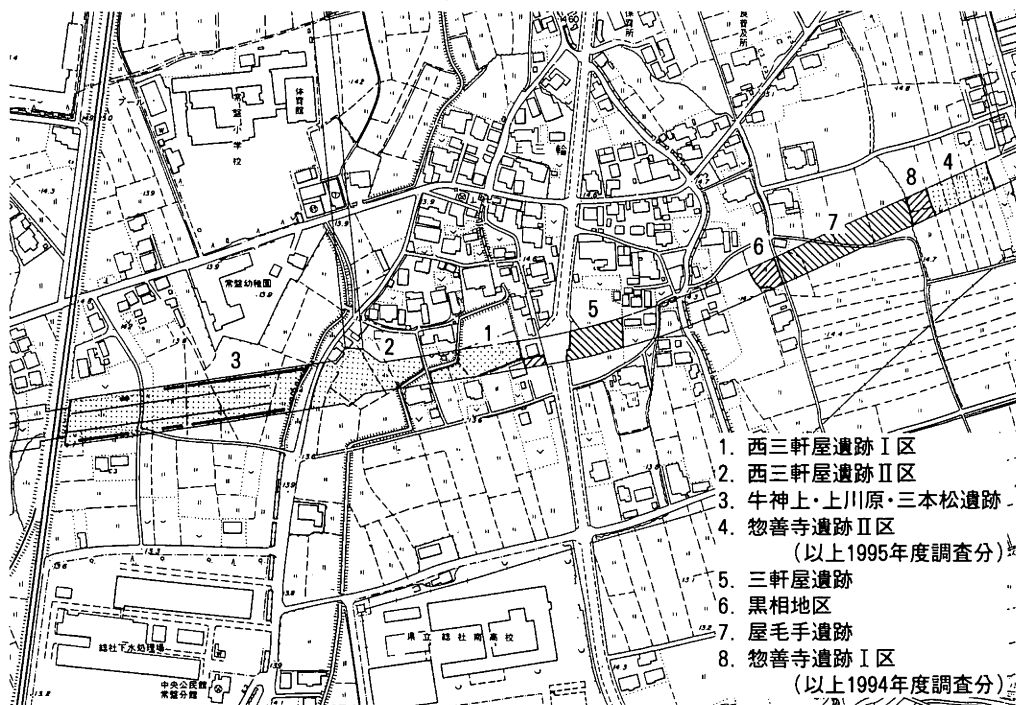
昨年度(平成6年度)からの継続事業である，駅南区画整理事業に伴う道路部分の発掘調査を実施した。

今年度(平成7年度)は，昨年度に引き続き，西三軒屋遺跡Ⅰ区から調査に入り，続いて工事工程に合わせて西三軒屋遺跡Ⅱ区→牛神上・上川原・三本松遺跡→惣善寺遺跡Ⅱ区の順で調査を行った。

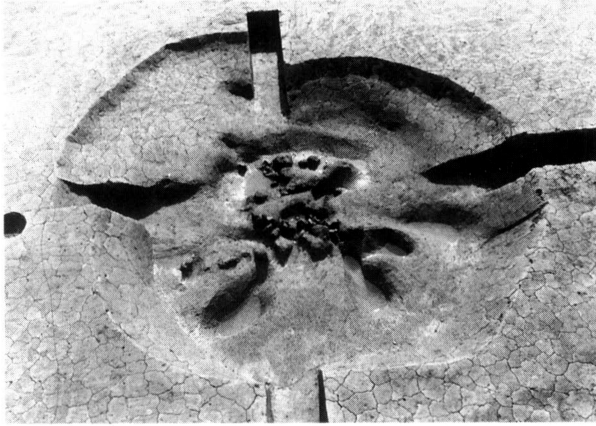
(遺構・遺物)

西三軒屋遺跡Ⅰ区

弥生時代以降の遺構については，昨年度ほぼ調査を終了しており，今年度は下層の縄文時代



第36図 調査地位置図 (S=1/6,000)



第12図版 西三軒屋遺跡Ⅰ区下層土壌

と思われる遺構について調査した。

縄文時代の遺構は、従来基盤と考えられていた黄褐色土層中に掘り込まれたもので、埋土と黄褐色土層との間に、大きな違いは見いださえない。しかし、若干の汚れや、炭・焼土の有無等から遺構の形態を確認することができた。

遺構は土壌20基余と、柱穴が検出された。土壌は長軸が5 mにも達する大きなものも散見されるが、深さは

検出面から数十cmと浅い。中には焼土塊を多量に含むものもみられる。

遺物は深鉢等の小片が少量出土しており、縄文時代後期あるいは晩期前半に属するものと思われる。その他、サヌカイト製の石器・剥片等も僅かながら出土している。

検出の困難さからすべてを調査しえたとは言い難いが、遺物量が少ないことから、遺構の密度は低かったものと思われ、生活の中心の場は他に求める必要があろう。

西三軒屋遺跡Ⅱ区

西三軒屋Ⅰ区西端から地形は上がっていき、西三軒屋Ⅱ区東半で最も高くなる。ここから西へ低くなっていき、中世以降の水田層が次第に厚く堆積するようになる。



第13図版 西三軒屋遺跡Ⅱ区全景（真上から）

東半の最も高い部分に弥生時代～近世の遺構が集中し、西に行くにしたがって疎となる。近世の遺構は東半にのみみられ、井戸や、湧水層まで達する大型の方形土壇をはじめ、柱穴や溝が検出された。大型の方形土壇は、中に「く」の字形の石組をもつものもみられる。これらの遺構からは、陶磁器類や瓦等が数多く出土したが、その性格は聞き取り調査等も行ったがいまだ明らかにしていない。

古代・中世の遺構は少ないが、弥生時代と古墳時代については住居址をはじめ土壇・柱穴・溝等、この路線内では最も多くの遺構が検出された。また、調査区中央付近には南北に緩やかな弧を描く大溝が検出されており、この付近から地形が下がっていくことから、微高地の縁辺に沿って掘削されたものと思われる。溝内埋土から多量の土器が出土している。

大溝のさらに西方には、北西から南東に走る旧河道が確認され、その埋没過程で弥生時代～古墳時代の遺物が廃棄されている。

この地区の東半は、遺構・遺物の検出状況から、他の路線内調査区と異なり集落の中心にきわめて近い位置にあたるものと考えられ、集落の本体はこれより北に広がるものと思われる。西半は、微高地が緩やかに下がり、水田層が幾層にも堆積するが、弥生・古墳時代の水田層は確認できなかった。

なお、縄文時代の遺構と考えられるものでは、数基の土壇が確認されたにすぎない。

牛神上・上川原・三本松遺跡

道路および水路を挟んで西三軒屋遺跡に西接する。西三軒屋遺跡Ⅱ区よりさらに地形は下がり、水田層の堆積もさらに厚くなる可能性が高いため、調査時にトレンチを入れ、その結果、水田以外の遺構が確認されないこと、各時期の水田層により畦が除去されていること、畦の残っている最も新しい水田層も近代のものであることから全面調査は行わず、路線の両端にトレンチを設け、土層の記録保存のみ実施した。

東半は、表土下に明治26年の大洪水の際堆積したと思われる洪水砂が厚く層を成しており、この洪水砂によって、その時点まで使用されていた近代の水田が覆われている。その下層には、何層にもわたって水田層が堆積しているが、遺物がみられないこと等から、各水田層の時期は特定できない。



西半は砂層が厚く堆積し、西端

第14図版 牛神上・上川原遺跡土層断面（西北から）

付近は粗砂層と礫層が互層になっており、高梁川の氾濫原であったことがうかがわれる。

惣善寺遺跡Ⅱ区

昨年度調査した屋毛手遺跡と同様の状況を呈する。

上層は、中世以降のものと思われる溝・溝状遺構・畝状遺構等や、時期不明の土壇や柱穴が検出された。溝等の残存状況はきわめて悪く、後世に大幅な削平を受けたものと思われる。土壇や柱穴が少なく溝等が主体であること、また遺物が少ないことから、この地区は集落から離れたところに位置するものと考えられる。

20～40cmの間層において、下層からは縄文時代の土壇・柱穴が検出された（第37図）。この遺構は、三軒屋遺跡や西三軒屋遺跡における縄文時代の遺構と異なり暗褐色土層中に掘り込まれているが、遺構内埋土と周囲の堆積層との差異が捉えにくいという点では共通している。2 m以上の長さや1 m以上の深さをもつ遺構もあるが、共伴する遺物がほとんどないことから、その性格は不明である。

下層の遺構は、数少なく散在している。検出が困難で、確実に遺構と認められるもののみ調査したが、遺物の総量は少なく、本来の遺構密度も低かったものと考えられる。

遺物は、遺構に伴うものは少なく、ほとんどが包含層から出土したものである。土器片に加え、サヌカイト製の石器・剥片が散見される。また、姫島産の黒曜石も1点出土している。図示したもの（第38図）はすべて包含層からの出土である。1と2は浅鉢、3～8は深鉢で、4は波状口縁をもつ。9は鉢である。いずれも晩期前半の土器と思われ、下層の遺構がこの時期の所産である可能性は高い。

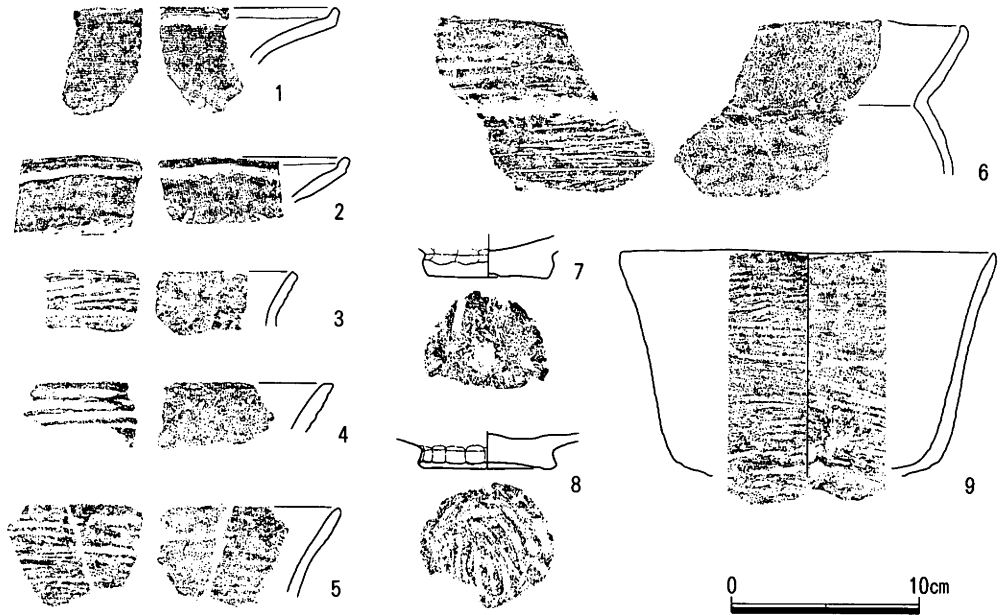
昨年度および今年度調査した地区の多くは微高地上に位置し、わずかに西三軒屋遺跡Ⅱ区西半のみが明確な微高地の下がり部分にあたる。しかし、微高地上に位置するとはいえ、弥生時代以降は、遺構・遺物の検出状況から、西三軒屋遺跡Ⅱ区東半を除いたほとんどが集落のはずれにあたる考えられ、集落の中心は地形が上がっていく北に存在するものと思われる。

縄文時代の遺構は、ほぼ全調査区で確認されており、密度は低いものの、周辺地域一帯に広がるものと推定される。

（平井）



第37図 惣善寺遺跡Ⅱ区縄文時代遺構配置図 (S=1/400)



第38図 惣善寺遺跡Ⅱ区出土縄文土器実測図 (S=1/4)

携帯電話無線鉄塔新設に伴う発掘調査

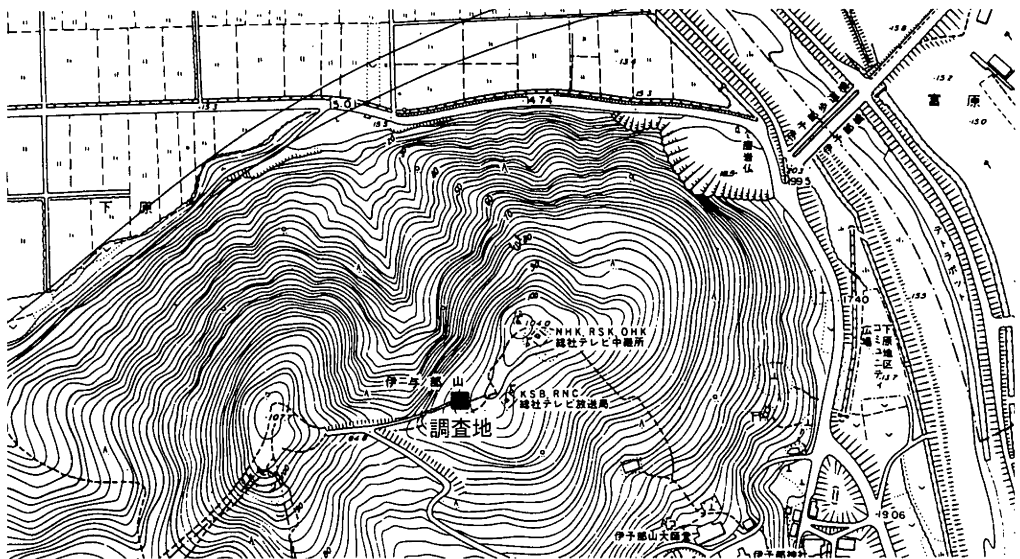
遺跡名 伊与部山遺跡
所在地 総社市下原694-10
調査期間 平成8年1月24日
調査面積 約30m²

調査概要

伊与部山は、市内中心を南流する高梁川右岸にある、標高100m級の丘陵に位置する。丘陵は、東西に延び東端部分が伊与部山である。伊与部山には、2ヶ所の高所があり西側高所には中世の山城があり、鞍部を挟んで東側高所には著名な伊与部山墳墓群が所在する。

伊与部山墳墓群の所在する丘陵高所には、過去にテレビ中継局が2基設置されている。今回の調査は、近年急速に利用が広がった携帯電話の中継局を設置することによって実施した。

工事開発業者から鉄塔建設について協議があった。このため、予定地周辺に所在する遺跡の重要性と広がりについて現地では協議した。予定地は既に大きく掘削された凹部であり、これより東への拡張はしないことで計画を進めることとした。実際の工事時にはさらに協議することとした。その後、用地が確定し下刈りが終了した時点で、再度立会をした。その結果予定地南部分が緩やかな斜面であることから、事前の確認調査が必要なことを業者に連絡した。確認調査は尾根に直交するように2本のトレンチを設定した。調査の結果若干の土器片が出土し、一部落ち込みが検出されたため、本調査が必要であることを業者に連絡し協議した。

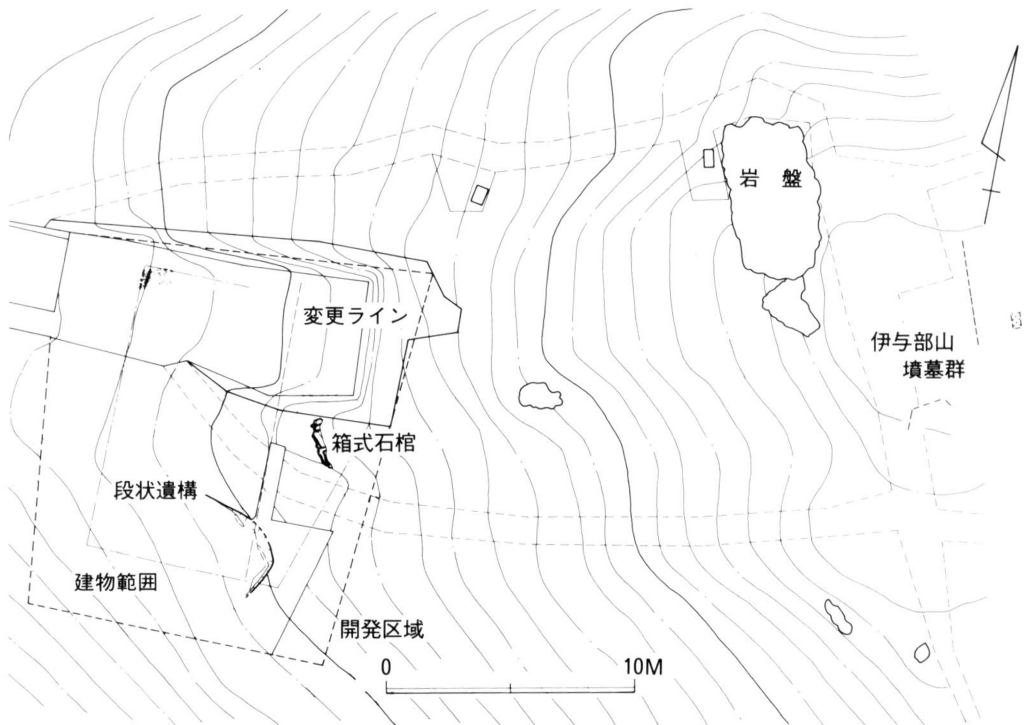


第39図 発掘調査位置図 (S=1/5,000)

協議に基づき、工事前に発掘調査を実施した。調査の結果、地山をL字状に掘り込んだ段状遺構を検出したが、柱穴は検出できなかった。また、遺物も出土しなかった。調査後、以前に掘られた凹部近くで板石が認められたので精査したところ箱式石棺1基を検出した。この箱式石棺は保存のための協議を行い、設計変更で保存が計られた。(谷山)



第15図版 発掘調査地近景



第40図 遺構配置図 (S=1/300)

西団地拡張に伴う発掘調査概要報告

遺跡名 黒谷遺跡・黒谷古墳群・黒谷製鉄関連遺跡

所在地 総社市久代地内

調査期間 平成7年7月10日～平成8年1月31日

調査概要

(調査経緯)

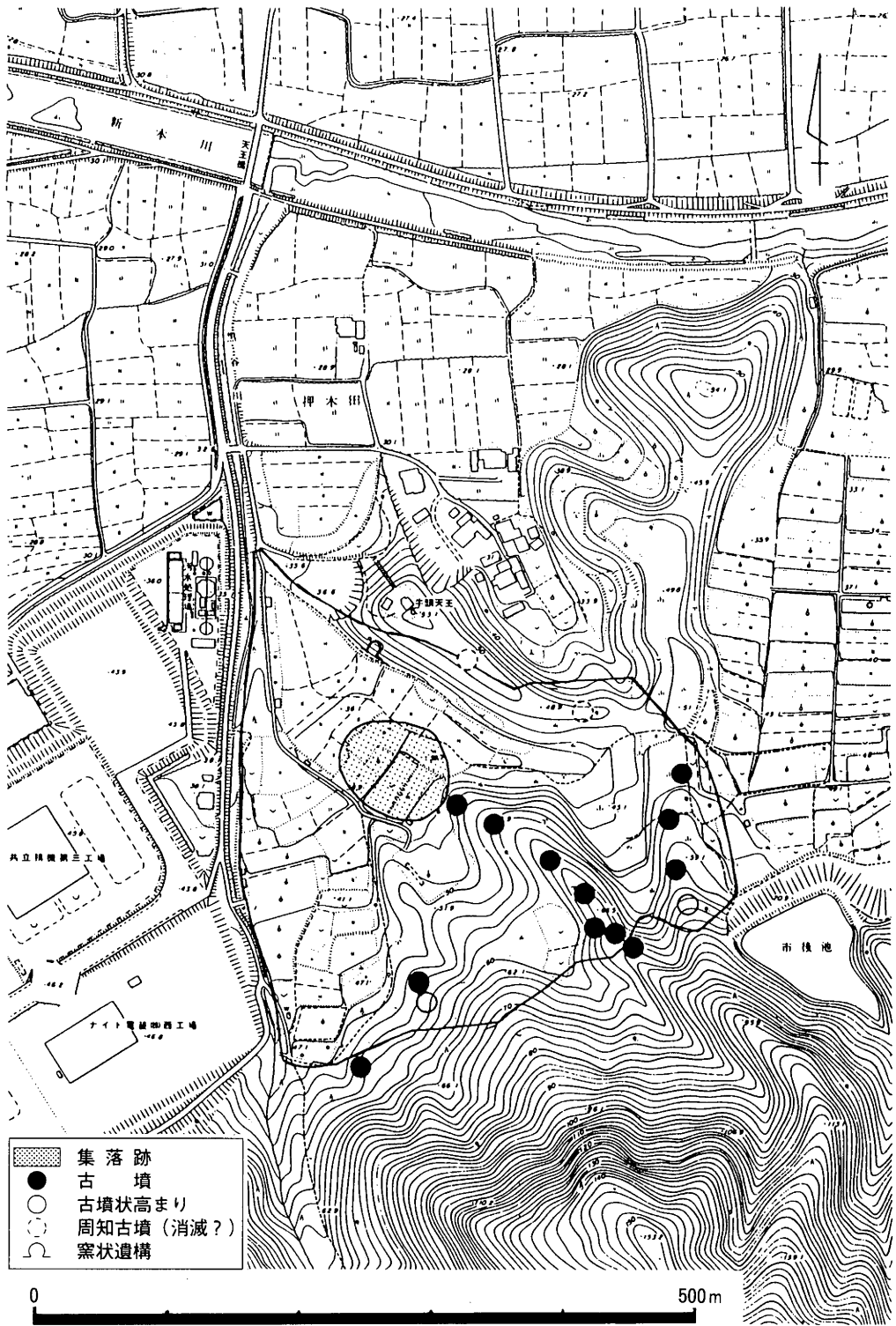
水島機械金属工業団地協同組合の西団地拡張計画は、平成4年ごろより持ち上がり、その東隣りとなる約10ヘクタールを予定地としたものであった。

これにともなっては、平成4年6月に分布調査を実施し、周知の遺跡として遺跡台帳に登録されている古墳10基のうち8基を再確認した。残る2基の所在については確認することができなかったが、新たに3基の古墳と2基の古墳状の高まりを発見した。また、計画予定地の中央部分に位置する丘陵斜面の開墾地からは、弥生土器・土師器・須恵器を採集しており、弥生～古墳時代の小集落の存在を推定しているほか、牛頭天王神社の西側丘陵斜面の農道法面より窯状遺構を発見した。この分布調査により、計画予定地内には、古墳11および古墳状の高まり2の計13基、集落1ヶ所、窯状遺構1基を数える遺跡群が分布していることとなり、またこの調査が伐採を行わずに実施し、おもに丘陵の尾根線上と開墾地とを踏査したにすぎないことから、未発見の遺跡が相当数存在しているものとも予想した。とくに製鉄関連遺跡についてはその痕跡を地表に残しづらいことや、さきの団地造成にともなって数多くの製鉄関連遺跡が調査されていることから考えても、今回の開発計画地内にもこの種の遺跡が存在するのは確実であると判断した。(註1)

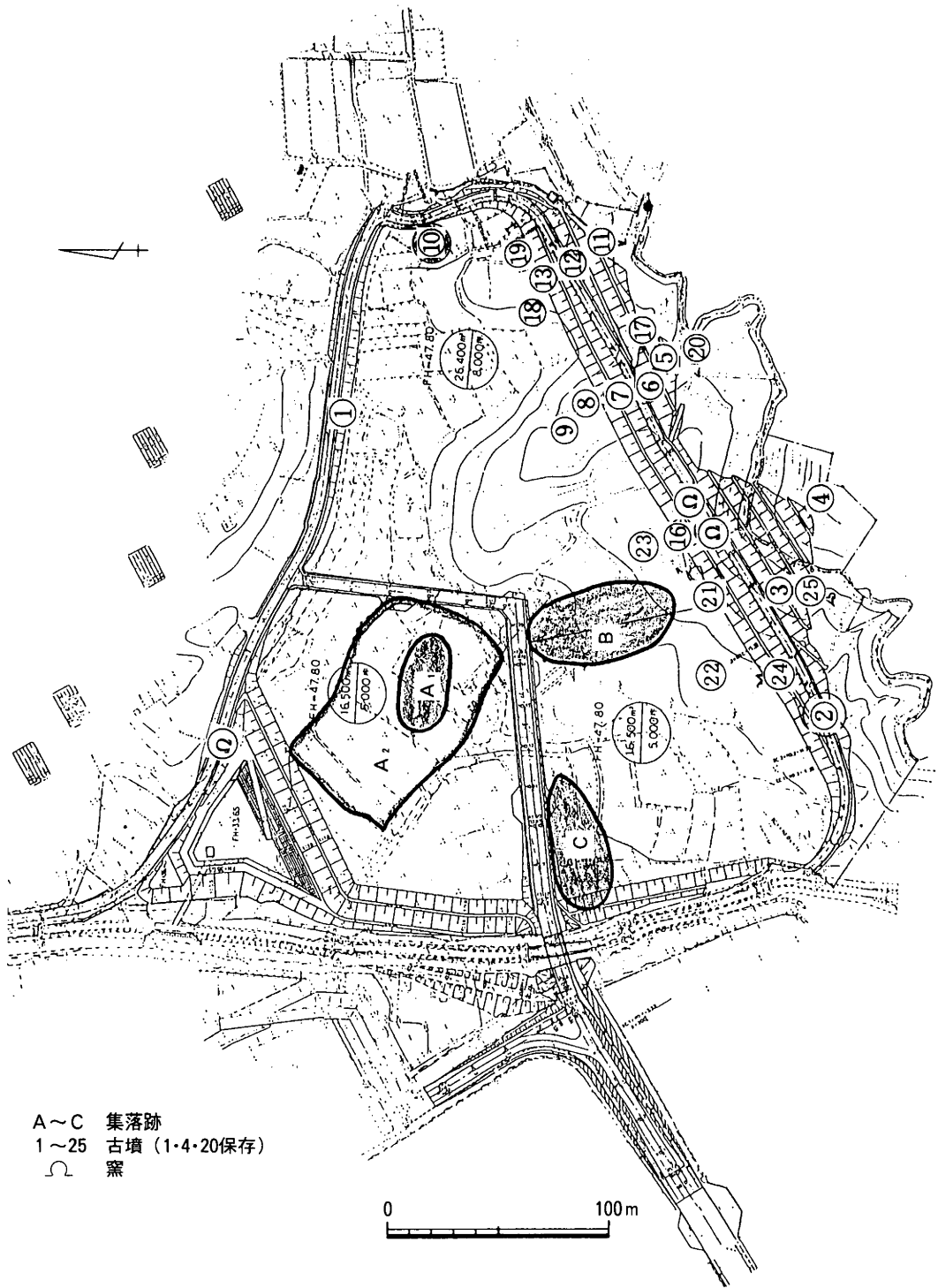
そして、この拡張計画の実現に向けた各種の調整・申請が進行し、平成5年11月には、西団地拡張地区内の連絡道路用橋梁工事にともなう確認調査が実施された。この結果、計画地西端の谷部に予想された遺物包含層は存在しないらしいことが確認され、予想以上に黒谷川の川幅が広く、堆積した土砂もかなりの量になることが判明した。(註2)

これ以降、ますます計画は進行し、平成7年5月11日、「水島機械金属工業団地西団地拡張事業に伴う文化財保護に関する覚書」が締結される運びとなった。この覚書にもとづき、新たな遺跡の有無と、周知遺跡のより詳細な情報を得ることを目的として、同年5～6月にかけて埋蔵文化財の確認調査を実施した。

確認調査は、重機を用いたトレンチ調査で、とくに製鉄関連遺跡の発見と、集落遺跡の分布する範囲の確認を重点において実施した。その結果、製鉄関連遺跡は確認されなかったものの、集落遺跡は3地点に分散していることが確認されたほか、古墳が19基と分布調査時点に比べて



第41図 計画地内遺跡分布図 (S=1/5,000) 平成4年6月調査



第42図 調査終了・保存遺跡分布図 (1/3,000)

7基の増加、窯状遺構は土師器を焼いた窯跡であることが判明した。この結果を受けて、事業者と文化財保護の協議を重ね、土師器窯と古墳1基は盛土保存、古墳1基は掘削範囲の変更で現状保存とすることが決定された。しかし、このほかの遺跡については止む得ず記録保存の処置をとることとなった。

この協議結果をもとに、平成7年7月4日、「水島機械金属工業団地西団地拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業」の「発掘調査覚書」が交され、調査期間を平成7年7月4日～平成8年3月31日の予定で実施することとなった。

(遺構・遺物)

調査は、工事の進捗状況にあわせて実施し、まとまった範囲ごとに調査終了遺跡の明け渡しを行なうというスタイルをとった。ここでは、以下に、遺跡、窯、古墳の順で概要を説明する。

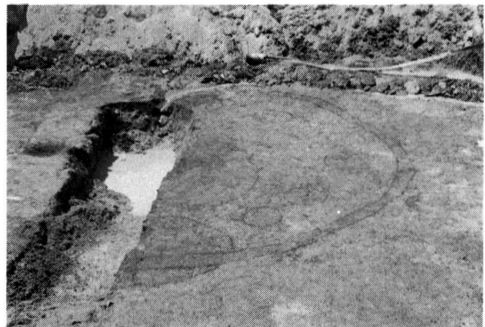
黒谷遺跡は、計画地中央の緩い丘陵上にも立地しているものの、ほかにも2カ所の遺物散布範囲が認められている。調査にあたっては、遺構の検出されたA地点のうちのA1の範囲と、B地点の範囲を全面発掘とし、遺物のみが検出されたA地点のうちのA2の範囲と、C地点の範囲は調査トレンチを増やして再度遺構が確認されないかどうかを判断したうえで対応することとした。その結果、A2では遺構が検出されたことから全面発掘の処置をとった。一方、C地点は遺構の検出がなかったことや、この地点が盛土範囲内であり、建造物の建築位置にもあたらないことから、盛土保存の処置をとった。

さて、A地点で検出された遺構は、竪穴住居8軒、掘立柱建物2棟、溝、柱穴、土坑などである。それぞれの遺構にともなって弥生時代から古墳時代、古代までの土器等が出土した。

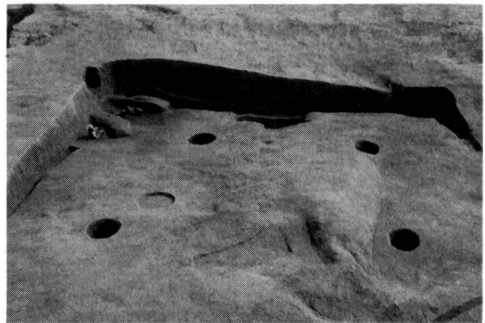
B地点での遺構は、竪穴住居3軒、柱穴などであり、弥生時代と古墳時代の土器等が出土したことから、それぞれの時期の小集落が営ま



1. A地区遺構検出状況



2. A地区検出の住居址



3. B地区検出の住居址

れたものである。とくに古墳時代の住居には、かまどが取り付けられていたが、その取り付けられる位置が方形のプランを呈するそのコーナーにあたり、市内でこれまでに検出されたかまど付の住居の中では最も古い段階のものであることが判明した。

C地点では、古墳時代の土器がわずかに出土したものの、その土層観察からは砂質系の堆積のみであり、出土土器も磨滅していないことから、この周囲に集落の存在する可能性が予想された。しかし、周辺の確認調査トレンチからはまったくそのような痕跡は認められなかったため、すでに洪水等により削平されたものと考えられ、その再堆積による遺物包含層の出土遺物と判断した。

次に、窯跡は、農道の法面に露出したものであり、そこより採集される遺物が土師器片のみであることから、土師器を焼成した窯と判断した。調査は、農道より下方の丘陵斜面を掘削する計画であったことから、灰原の確認を目的にトレンチ調査を実施した。その結果、すでに丘陵斜面は掘削を受けており、また丘陵下の水田部も湿地帯で谷部に相当することからごくわずかな土器片が出土したほかは窯に関する遺構・遺物は検出できず、すでに洪水等により流失した



第17図版 土師器窯跡

したものと考えられる。窯本体については、保存対象としたことから、その形状等不明であるが、窯の上方の丘陵斜面に敷設される道路工事ともなって掘削範囲内の調査を行い、窯がその掘削範囲内まで延びていないことを確認した。また、法面に露出した窯体の幅がかなりせまく、しかも非常に高温で焼かれていることから焚き口に近いものと推定され、おそらく窯体の規模はそれほど大きなものにならないことを示すものであろうか。なお、窯の保存に関しては、保護砂として海砂を約10センチメートル厚で覆い、その上をさらにマサ土で道路の設計高まで盛土をしている。

黒谷川古墳群は、計画地の南、標高179mを測る山塊から北にいくつか派生した丘陵の尾根線上および斜面に立地している。

1号墳は、確認調査によって新規に発見された古墳で、後世の開墾により造成土中に完全に埋没していた。そのためその存在を地形観察から予測することは完全に不可能であった。最初に確認調査トレンチで横穴式石室に使用できるような大型の石材を掘りあてたが、畑地の造成土内であり、出土した遺物の大半も時代的に新しい土師器や鉄滓などで、わずかに須恵器の大甕片があったことから古墳の存在した可能性を予測したものの、畑地の開墾ですでに削平され、

破壊されたものと考えていた。念のためにトレンチの拡張をすると、板状の石材が立てられた状態で検出されたことから、さらにつづく石材を追求するとともに、床面の存在を確認するために掘り下げも行った。その結果、石材がつづくことと、床面直上と思われる位置に須恵器や鉄釘が検出されたことから古墳と断定した。本墳は、道路の路肩法面にあたる盛土の範囲内に位置することから、盛土保存の処置をとったものの、確認調査によって床面近くにまで掘り下げを行ってしまい、遺物の出土もみたことから現状での図面を作成したのち、保護砂として海砂を約20センチメートル厚で床面に散布、そしてマサ土で石室の上面までを覆い、さらに目印として再度海砂を散布したあと、道路の計画高までマサ土で覆い隠した。

2号墳は、調査の結果、古墳でないことが判明した。当初、本墳の内部主体は、高さ数メートルにおよぶ墳丘状の高まりから横穴式石室と予想されたが、その石材がまったく認められないことや、墳端の確認トレンチで墳丘盛土が砂であったことなどから、古墳と断定するには決定打に欠いたものの、墳頂にあたる位置に盗掘坑状の窪みが認められたことから、一応古墳と判断したものであった。しかし、調査が進むにつれ、墳丘盛土とも考えられた高まりがすべて砂で構成されており、明治以降の砂防工事による石積みにもなう盛土と、それを埋設させた洪水砂による堆積層になるものと判断した。

3号墳は、西に開口した横穴式石室墳であるが、墳丘上で検出されたいくつかの石列状の痕跡からはその墳形が八角形を呈する可能性があるものと考えている。墳丘および石室の規模では、そのほかの古墳と差はないものの、石材がそろっており、しかも丁寧に積み上げられた石室であった。この石室内より直刀1振、須恵器等が出土している。

4号墳は、当初計画ではその墳端の一部が掘削法面にかかるものであったが、保存協議の結果、開発の掘削範囲より除外し、現状保存とした古墳である。

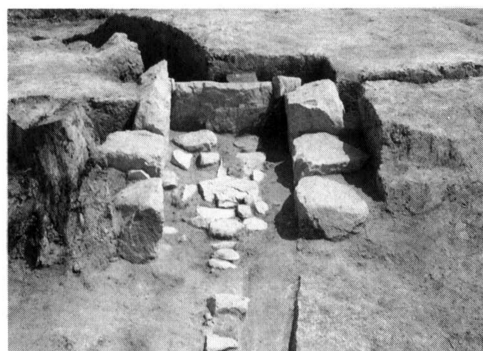
5～9号墳は、同一の丘陵尾根線上に立地している一支群であり、このほかにも、9号墳以北に古墳が築かれていたものと推定されるが、後世の開墾によりすべて消滅したものと推定され、調査トレンチでは1基も発見されなかった。しかし、開墾にもなつて造成された平坦面の谷側にめぐらされた石垣の中には、箱式石棺に用いられたと推定されるような石材が大量に含まれていることからかつてはかなりの数にのぼる古墳が築かれていたものであろうか。

5・7号墳は、箱式石棺を内部主体とする古墳で、5号墳からは鉄鏃と鉄鎌が、7号墳からは鉄鏃が出土した。

6・9号墳は、西に開口する横穴式石室墳で、6号墳はわずかに1石の石材が残されていたほかはすべて運び出されており、わずかな点数の須恵器が出土したのみである。一方、9号墳からは2回の埋葬が行われていたことが確認され、その2回目の時には須恵器の大甕を壊して石室床面として敷き詰めた上に遺体を安置していた状況が認められた。



1. 黒谷古墳群全景（東部地区）



2. 9号墳第二次埋葬



3. 9号墳第一次埋葬



4. 19号墳

8号墳は、同一丘陵上に6・7・9号墳が立地していることやその地形的状況を勘案すれば、古墳が築かれてしかるべき位置にあったが、調査の結果は何らの埋葬遺構を検出することができず、古墳が築かれていたかいなかったかの判断はできなかった。

10～13・18・19号墳は、同一の丘陵上に立地している一支群であり、すべて横穴式石室を内部主体としているが、10・19号墳が東に開口し、11～13・18号墳が西に開口することから、さらに2つの小支群に分けることができる。

10号墳は、石室の石材のあらかたが運び出されていたものの、奥壁の一枚岩が残されており、その大きさとその墳丘の規模からこれまで市内で調査された横穴式石室墳のなかでも上位に入る規模のものである。とくに墳丘の盛土の状況が明瞭にわかるものは少なく、本墳が非常に良好な資料を提供したことになる。

11号墳は、墳丘の1/4を失っていた古墳で、またその石室の残りも悪かった。

12・13号墳は、西に開口した横穴式石室墳で、12号墳は唯一天井石を残しており、石室内より金環、玉類等が出土した。同様に13号墳からも金環・玉類等が出土。

15・16号墳は、調査の結果、古墳ではなく、製鉄関連遺跡であることが判明した。当初より、丘陵の斜面上に立地していることと、その斜面を掘り込んで築いた周溝状の形態から、横穴式石室墳が予想されるものの、その古墳状の高まりは非常に低く、箱式石棺等を主体部とする古墳時代前期の古墳に思えるようであったことから、確実に古墳とは断定できなかったものである。調査によって、2基の周溝状の掘り込みは、製鉄用の炭を焼いた炭窯の本体と焚き口とを築くための掘り込みであったこと、2基の墳丘状の高まりは、廃棄した先の炭窯の本体および焚き口の上に盛土された造成であったことが判明した。

16号墳は、東に開口した小さな横穴式石室墳で、遺物の出土はなかった。

17号墳は、5～9号墳の立地する尾根の東斜面に築かれた古墳で、内部主体は、木棺直葬と推定され、棺外より須恵器が2点完形で出土した。

20号墳は、5号墳の南側で新規に発見された古墳で、地表面に箱式石棺の一部が露出していた。本墳は、開発の掘削範囲外であることからそのまま現状保存とし、石棺が露呈していることからマサ土で覆い隠した。

21号墳は、16・23号墳と同じ丘陵上に立地する横穴式石室墳であるが、16・23号墳が丘陵東斜面に築かれて東に開口し、21号墳が丘陵西斜面に築かれて西に開口することから、別々の小支群に分けられる。

23号墳は、16号墳の北側に新規に発見された古墳であるが、周溝の一部が残っていたにすぎない。

24号墳は、当初、周知古墳に該当する可能性のある古墳であったが、確認調査の結果は古墳

状の高まりがほとんど認められず、周溝の痕跡もなかったことから古墳でないものと断定した。しかし、再度確認を行ったところ須恵器の出土が認められたことから、古墳と推定し調査を実施した。調査の結果、不明瞭ながら周溝と土壙が確認された。

25号墳は、3号墳の墳丘内から発見された古墳であり、堅穴状の小石室を築き、石室内の一方に須恵器の坏蓋・坏身を並べて置いて枕とした状況が検出された。



1. 黒谷古墳群全景（西部地区）



2. 3・25号墳

表3 西団地拡張に伴う発掘古墳集計表

(単位：m)

| 名称 | 墳 | | 丘 | | 規模 | | 外部施設 | | | 内室 | | | 主体 | | | 出土遺物 | | | | | 時期 | 備考 | |
|----|-----|------------|-------|--------|----|-------|------|--------|-------|------|--------|-----|------------------------------|--------|--------|------|-----|----|----|-----|-----|-------------------|----------------------|
| | 墳形 | 外部施設 | 径 | 高 | 長 | 幅 | 高 | 長 | 幅 | 高 | 長 | 幅 | 高 | 床面 | 主軸方向 | 須恵器 | 土師器 | 鉄器 | 鉄滓 | 装身具 | | | その他 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 土床 | N59°W | 多 | 少 | 少 | 少 | | | 7C前半 | 保存 |
| 3 | 多角形 | 周溝 外護列石 | 8.5 | (1.5) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 敷石床 | N152°W | 多 | 少 | 多 | | | | 6C後半 | |
| 4 | 円 | 周溝 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 少 | - | - | - | - | | 6C | 保存 |
| 5 | 円 | - | 5.75 | (0.25) | - | - | - | - | - | - | - | - | 土床 | N129°E | 少 | - | 中 | - | - | - | | 6C前半 | |
| 6 | 円 | 周溝 | (8.5) | (1.2) | - | - | - | - | - | - | - | - | 土床? | N144°W | 多 | 少 | 少 | | | | | 6C後半 | |
| 7 | 円 | - | 約6 | (0.88) | - | - | - | - | - | - | - | - | 土床 | N151°E | 少 | 少 | 中 | - | - | - | | 6C | |
| 9 | 円 | - | 7.85 | (1.2) | - | - | - | - | - | - | - | - | 第1次床面 土器床 第2次床面 敷石床 | N115°W | 多 | 少 | 中 | | | 人骨 | | 6C後半 、 7C前半 | |
| 10 | 円 | 周溝 | 20.3 | (5.3) | 左 | (5.9) | 1.92 | (1.7) | (3.2) | 1.7 | (0.35) | 敷石床 | N114°E | 多 | 多 | 中 | 多 | 少 | | | 陶棺? | 6C後半 、 7C前半 | |
| 11 | 円 | 周溝 | (3.9) | (0.64) | - | - | - | - | - | - | - | 土床 | N109°W | 多 | 少 | | 少 | | | | | 6C後半 、 7C前半 | 開口部に閉 塞石、一部 残存 |
| 12 | 円 | 周溝 外護列石 | 9.47 | (0.94) | 右 | 3.8 | 1.2 | 1.2 | 1.82 | 0.94 | (0.89) | 敷石床 | N124°W | 多 | 少 | 少 | 多 | 多 | | | | 6C後半 、 7C前半 | 開口部に閉 塞石、一部 残存 |
| 13 | 円 | 周溝 外護列石 | 16.1 | (2.16) | 右 | 4.5 | 1.72 | (1.77) | 3.3 | 1.12 | (0.95) | 土床 | N120°W | 多 | 中 | 多 | 中 | 多 | | | | 7C | |

(単位：m)

| 名称 | 墳 | | 丘 | | 規模 | | 内室部 | | | | 主体 | | | 出土遺物 | | | | | 時期 | 備考 | | | |
|----|----|------------|------|--------|--|---|-----|------|------|---|-----|--------|--------|--------|---------|-----|-----|----|----|----|-----|--------------|----------------|
| | 墳形 | 外部施設 | 径 | 高さ | 形式と規模 | 袖 | 長 | 幅 | 高 | 長 | 幅 | 高さ | 床 | 面 | 主軸方向 | 須臾器 | 土師器 | 鉄器 | | | 鉄滓 | 表身具 | その他 |
| 16 | 円 | 周溝 外護列石 | 5.52 | (0.36) | 横穴式石室 長 2.7 幅 0.69 高 (0.62) | 無 | - | - | - | - | - | - | 敷石床 | 敷石床 | N40°E | 少 | | | | | | 6C | 開口部に閉塞石、一部残存 |
| 17 | 方 | 周溝 列石 | 7.8 | (1.54) | 木棺直葬 長 2.1 幅 (0.8) 高 (0.62) | - | - | - | - | - | - | - | 土床 | 土床 | N47.5°E | 少 | | | | | 紡錘車 | 6C前半 | |
| 18 | 円 | 周溝 | 4.9 | (0.47) | 横穴式石室 長 (2.4) 幅 (0.63) 高 (0.75) | 無 | - | - | - | - | - | - | 敷石床 | 敷石床 | N110°W | 少 | | | | | | 7C | |
| 19 | 円 | 周溝 | 15.7 | (1.06) | 横穴式石室 長 8 | 左 | 4 | 1.22 | 1.55 | 4 | 1.2 | (1.04) | 敷石床 | 敷石床 | N107°E | 中 | 中 | 中 | 少 | 少 | | 6C後半 7C前半 | 玄門部付近に閉塞石、一部残存 |
| 20 | - | - | - | - | 箱式石棺 長 (1.7) 幅 (0.38) 高 (0.58) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 保存 |
| 21 | 円 | 周溝 外護列石 | 9 | 2.4 | 横穴式石室 長 4.96 幅 0.8 高 (0.78) | 無 | - | - | - | - | - | - | 敷石床 | 敷石床 | N103°W | 少 | | | | | | 7C前半 | 開口部に閉塞石、一部残存 |
| 22 | 円 | 周溝 外護列石 | 4.64 | (1.02) | 横穴式石室 長 3.13 幅 0.55 高 (0.7) | 無 | - | - | - | - | - | - | 敷石床 | 敷石床 | N127°E | 少 | | | | | | 7C | 開口部に閉塞石、一部残存 |
| 23 | - | 周溝が一部残存 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 少 | | | | | | - | 残存は悪い |
| 24 | 円 | 周溝 | 6.4 | 0.92 | 木棺直葬 長 2.37 幅 0.59 高 (0.48) | - | - | - | - | - | - | - | 土床 | 土床 | N33°W | 少 | | | | | | 7C | |
| 25 | - | - | - | - | 竪穴式石室 長 3.27 幅 0.49 高 (1.07) | - | - | - | - | - | - | - | 一部敷石残存 | 一部敷石残存 | N88°E | 少 | | | | | | 6C後半 | |

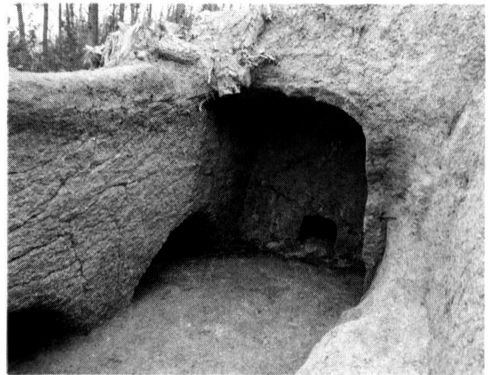
- 凡例
 1. () は、残存値を示す。
 2. 「規模」の「高」は、周溝の最深部から墳頂部までを計り、最大値をもちいる。
 3. 「横穴式石室の「幅」は、すべて奥壁幅を計る。また敷石床の場合「高」は、敷石からの高さを示す。
 4. 出土遺物の出土数は、5以下を少、6~10を中、11以上を多と表記した。
 5. 「時期」は、遺物が未整理のため概ねの年代を示すにとどめた。

最後に、製鉄関連遺跡は、当初、その立地から横穴式石室墳と推定されたものの、その石室石材がまったく認められなかったことや、墳丘の高さからは横穴式石室と考えられないことから調査は古墳として開始したものの、開始直後すぐに炭窯であることが判明し、黒谷製鉄関連遺跡として周知遺跡とするとともに発掘調査を同時に進めた。



1. 炭窯全景

炭窯は、2基検出され、丘陵東斜面に平行して上下に築かれていた。土層の観察から、下方の炭窯を廃棄したのち、上方の炭窯を築いたことが判明した。先に操業された炭窯は、残りが多少悪く、煙りだしや横口はことごとく崩れ落ちていたが、側庭部作業場には厚い炭層が残っていた。後に操業された炭窯は、山側の斜面からの土圧によりわずかに傾いていたものの、市内ではじめて天井部の一部が残っていた炭窯で、横口もそのほとんどが完存していた。



2. 2号炭窯

第20図版 製鉄関連遺跡

製鉄関連遺跡は、生活の場でないことから土器等の遺物はほとんど出土しないのが通常である。今回も遺物が出土していないことから炭窯の時期を決定することはできないが、調査地の距離の関連から、これまで西団地造成にともなって発見された製鉄遺跡・製鉄関連遺跡と同時期になるものと推定される。

(まとめ)

調査は、平成7年7月4日～平成8年3月31日の予定で開始したが、黒谷川遺跡の立地する範囲が、後世の開墾により大規模な改変を受けており、その保存状況が芳ばしくなかったこと、また、古墳もすでに盗掘を受けており、石材があらかた運び出されてしまったものや石室内からの遺物の出土がほとんどなかったこと、地表にその痕跡をあまり残さない製鉄および製鉄関連遺跡があらたに発見されなかったことなどから、調査は順調に、かつ迅速に進むことができ、予定より2ヶ月短縮され、平成8年1月31日に終了した。(前角, 表の作成は松尾洋平)

- 註1 前角和夫「水島機械金属工業団地協同組合西団地の拡張に伴う遺跡分布調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報』3 1994)
- 註2 村上幸雄「水島機械金属工業団地協同組合・西団地拡張地区への連絡道路の橋梁工事に伴う確認調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報』4 1994)

新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査 その6

遺跡名 小砂遺跡
所在地 総社市新本
調査期間 平成7年5月1日～10月12日
調査面積 9800㎡
調査概要

平成7年度の調査は、ほ場整備事業の対象地が小砂・市場地区の15haに決定したことに伴い、4月より急遽、殿砂地区の高砂遺跡の調査と平行して重機を用いて確認調査を行った。

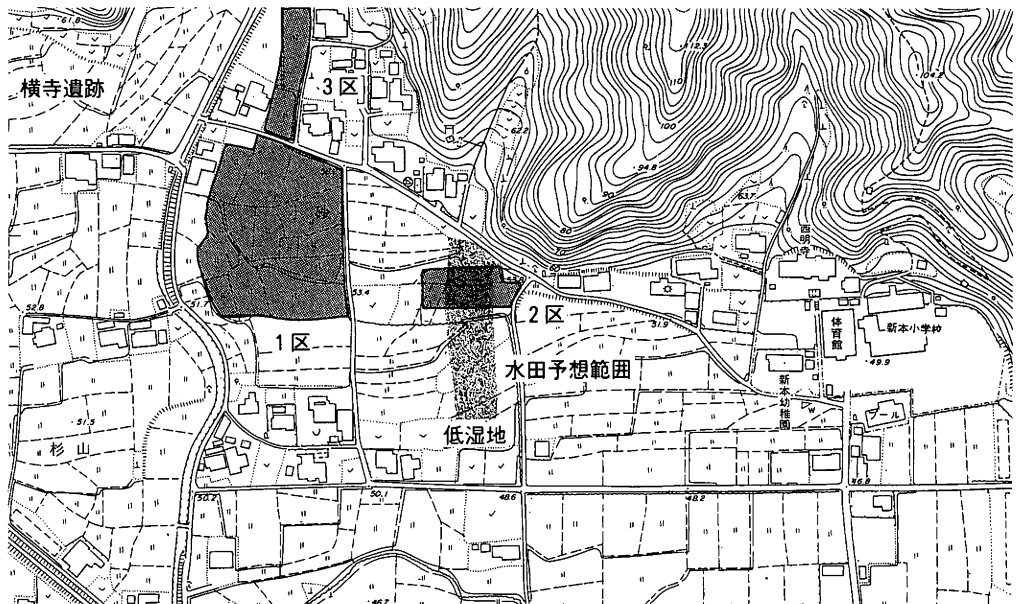
この結果、舌状に伸びた段丘上に濃密な集落遺構の存在を確認した他、丘陵より派生した小谷の低位部で水田遺構と見られる畦畔を確認した。

以上の確認調査の成果を受け関係機関と協議を行ったが、現時点での大幅な設計変更は事業の性格上、不可能な為、工事に伴い影響を受ける10,000㎡について発掘調査を行い記録保存の処置を取ることとなった。

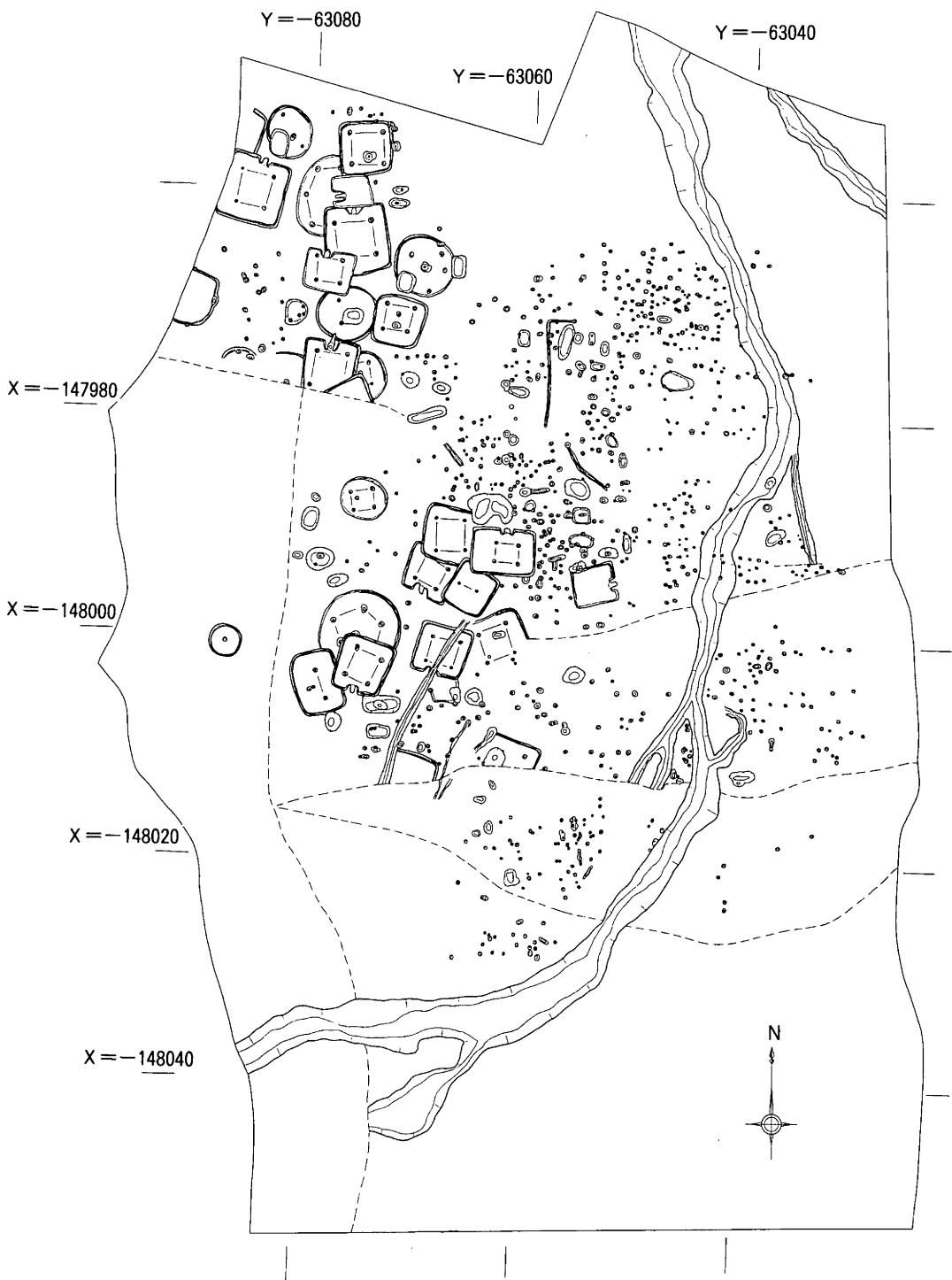
発掘調査は便宜上、段丘上を1区、低位部を2区、山裾の集落の間を3区として行った。

1区と3区が所在する段丘の基盤土は新本地区によく見られる、花崗岩土が風化した真砂土と粘質土が互層状に堆積したもので、侵水性がよく非常に脆い特徴がある。

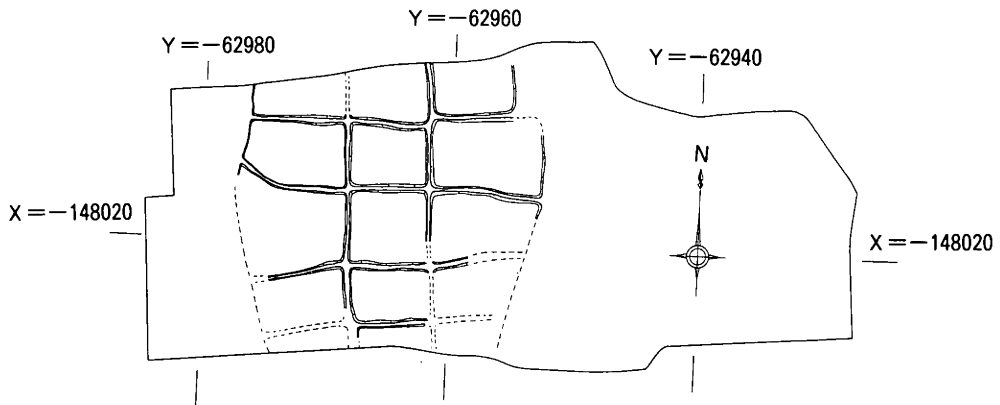
この性質のため、後世の水田耕作時のマンガンと鉄分が土壤に強固に沈着しており、遺構の



第43図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第44図 第1調査区 (S=1/600)



第45図 第2調査区 (S=1/600)

検出時に大きな妨げとなる場合が多かった。

また、小砂遺跡の位置する段丘は、平成4年度に、同様のほ場整備に伴う調査が行われ、弥生から古墳時代の大規模な集落等が確認された横寺遺跡とは津梅川を挟んで東へ指呼の距離にあり、その関連性は注目出来る。

調査は、重機により耕作土・表土の除去を行ったが、1区は近世の水田造成による削平が激しく、表土直下で全ての時期の遺構の検出が可能であった。

1区の中世の遺構は、ほぼ全面に広がり、柱穴・土塋・溝等があるが、このうち柱穴には柱痕跡に円礫が入れられた例が多く、建て替えに伴う地鎮の可能性も考えられる。また、土師器碗や小皿、銅銭が柱中に埋納された例も同様と考えられるが、備中では出土例の珍しい和泉型瓦器碗が埋納された柱穴もあり、建物の性格が窺われる。

古墳時代後期の遺構はカマド付きの住居址15軒・土塋・溝等がある。カマドの方向は北と南に大別でき、粘土で構築した袖の焚き口に角礫を塗り込めて補強した例もある。

古墳時代前期の遺構は隅丸方形の住居址6軒・土塋等であるが、住居の中央には浅い炭混じりの土塋のつくものが多く、作業台と思われる磨滅した台石が遺存する住居もある。

集落を北から南に囲む様に走る大溝は、上層から須恵器・土師器が纏まって出土するため、古墳時代後期には、ほぼ埋没したと推定出来るが、この溝より東には殆ど遺構が認められないため、水田との境界としての役目を、ある程度果たしていた可能性も考えられる。

弥生時代の遺構は後期に属し、住居址9軒・土塋・溝等がある。

住居址は、建て替えの拡張はさほど顕著でなく、比較的小型の住居が多いことが特色であり、同時期の重複も見られない。

大溝は、この時期に掘削されと考えられ、下層からは大量の弥生土器が出土したが、横寺遺

跡にみられたような、祭祀用の土器は殆ど認められず、通常的生活用土器が大半であった。

この溝は、残存する幅が4 m前後、深さ1 m弱であるが、集落の西は津梅川の浸食で急峻な斜面を呈することから、本来の深さで景観を考えると、集落の東と南を隔絶する目的があったと推定することも可能であろう。

2区は1区の東に位置し、段丘に沿って上方から派生する低位部に水田遺構を検出した。

遺構は、まず近世水田を除去し、ほぼ中世の溝を踏襲する現在の畦畔を検出した後、やはり中世と考えられる水田耕作土を取り去った後に、細砂に覆われた畦畔を確認した。

水田遺構は、調査区中程の幅25mのやや窪んだ部分で15区画の水田を検出したが、東西の高まりは中世の段階で削平され、畦畔も耕作土も遺存しておらず不明である。当初より低位部のみに営まれた可能性が高いと考えられる。

畦畔の検出レベルは段丘上の集落の検出面より1.5m低く、調査区の南北で80cmの比高差があることや、水路や水口が検出できないことから、自然の地形を利用した上方からの水の掛け流しによって経営されていたと推定できる。

この水田の時期については、上層の中世水田層とは明瞭に区別できることや、細砂中に須恵器しか含まれない点から古墳時代後期の集落と同時期に営まれたと考えられる。

今回、小規模ながら古墳時代後期の谷水田が確認されたことで、集落とそれに付随した生産基盤の一体的な景観の復元と、土地利用の進展を段階的に確認できた意義は大きい。

3区は、1区と同じ段丘で、現集落の隙間に残る細長い裾部を調査し、中世の建物、弥生時代の自然流路を検出した。

この内、建物は2間3間で南北面に庇が付き、近接する円形の土塋からは、完形の青磁椀が埋納された状態で検出された。

また、自然流路からは、1区の集落と同時期の弥生後期の土器が流れ込んだ状態で大量に出土したが、このことから集落は上方の現集落付近にも広がっていると推定できる。

この他に調査区以外の用排水路の掘削に伴い、立会調査を随時行ったが、遺構として捉えられるものはなく、若干の遺物の散布が確認できたのみであった。

本遺跡の調査を以て、平成4年11月より延べ28ヶ月に渡って行った新本新庄地区は場整備事業に伴う発掘調査は終了した。

一連の調査に伴う成果は、土器だけでも整理用コンテナ1000箱以上であり、その整理・公開にはかなりの時間と労力を必要とすることが予想されるが、一日も早い報告書の刊行に向け努力したい。

(武田 恭彰)



1. 小砂遺跡全景



2. 小砂遺跡第2調査区

鬼城山第1城門跡の発掘調査

所在地 総社市奥坂1762-6・7, 1,807-1

調査期間 平成6年11月21日～平成7年5月19日

調査概要

はじめに

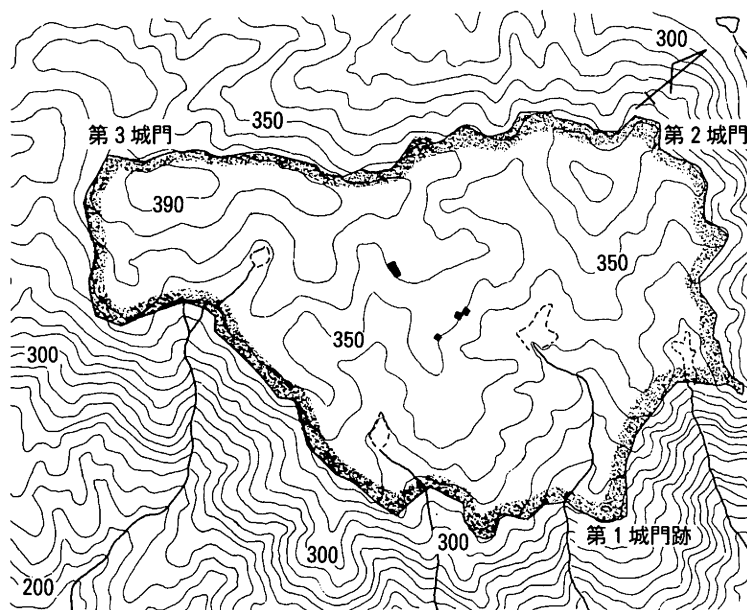
鬼城山第1城門跡では、平成5年11月15日に石垣等の保存状況についての調査を行った際に、門を支える唐居敷の加工のある石材が発見されたことから、鬼城山整備委員会（委員長 坪井清足（財）大阪文化財調査研究センター理事長）の指導を受けて将来整備を行うための基礎資料を得るための発掘調査（史跡現状変更）を実施した。その概要についてはすでに一部報告を行っている（註1）が、調査の終了が平成7年度に及んだこと、また調査後の埋め戻しなど復旧・保存のための作業は断続的ではあったが平成7年度事業として行ったので、ここでは調査の概要と調査後の経過・保存のためにとった措置について報告する。

調査概要

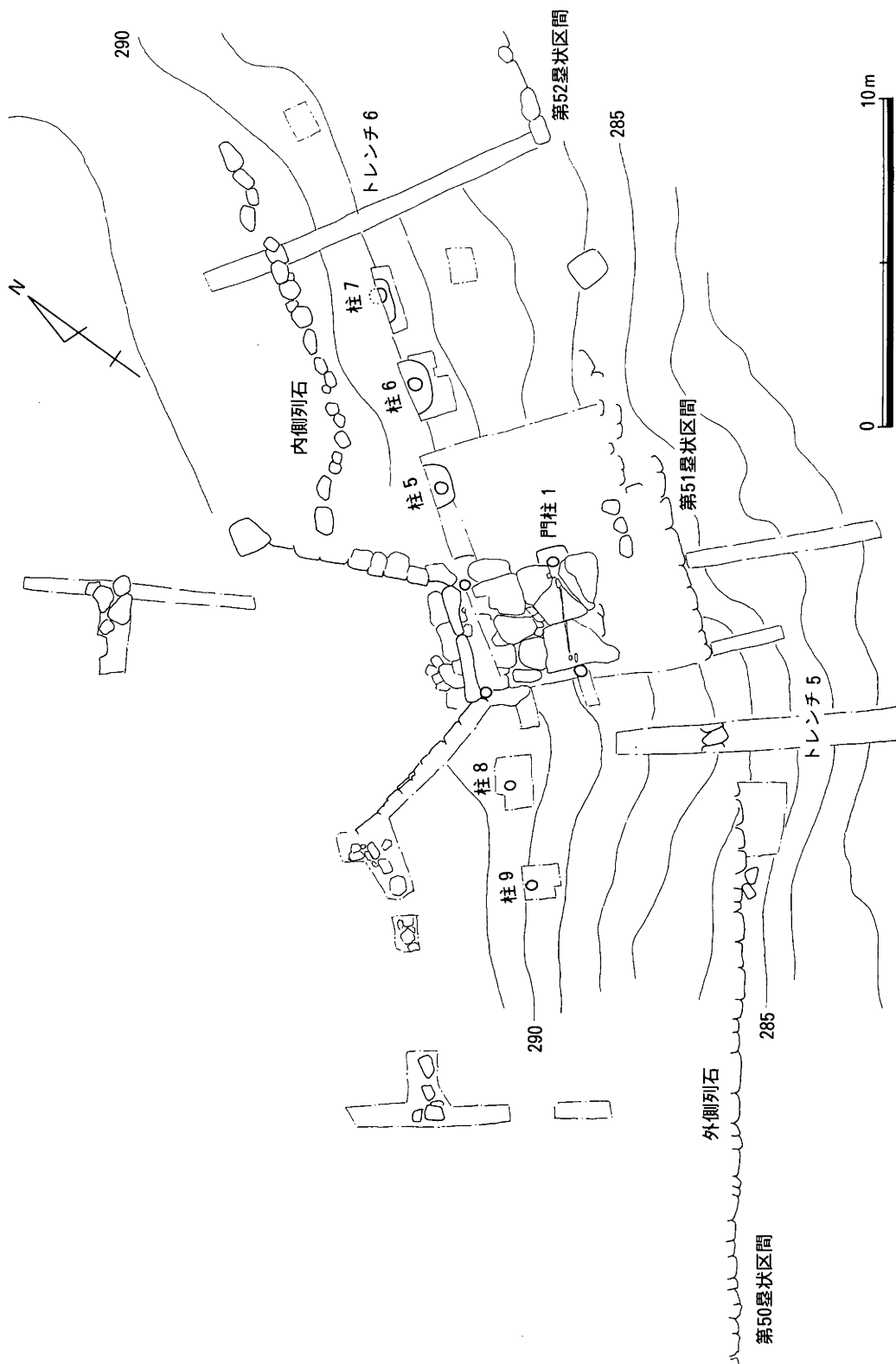
まず、調査における主な成果を列挙すると、1. 唐居敷が不動であり、城門の施設が面として残っていたこと、2. 門の施設は床面に敷石を備え、四本柱で支えられる構造物をもつこと、3. 門の西側には版築土塁があること、4. 門柱の後列に並んで柱痕が認められ、土塁上の構造について考える手がかりが得られたこと、5. 土塁の切断面には長さ7m・高さ4mの石積み

みが左右対称にあり、その間には岩盤が露出すること、6. 周辺のトレンチで1カ所ではあるが神籠石状列石の前面に柱痕らしいものが認められたこと、などをあげることができる。

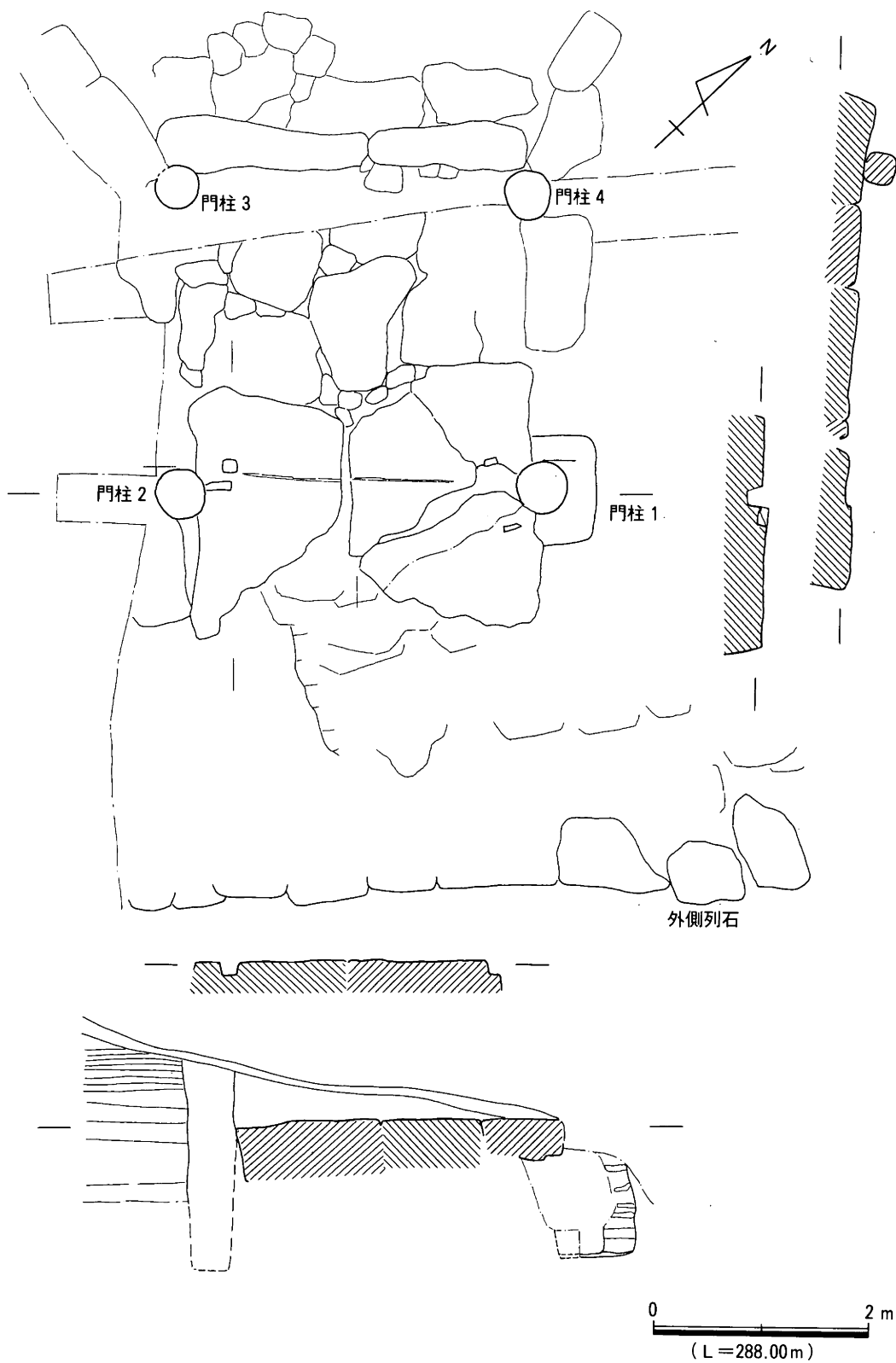
唐居敷は、掘立柱の門柱に沿わせる円弧状のくり抜きをもつ形式で、朝鮮式山城である大野城や基肄城などに



第46図 調査地位置図 (S=1/10,000)



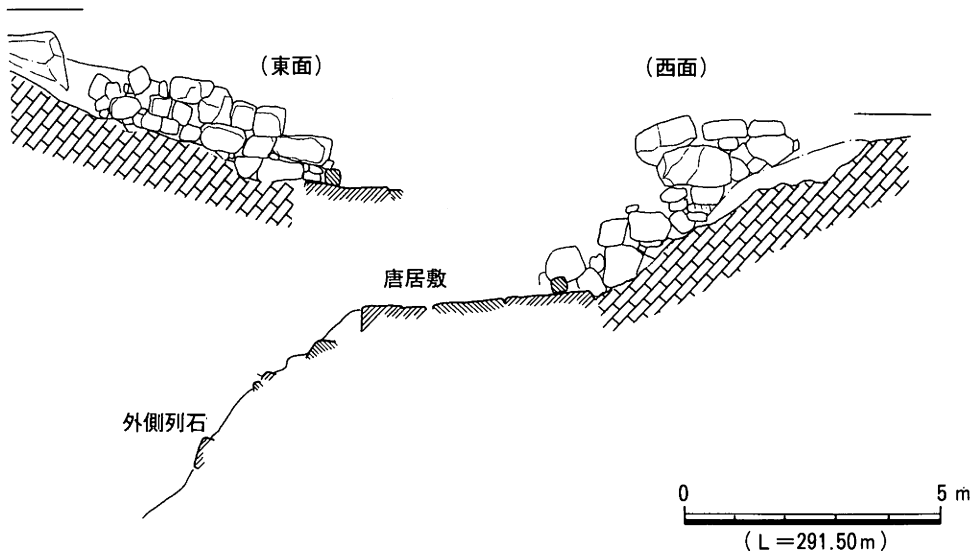
第47図 調査区位置図 (S=1/200)



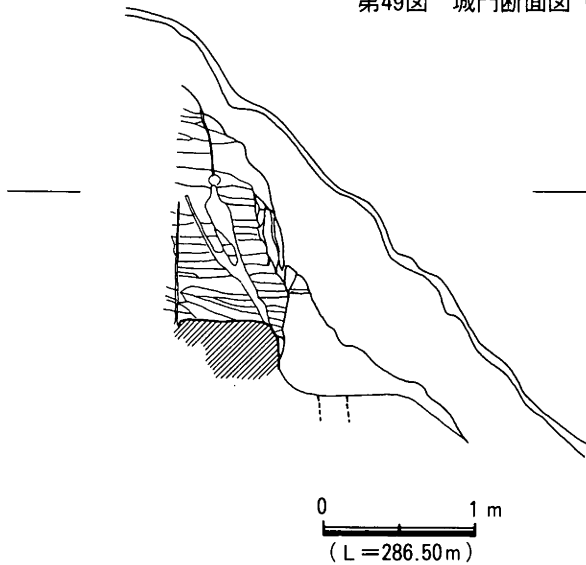
第48図 門の遺構 (S=1/60)

類例はあるものの細部まで一致するものはない。台形状を呈する2石を組み合わせるが、既発見の門柱1の側のものは3個に割れていた。新発見の門柱2の側のものは門柱1の側のものにくらべていくぶん小ぶりである。門柱に沿わせる円弧状のくり抜きの直径はいずれも約58cmで、柱に接する部分の加工は下ほど決りが大きくなる。門柱1と門柱2の間隔は3.46m、門柱3・4の間隔（奥行）は2.70mを測る。

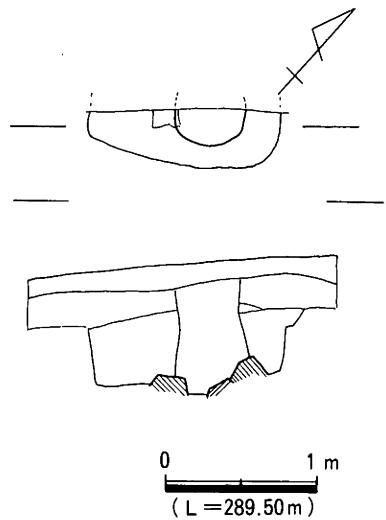
扉の軸摺穴は、門柱2の側では一辺約18cmの隅丸方形を呈し、深さはおよそ10cmである。断



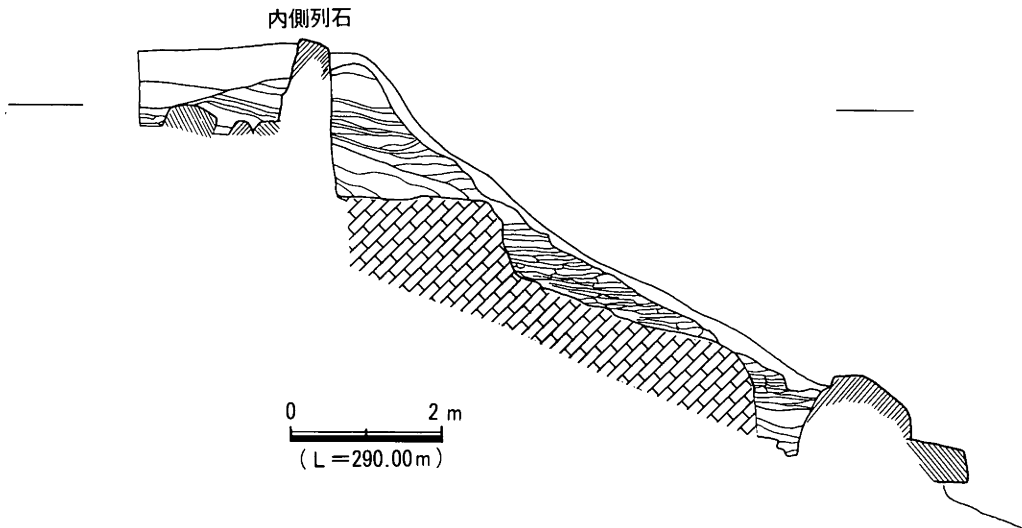
第49図 城門断面図 (S=1/150)



第50図 トレンチ5断面図 (S=1/50)



第51図 柱穴7平・断面図 (S=1/50)



第52図 トレンチ6断面図 (S=1/100)

面形はU字状を呈し、底面は少し凹凸を残す。埋土を精査したが、鉄錆などは残存しなかったため、軸受金物が存在したかどうかは不明である。扉の間口は240cmである。

軸穴の前面側に沿って蹴放の加工があり、城外側を4.5～5cm高くする。門柱と軸穴の間には25×11cmほどの方立の加工があるが、これは門柱の中心より少し城内側にずれた位置にある。

唐居敷の石材は、とくに踏面は丁寧な加工が施されて平滑である。

敷石で構成される門の施設は、土塁の横断面の中心から少し城内側に偏っており、敷石の端から土塁の基底部の端にあたる第51畧状区間の外側列石までの距離は2m、また背面の石積みの天端までの比高は約4mを測る。

敷石は、門柱3・4を結んだ線よりも城内側に及んでおり、端部は岩盤との空隙を埋めるようになっている。門柱3・4の城内側に沿って、框状の2個の長石が置かれる。また、門柱3・4のまわりには、敷石上に薄く粘土を被覆しているのが認められた。

門柱2・3の西側には、敷石の端に版築層が残存しているのが認められた。この版築層は、門柱2の位置では、ほとんど痕跡を残す程度の厚みでしかない。版築は、トレンチで確認されたところでは、ごく細かい単位で叩き締められており、非常に硬質である。また、たとえばトレンチ やトレンチ などとは単位の厚みや土質に明らかな差があり、門の周囲にとくに入念な作業が行われたことがうかがわれる。さらに版築そのものについても、たとえば門柱1や柱5の部分では、硬質な盛土であるが、典型的な版築の部分ほど明瞭な盛土の単位がはっきりわからないところもあり、門の周辺に限っても地業において作業や技法・工法に相違を生じている可能性もある。トレンチ では、門柱2・3の間の断面に、V字状の土層のずれが生じているが、これは、版築の端面を押さえていたものが崩壊する過程を示すものとみられる。

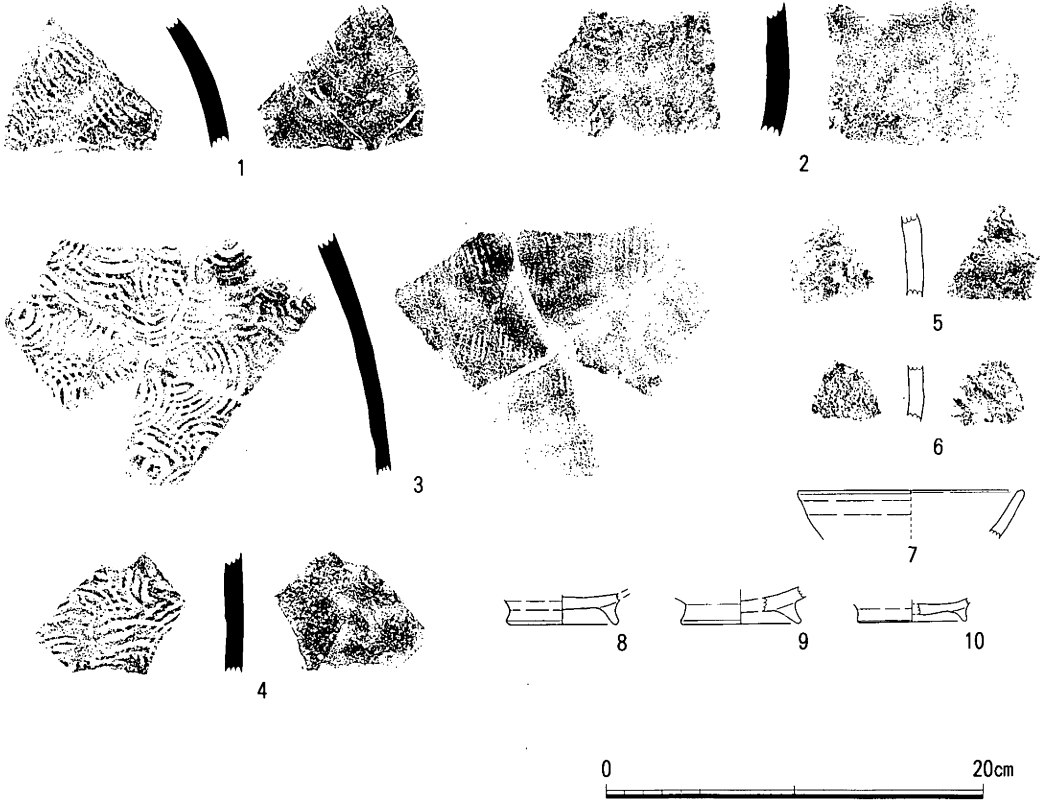
門の構築方法については、あらかじめ唐居敷や敷石を据えるための地業を行い、門柱の掘形を穿ち、門柱を立ててから、唐居敷や敷石を据えるという工程が考えられる。門柱の掘形は、門柱1で方形の一辺約1m・敷石からの深さ約50cmの規模である。門柱3・4では、唐居敷を伴っていないが、門柱に接する石積みの端面にわずかに窪みを残すものがある。

鬼城山の土塁の規模については、一般的に基底部の幅7m・高さ6～7mとされる(註2)が、今回トレンチ5・6で確認されたところでは、内側列石から外側列石までの間の距離は9.5～9.8m、外側列石の上面から土塁の切断面の石積みの天端までの高さは約7mである。城門のまわりのみ、いくぶん土塁の基底部の幅を大きくしていることがうかがわれる。また、この付近の土塁は基本的に夾築構造と考えられるが、土塁の上面の幅や前面の傾斜角については、あきらかでない。

さらに、第50壘状区間の外側列石付近に設定したトレンチ5では、列石の前面に直径約20cm、深さ15cmほどの柱の痕跡の可能性のあるものを検出した。しかし、同じ第50壘状区間の外側列石も西半では列石が岩盤上に直接築かれていること、また、第51壘状区間の前面などでは、保存状況そのものがよくなかったという事情もあるが、同様のものが認められないことなど、これが鬼城山において一般的な構造であったかどうか、さらに、この柱痕が版築のための堰板を支えるものであったかどうかについて、断定できる状況にはない。

門柱3・4の両側には、ほぼ3m間隔で柱痕が東側に3本分(柱5～7)、西に2本分(柱8・9)が検出された。これは、門柱とは異なり、版築を敷石の上50cmほど積み上げてから掘形を穿って立てられ、土塁上に柱が露出していたのであれば柵や板塀の可能性が考えられる。しかし、この柱列は、土塁の中央よりも少し後方に位置することから、遮蔽の機能を考えるには若干問題があるようでもある。またこのような柱列が水門を含めて、城郭全体に存在していたかどうかについては、これまでこの城郭において調査した事例がないため、今後さらに検証してゆく必要がある。

土塁の切断面の石積みは、背面側の調査を行っていないため、版築土塁との関係についてはなお問題が残り、土塁の「切れ目」あるいは「切断面」という表現が正鵠を得ているかどうかは明らかでない。この石積みは、土塁の主軸方向に対して斜めに築かれ、後列の門柱から城内に向けて屈折して延びる。東面の以前から露出していた部分で天端が残存していることが明らかであるので、石積みは、それぞれ長さ7m・高さ3mの規模で、城内側の端と端との間隔は8mを測る。また、城内側の端は、内側列石よりも城内側に若干はいつており、それにあわせてかのように内側列石も屈折する。石積みは、基本的には整層積みのようなようではあるが、基底部よりも上端付近に大きな石材を使うなどの特徴が指摘できる。石積みは左右対称であり、門柱の背後には内に広がる岩盤の面が露出する。この岩盤上には昇降のための階段の加工などは認



- | | | |
|----------------------|-----------------|----------------|
| 1. 城内北石垣の崩落土内 | 5. 外側列石前面精査中の表採 | 8~10. 城内内の堆積土内 |
| 2. 城内敷石上の流土内 | 6. トレンチ3 | |
| 3. トレンチ1b (土塁込込め土内?) | 7. 城内内調査中の表採 | |
| 4. 城内前面精査中の採集 | | |

第53図 出土遺物 (S=1/4)

出土遺物（第53図）は、須恵器・土師器の破片がごく少量認められたにすぎない。これらは流土中の出土で、門の構築の時期を明らかにするものではない。また瓦は出土していない。

今回の調査では、遺構の保存状態によって解明できなかった点も残ったが、唐居敷がこれまで神籠石（系山城）では類例が知られていない掘立柱に沿わせる円形の挟りのある形式のものであること、また門の構造自体もこれまで知られていない特異な形態のものであることが明らかになった。今後は、この調査によって提起された城郭そのものに関する基本的な問題点、具体的には土塁上に残された掘立柱列や、外側列石の前面の柱痕について、計画的・継続的な発掘調査による学術的解明が不可欠であろう。

調査後の処置について

発掘調査は、平成7年5月19日に現地での作業を終了した。調査後の現場の取り扱いについては、とりあえず埋め戻しを行うか、あるいは本格的な整備が行われるまでの間グラウンドシートで被覆しておくなどの方法が考えられたが、検出された城門の遺構が、他に例のない非常に珍しい遺構であり、しかも史跡としての鬼城山を理解するうえで欠くことのできないものであることから、保存上とくに問題がなければ、現地での実物の公開が望ましいのではないかという意見が多方面から数多く寄せられた。そのような状況の中で、応急的な措置として、石積みと唐居敷を含めた敷石の部分を見える状態にした状態での埋め戻しの作業を5月25日から6月19日にかけて実施した。その際、すでに梅雨入りしていたことから土砂の流出が懸念されたため、あらかじめ土のう袋に詰めて仮置きしておいた排土を土のうに入れたのままで敷く方法をとったが、作業後に県倉敷地方振興局から、土のう袋を使用した埋め戻しが保安林としての機能面で問題があるという指摘があったため、再度協議を行い、土のう袋から土を出したうえで段積みにして、植栽を行うようにという指導を得た。そしてそのための作業を10月に行い、平成8年3月に植栽を行って一応の作業を終了した。

なお、埋め戻しの作業にあわせて、4本の門柱と5本の掘立柱列の柱の位置に城内で調達した直径20cmほどのヒノキの丸太を立て、位置の表示と門の構造を理解するための助けとなるよう配慮し、あわせて簡単な説明を付した。これらは、あくまでも応急的なものであり、今後は、一刻も早くこの全国でも例のない貴重な遺構の整備が実現できるよう努力しなければならない。

（高 田）

註1 「鬼城山第1城門跡の発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報 5』1995

註2 葛原克人「鬼城山山城跡」『総社市史』考古資料 1987 総社市史編纂委員会 P.392

補注 第53図は前角作成



1. 第1城門跡調査後1



2. 第1城門跡調査後2

4. 発掘調査報告

中 須 賀 遺 跡

所 在 地 総社市三須1127-1外3筆

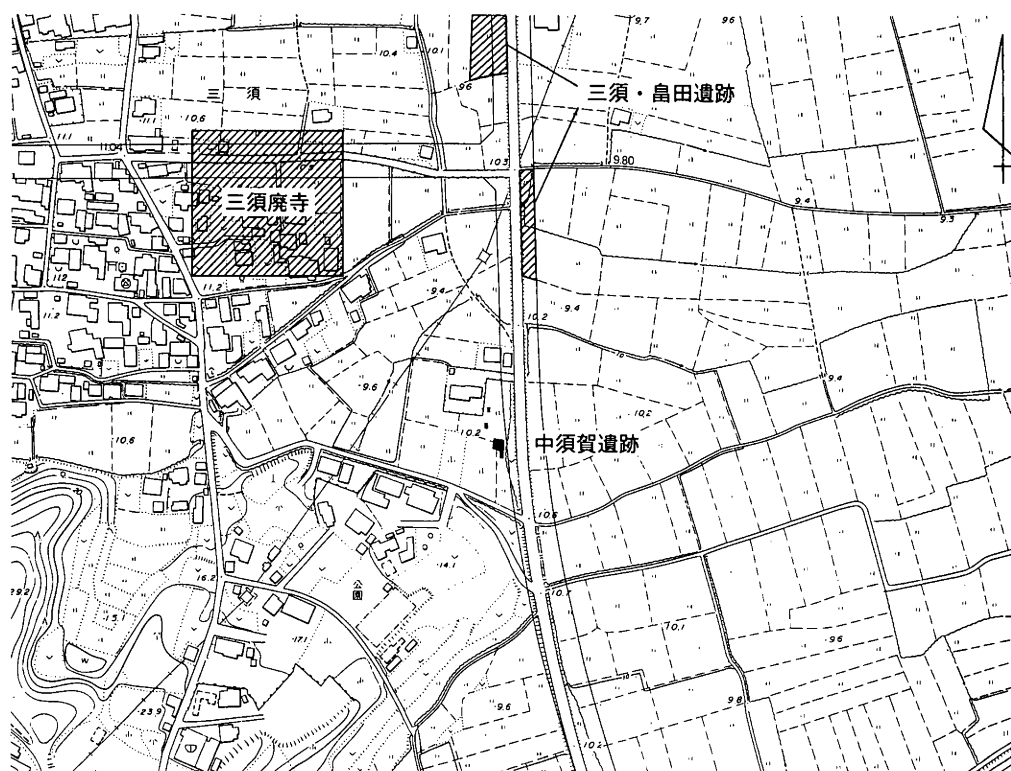
調 査 期 間 平成7年4月19日～4月26日

調 査 面 積 約100m²

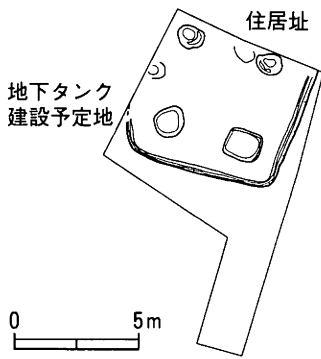
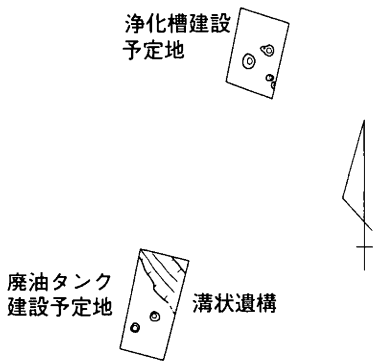
調査の経緯

中須賀遺跡は、総社市三須に所在する。この地は東流する旧高梁川によって形成された微高地が複雑に入り組んでいると考えられている。周辺には作山古墳・備中国分僧寺・尼寺をはじめ数多くの遺跡が知られており、北約2kmの地は備中国府推定地の一つにあげられている。近接する遺跡としては北西約200mには三須廃寺の存在が予想されており（註1）、北約200mでは三須・畠田遺跡が平成3年12月に調査された（註2）。また平成4年から東接する国道429号線の改良工事に伴って、沿線が岡山県教育委員会によって継続的に調査されている（註3）。

総社市教育委員会では、平成7年4月19日、田村石油店の依頼を受け、ガソリンスタンド建設予定地のうち、遺構に影響を与える地下タンク・廃油タンク・浄化槽建設予定地について確認調査を実施した。その結果、古墳時代後期の住居址1軒と、溝状遺構及び柱穴が検出され、



第54図 調査区配置図 (S = 1/5,000)



第55図 遺構配置図
(S = 1/300)

4月26日までの間発掘調査を実施した。なお、調査中、近接して発掘調査を行っていた、岡山県教育委員会正岡睦夫調査第1課長・岡田達矢文化財保護主任の御支援を受けた。

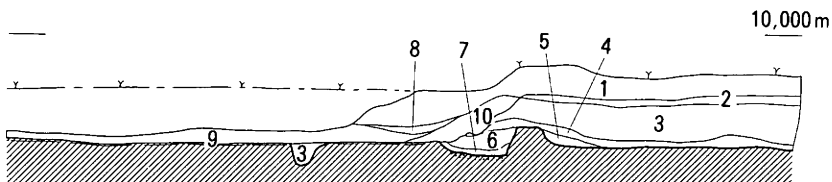
調査の概要

調査地は三須の集落が立地している比較的大きな微高地の端部に位置していると考えられ、調査区南端は基盤層が低くなり、グライ化が進行している。調査は重機によって耕作土と鋤床層を除去し、遺構面を検出した。調査地のうち地下タンク建設予定地の南半分は、中世以降の水田造成のため地下げが行われており、住居址の一部が削平されていた。

竪穴住居址（第57図）

竪穴住居址は地下タンク建設予定地に位置しており、全体の約 $\frac{3}{4}$ が検出され、ほぼ全体像の推定が可能であった。中世以降の水田造成によって南側約 $\frac{1}{3}$ の床面が数cm削平されていたが、壁体溝・柱穴は残存していた。平面形は一辺約6.5mを呈する方形であり、4本柱によって構成されている。壁は北半分では約30cm残存しており、埋土は茶灰褐色の砂質土であった。床面は茶黄灰褐色によく締まって硬く、北端付近では炭化物の分布が認められた。柱穴のうち、南西角の柱穴の底面付近には焼土・炭化物が分布していた。また南東角の柱穴-1は後述するように、焼土が転用されたものであることが判明した。

また、住居址西壁沿いのほぼ中央と推定される位置に淡赤褐色によく焼け締まった炉状遺構が検出された。被熱による硬化が著しいため、鍛冶に関する炉の可能性もあるのではないかとと思われる。出土した須恵器より6世紀後半の住居址と考えられる。(第59図1～3)

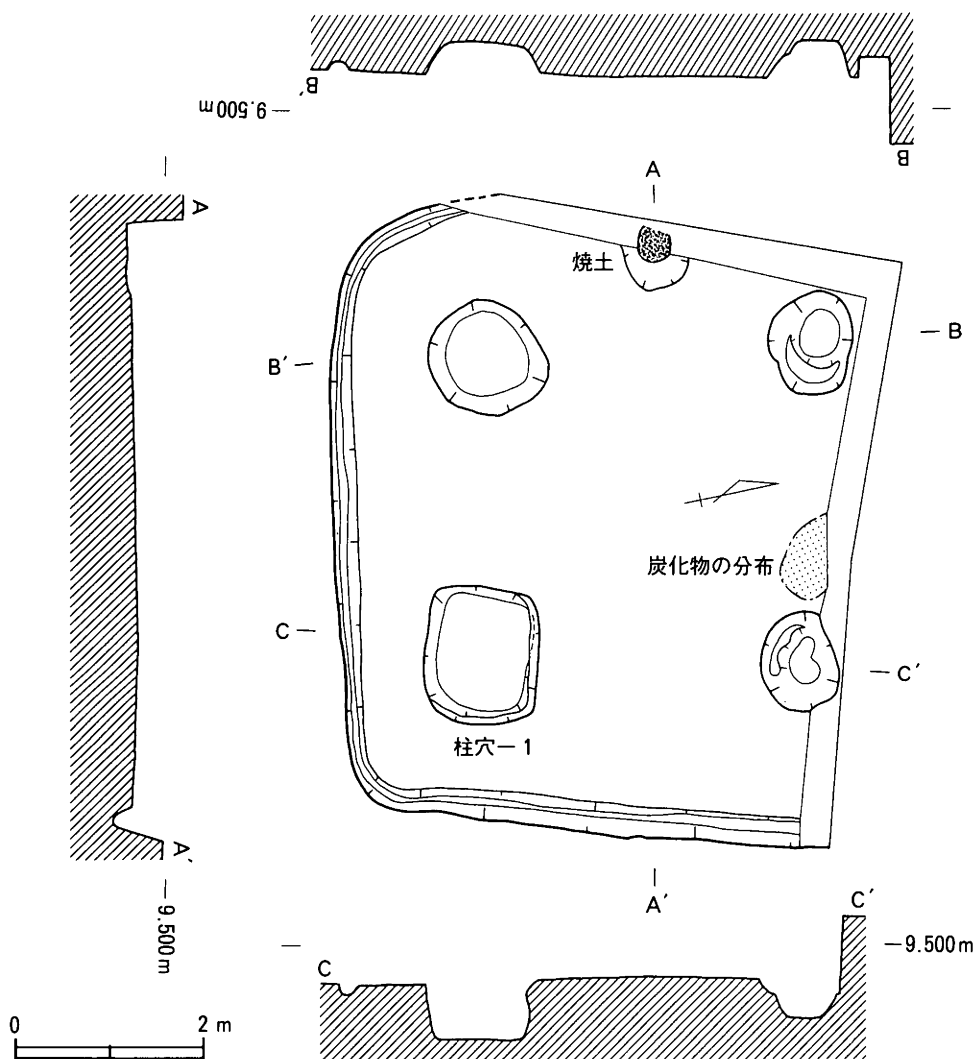


- 1 耕作土 2 床土 3 茶灰褐色砂質土 4 暗灰茶褐色砂質土 5 茶褐色砂質土 6 灰茶色粘質土
7 淡灰茶色砂質土 8 灰青色粗砂層 9 灰青色粘質土(水田層) 10 淡灰青色砂質土(畦畔)

第56図 地下タンク建設予定地西壁断面図 (S = 1/60)

竪穴住居址内柱穴-1（第58図）

規模約1.45×1.20m、深さ約0.65mを測り、内壁面は赤褐色によく焼け締まっている。特に



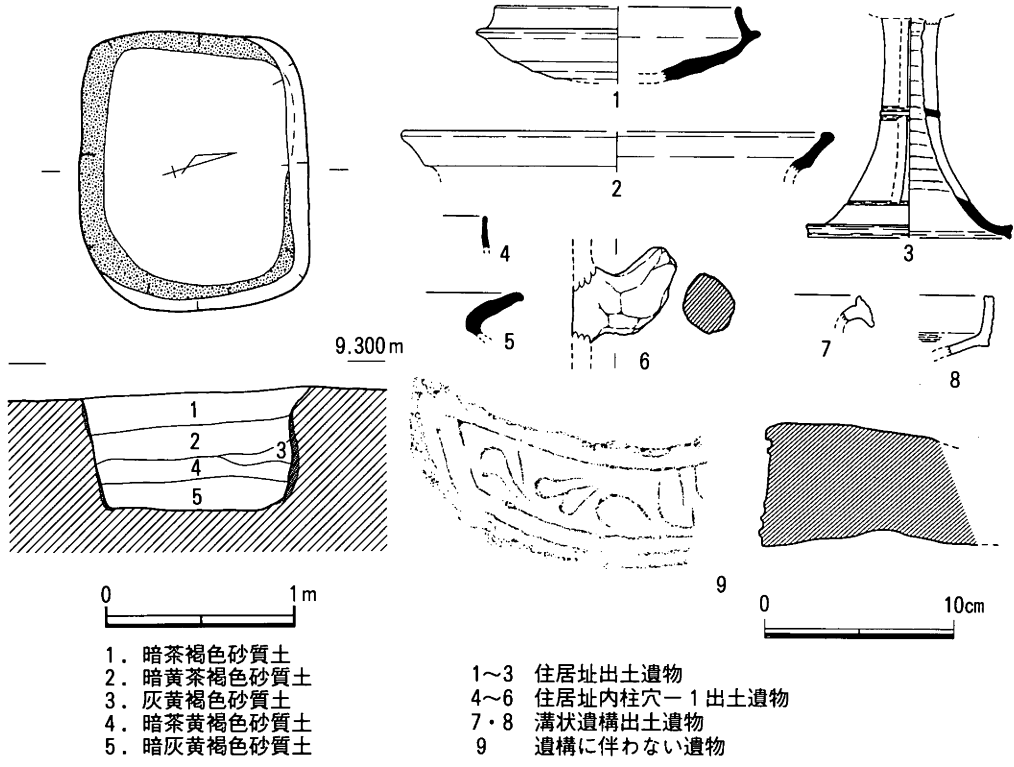
第57図 竪穴住居址平・断面図 (S = 1/80)

北側長辺の壁面は一部オーバーハングしており硬化も著しく、硬化部分の面積も広い。底面には炭化物が一面に分布していた。埋土の最上層は床面に近い暗茶褐色砂質土であり、床面を検出した際に他の柱穴と同様の状態で検出され、埋土の状況も他の柱穴と変わらなかったこと等から住居址を作る際に柱穴に転用され意図的に埋められたものと考えられた。埋土には炭化物・焼土が混じり、須恵器小片と土師質の甑の把手が出土した。これらの遺物から6世紀後半に営まれたものと考えられる。(第59図4～6)

同様の遺構は、北東約2kmに位置する窪木薬師遺跡で19基検出されており、鍛冶に伴う製炭用の窯状遺構と推定されている。(註4)

溝状遺構

廃油タンク建設予定地の北角で検出された。長さ約2.5m、幅約1.5mを調査した。埋土中よ



第58図 柱穴1—平・断面図 (S = 1/40)

第59図 出土遺物 (S = 1/4)

り出土した土器(第59図7・8)より、弥生時代後期以降の溝と考えられる。

遺構に伴わない遺物(第59図9)

軒平瓦1点が地下タンク建設予定地の遺構検出時に遺構面上面で出土した。約半分が残存しており均整唐草文平瓦である。同様の瓦が北西約200mに位置する三須廃寺推定地で出土しており、もとはこの地で使用されていたものと推定される。淡灰黄色を呈しており、焼成は良好である。一部に二次的な被熱と考えられる赤化が認められる。天平期の末葉のころのものと推定される。

以上のように今回の調査では弥生時代の溝状遺構と6世紀後半の竪穴住居址が明らかになった。製炭用と考えられている焼土壌があることや、住居址内に炉状の遺構を持つことなどから鉄生産に関連していた可能性が指摘できる。6世紀後半という、古墳数・集落数が急増加する時期の生産基盤を考える上で重要となるであろう。(高橋進一)

(註1) 葛原克人「三須廃寺」『総社市史』考古資料編 総社市 1987

(註2) 武田恭彰「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 1993

(註3) 物部茂樹「国道429号線改良に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』24 1994

物部茂樹「国道429号線改良に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』25 1995

(註4) 島崎 東『窪木薬師遺跡』岡山県教育委員会 1993



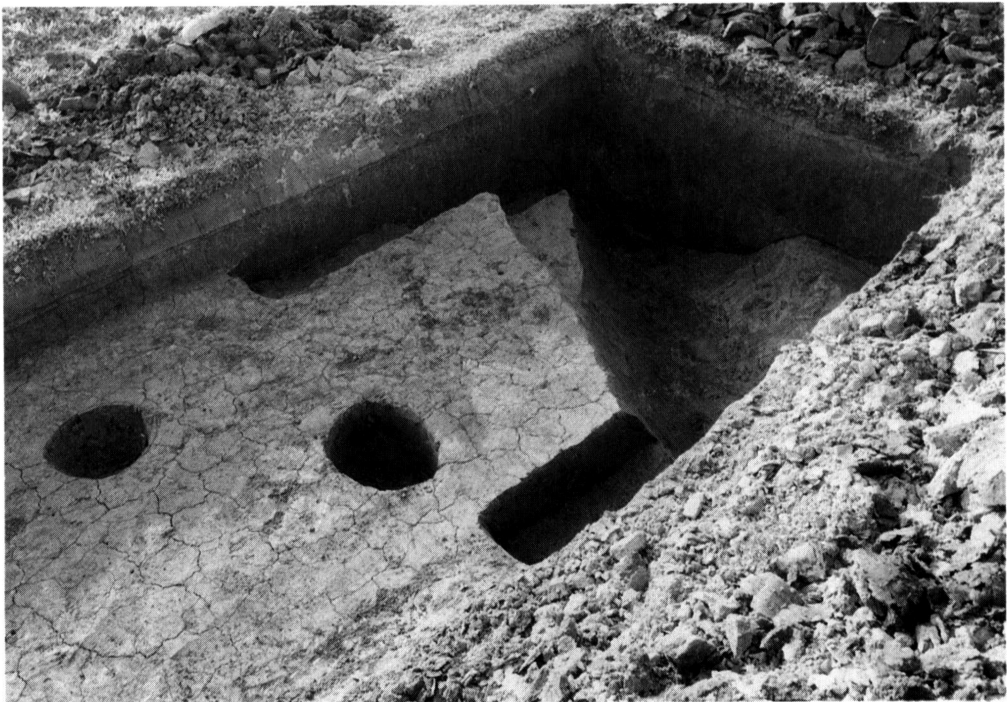
1. 住居址完掘状況



2. 住居址内炉状遺構



1. 住居址内柱穴－1 完掘状況



2. 廃油タンク建設予定地完掘状況

ふる びらき
古 開 遺 跡

協栄生命保険（株）岡山総社ビル建設に伴う発掘調査

所在地 総社市中央一丁目2-110

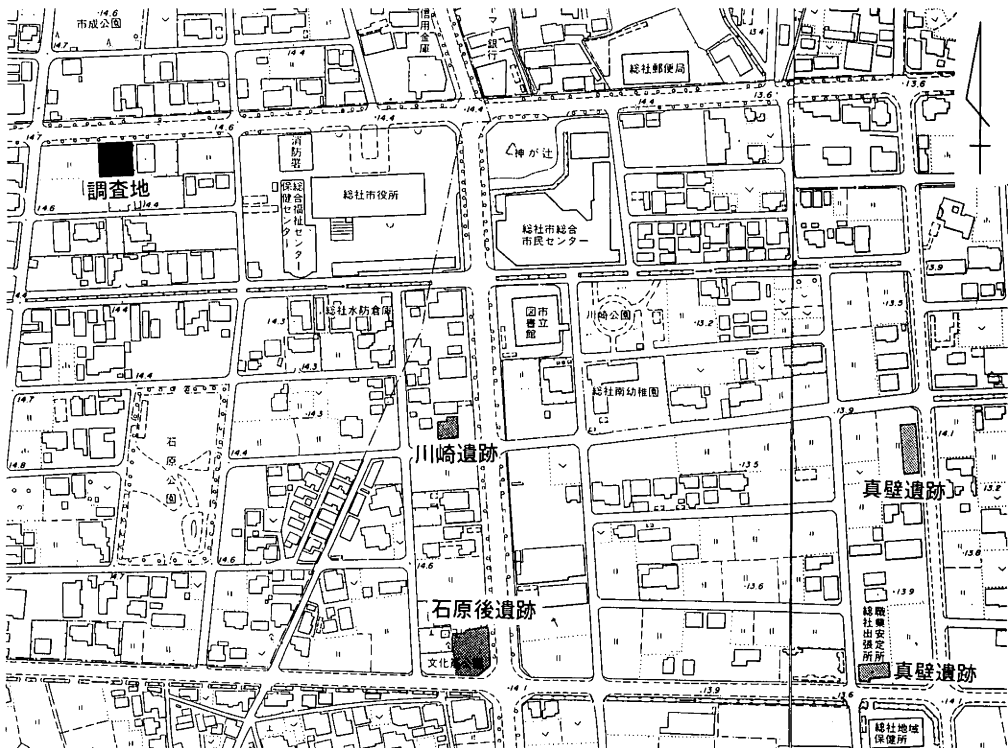
調査期間 平成7年4月4～18日

調査面積 約500m²

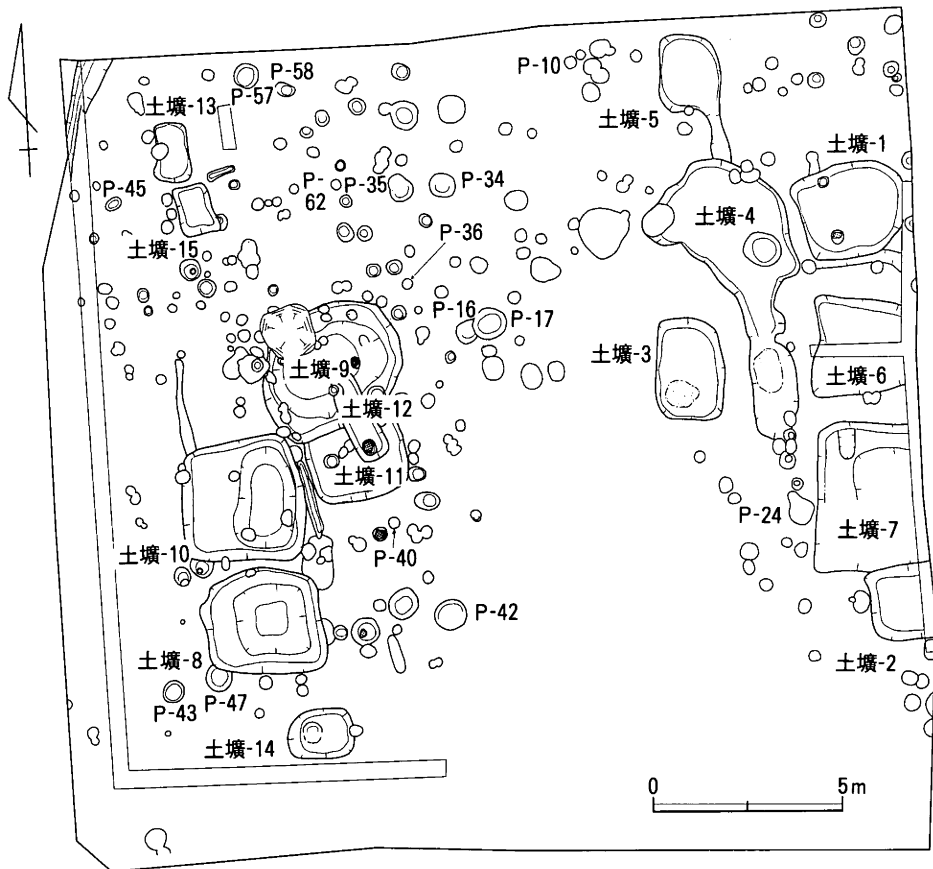
調査経緯

古開遺跡は現在の総社市街地の中央、総社市役所の西約80mに位置しており、畑地として利用されていた。総社平野は西を高梁川、東を足守川によって区画されており、さらに高梁川より分流した大小の旧河道によって細かく微高地が形成されている。調査地はそうした微高地の1つに位置し、周辺では真壁遺跡、石原後遺跡、川崎遺跡が確認されている。

平成7年1月、協栄生命保険（株）岡山総社ビルの建設が計画された。当地には遺構の存在が予想されたため、総社市教育委員会では平成7年3月1日確認調査を実施した。その結果、溝・柱穴等の遺構の存在が確認されたため発掘調査覚書を締結し、発掘調査を実施した。



第60図 位置図 (S = 1/5,000)

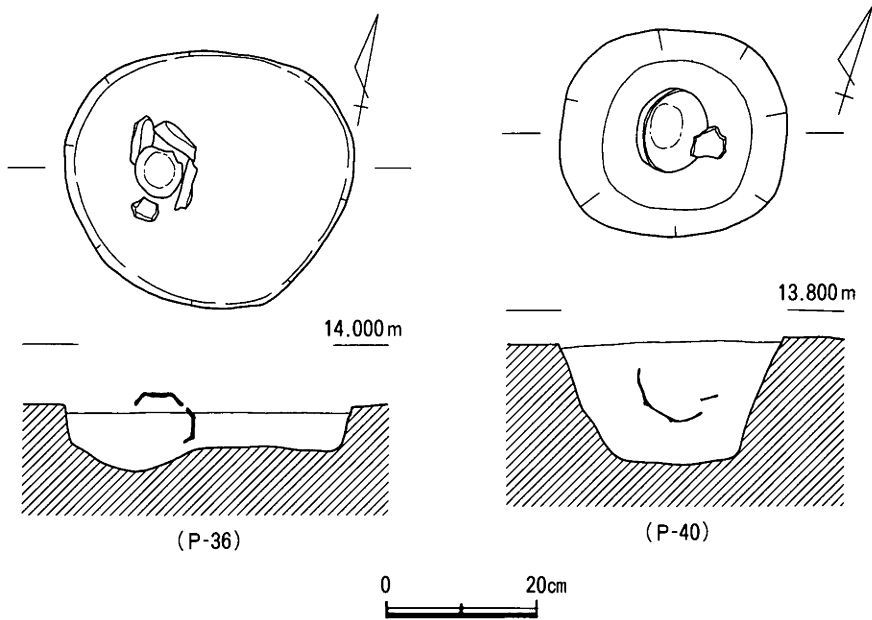


第61図 遺構配置図 (S = 1/200)

調査概要

耕作土の下は淡黄灰色粘質土の床土層であり、その下層には中～近世の水田層と考えられる厚さ約6cmの淡灰白褐色砂質土層が認められた。遺構はその下層の淡灰茶褐色砂質土層に掘り込まれている。現地表面から遺構面までの深さは約40cmである。検出された遺構は土壙が14基と柱穴多数、溝状遺構1であったが、調査区南半中央部では遺構が確認されず、広場状の空間が設けられている。土壙は大小あるがいずれも深さ30cm弱であり、土壙-2と土壙-4からはまとめて土師器碗が出土した。

土壙-1と土壙-2の埋土はいずれも砂質の強い淡灰白色砂質土であった。土壙-4の埋土は淡灰茶褐色砂質土で黄色いブロックが含まれており、底面は硬く、炭化物が分布していた。埋土中から最も多くの遺物が出土しており、検出面からすぐに遺物が出土しはじめ土師器碗が折り重なっていた。焼土面からは青磁碗の破片が出土している。土壙-5の埋土は淡灰茶褐色砂質土であった。土壙-6の埋土は暗灰褐色砂質土であり、埋土中には焼土片・炭化物が多く含まれていた。土壙-7の埋土は暗灰茶褐色砂質土であり、埋土中には土器片・焼土片・炭化物が多く含まれていた。上部は削平されたためか深さ約10cmと浅かった。底面中央には浅い窪



第62図 P-36・P-40遺物出土状況 (S = 1/10)

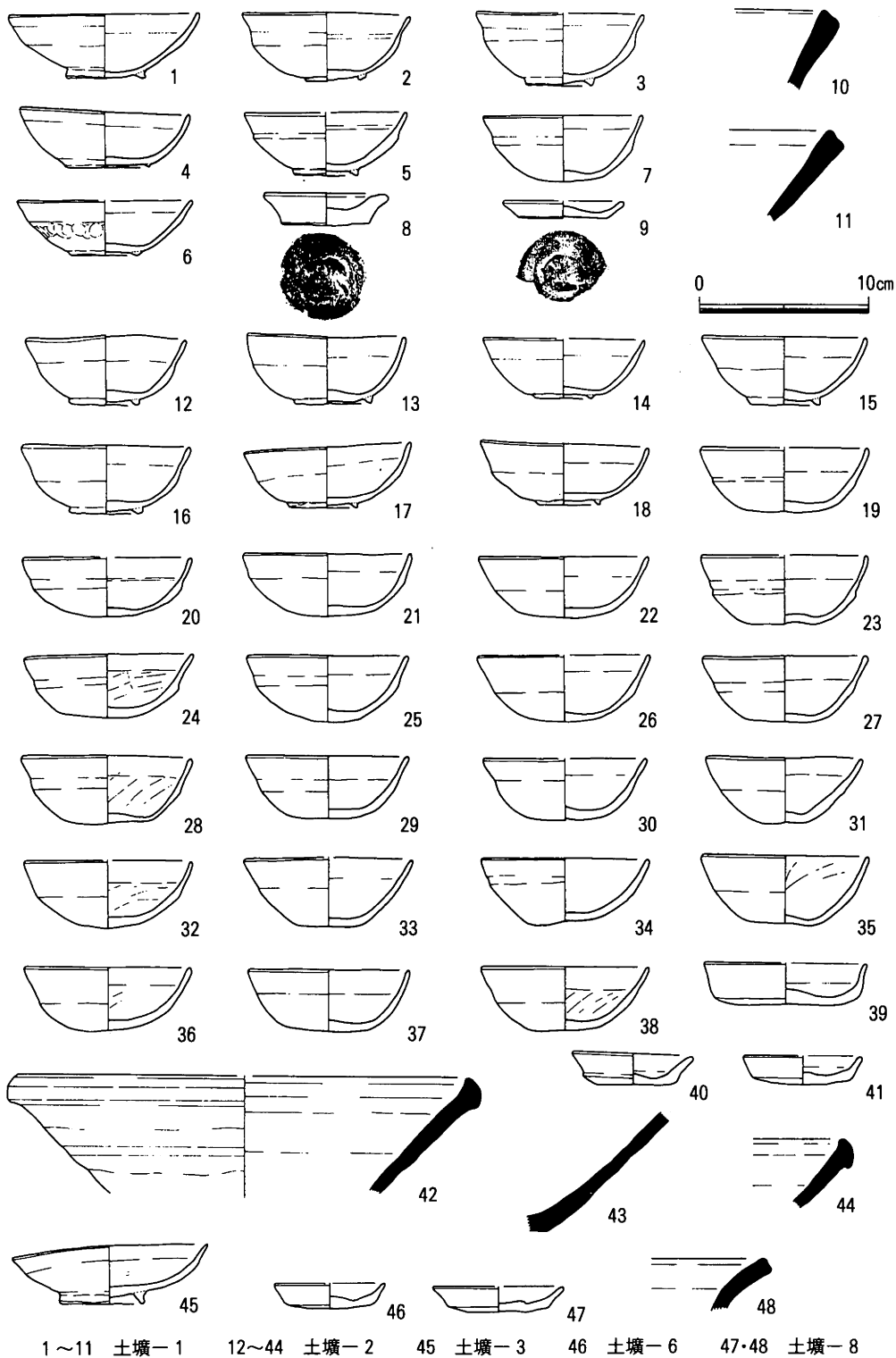
みが認められた。土壙-8の中央には約1.8m角の窪みがあり、土器片が僅かに含まれていた。土壙-11・土壙-9・土壙-12は順に切り合っており、さらにその上に根石の入った柱穴も並んで認められたため、建物の存在も予想される。土壙-9の埋土は淡茶灰褐色土であり、床面は淡茶灰褐色でよく締まって硬くなっており、浅く二段掘りになっている。中央の窪みの中には褐色の強いやや粘質の砂質土が入っていた。土壙-10の平面形は隅丸方形に近く、床面は茶灰褐色によく締まって硬い。床面の東半分は不整楕円形に深さ10数cm窪んでいる。埋土中から鉄滓も出土している。土壙-11は土壙-9と土壙-12に切られており、平面形は隅丸方形と推定される。底面までの深さは約20cmと浅く、埋土は淡茶褐色砂質土であった。土壙-12は一番最後に掘り込まれている。規模は2.4×0.8mとやや小型で細長い。土壙-13は埋土中から20~50cmの礫が6個囲むように出土し、中からはほぼ完形の土師器碗Bが2点出土した。この土壙-12と土壙-13は墓塚の可能性も考えられよう。土壙-14の埋土は淡灰白褐色砂質土であり、ほぼ中央の窪みに焼土・炭化物の分布が認められた。

柱穴には礎板状の石の入るものもあり(第26図版2)、建物を構成していたものもあると推定されるが、明らかには出来なかった。また調査区の北西端で灰白色砂質土の入る溝状遺構が検出されたが、遺物が出土しなかったため時期等は明らかにできなかった。(高橋)

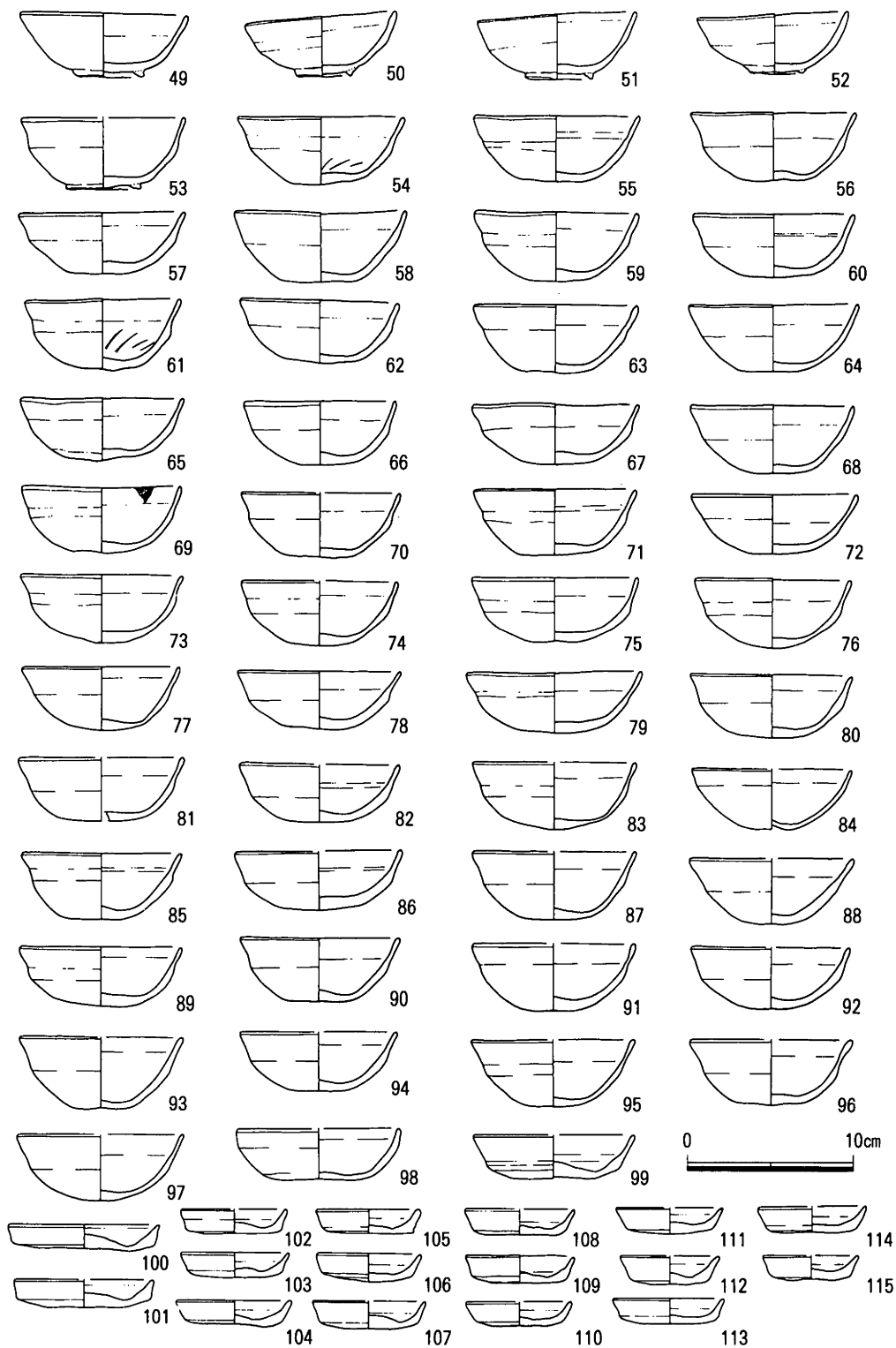
出土遺物

○土器

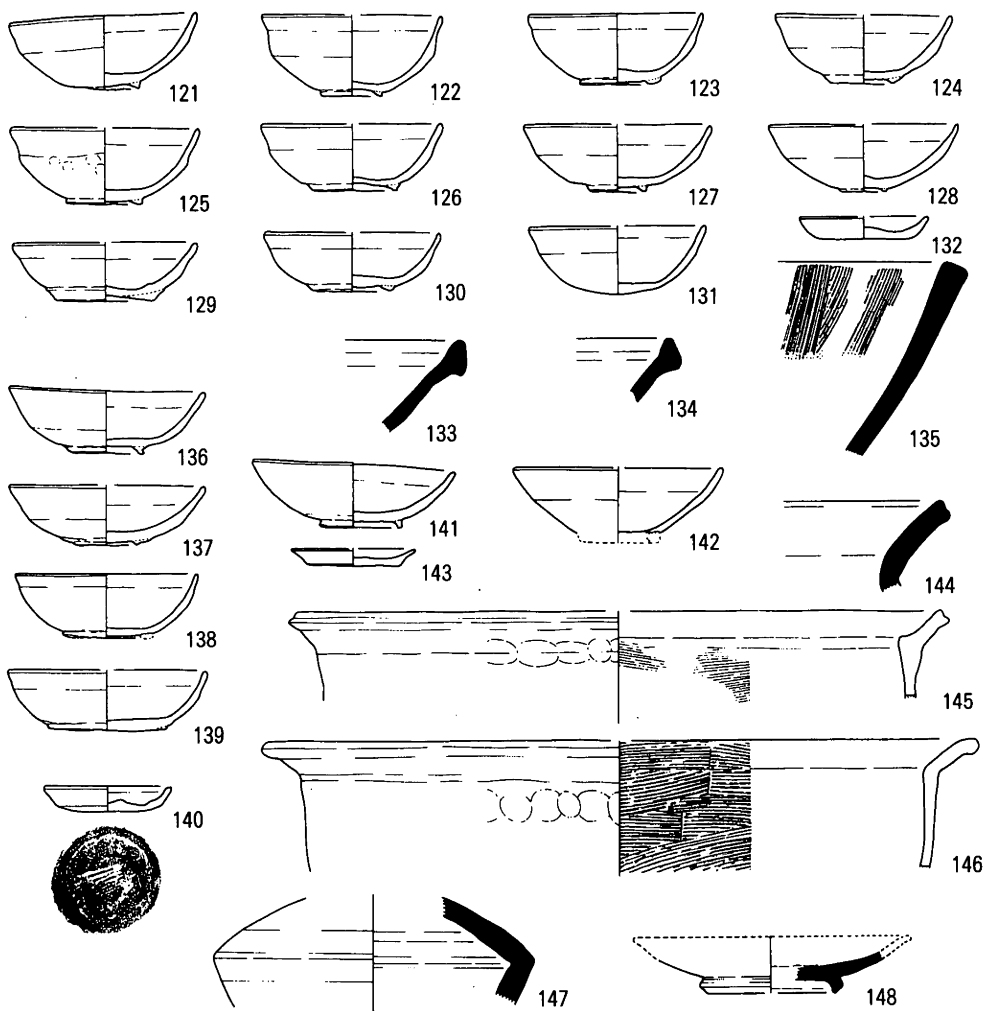
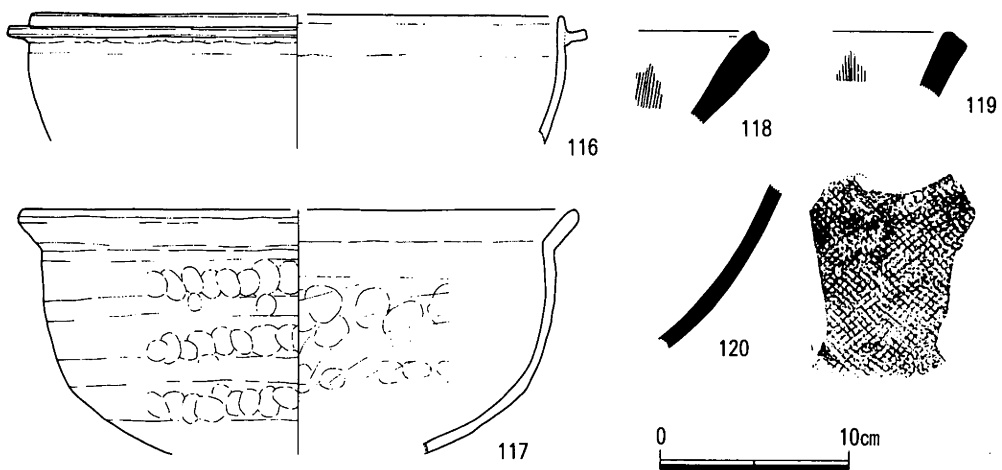
土壙-1からは土師器碗A(7)、碗B(1~6)、小皿A(8・9)、と亀山焼の瓦質の鉢が出土している。この内碗Bは口径10~11cmで器高が比較的低いもの(1・4・6)と、口径



第63図 出土遺物 1 (S = 1/4)

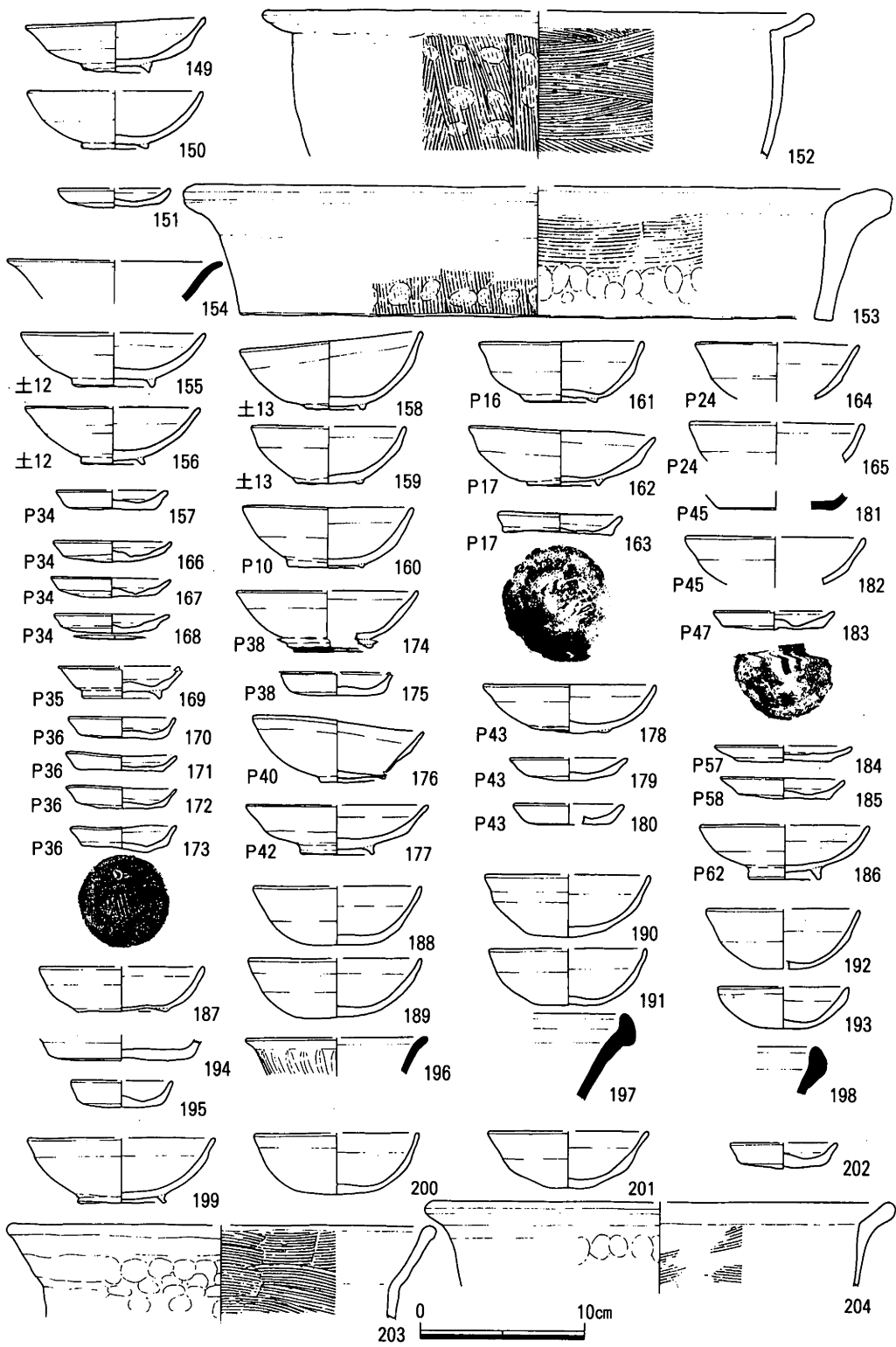


第64図 出土遺物 2 (S = 1/4)

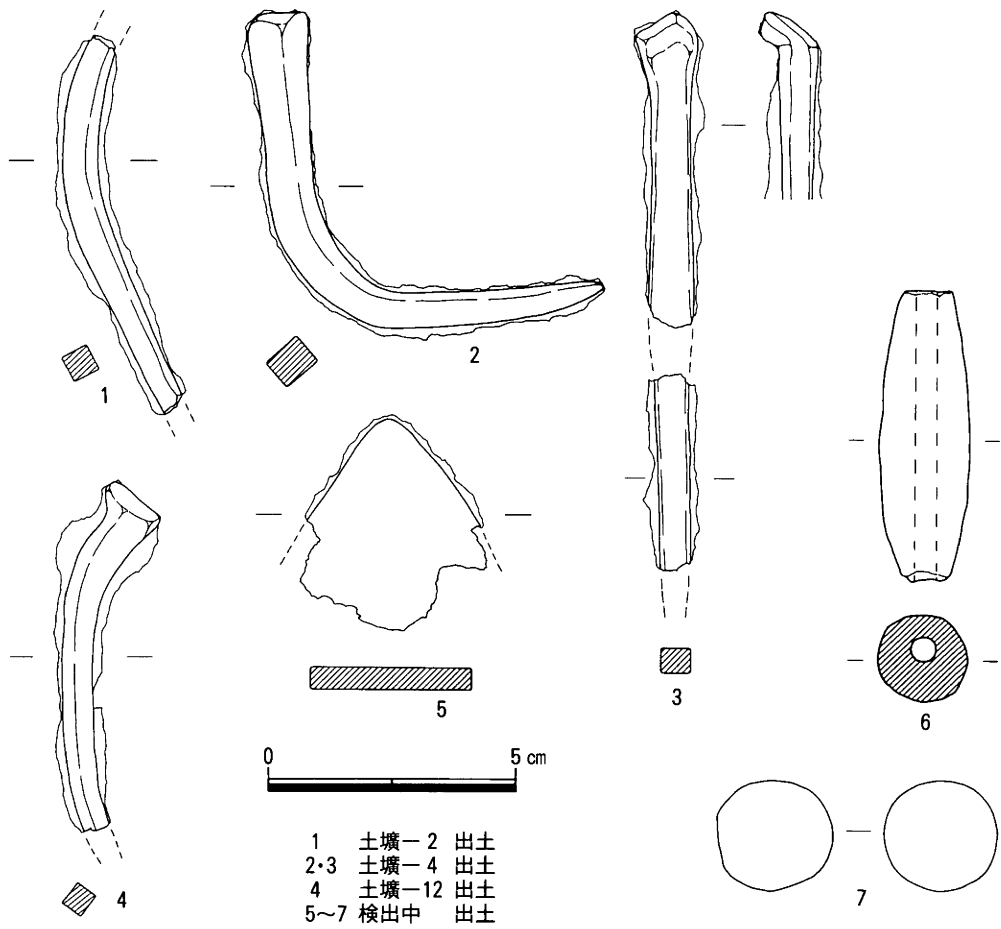


116~120 土壙-4 121~135 土壙-5 136~140 土壙-7
 141~146 土壙-9 147 土壙-7 148 土壙-12

第65図 出土遺物3 (S=1/4)



第66図 出土遺物4 (S=1/4)



第67図 出土鉄製品・土製品 (S = 2 / 3)

10cm以下で椀Aに高台を貼付した器高4cm前後のもの(2・3・5)がある。皿の底部はヘラ切りの後にナデをくわえている。土壙-2からは土師器椀B(12~18), 椀A(19~38), 皿A(39), 小皿(40・41), 東播系須恵器鉢(42~44)が出土した。土師器椀Bは口径10cm以下で椀Aに高台を貼付した器形を呈し, 法量は近似している。椀Aは器高4cm前後のI類と3.7cm前後のII類に大別できる。須恵器鉢は使用による内面底部の器面の磨滅が著しい。土壙-4からは, 当遺跡中で最も多くの土師器椀がまどまって出土した。特に完形もしくは完形に近いものが多いことが特色であり, その大半を椀Aが占め, 法量は土壙-2と同様の傾向をしめす。他には坏(99), 皿A(100・101), 小皿A(102~115), 土師器羽釜(116), 鍋(117), 亀山焼の瓦質の播鉢(118・119), 甕(120)などが出土した。坏, 皿の底部はすべてヘラ切りの後にナデを加えている。また椀A(69)の口縁部内面には筋状に煤が付着しており, 灯明の器として使用されていたことが窺われる。土壙-5からは土師器椀A(131), 椀B(121~130),

小皿(132)、東播系須恵器鉢(133・134)、亀山焼の瓦質の搦鉢(135)が出土した。土師器碗Bは土壙-2と同様Ⅰ類とⅡ類が共存している。土壙-7では土師器碗B(136~139)、小皿(140)が出土したが、碗BはⅡ類のみであり、碗Aは破片も含まれていない。他に7世紀末の須恵器長頸壺(147)がある。土壙-9からは土師器碗B(141・142)、小皿(143)、亀山焼甕(144)、土師器鍋(145・146)が出土している。

土壙-10からは土師器碗B(149・150)、小皿、鍋、台、青磁(154)が出土している。153は内面に煤が付着していることから火鉢的な用途も考えられる。

土壙-12の土師器碗B(155・156)、小皿は法量的にやや古相を示すほか、灰釉皿B(148)が出土している。時期は黒笹90号窯式、9世紀後半が考えられる。

P-17・34・36・47・57・58出土の土師器碗Bと小皿もやや古相である。

落ち込み-1からは土師器碗B(187)、A(188~193)、坏(194)、小皿(195)、青磁(196)、東播系須恵器鉢(197・198)が出土したが、碗Aは全てⅡ類である。

次にこれらの土器の出土状況から、遺構の性格を考えてみる。今回の調査で土師器の碗、皿がまとまって出土した遺構としては土壙-1・2・4・5がある。

この土師器碗と皿の大半が完形であるのに対して、青磁・鍋・鉢・甕は全て破片である。

また、碗・皿には使用の痕跡が殆どみられないのに比べ、鍋や鉢の破片には磨滅や煤の付着が見られ、日常の使用による破損と考えられる。

このことは、碗・皿が一時期の使用の後に一括して埋納された時点で、周辺の破片が混入したとみられ、これは碗・皿が法量的にみて古相の碗Bを含まず、ほぼ同時期であるのに対して、鍋に時期差があることから推定できる。このような土師器碗の一括埋納例は、草戸千軒町遺跡で数多く報告されている他、市内では、清水角遺跡・石原後遺跡でも確認されている。

最後に当遺跡出土の土器の実年代であるが、法量的に11cm以上の古相をしめす碗を13世紀後半、その他の埋納土壙の碗A・Bを草戸千軒町遺跡と対比して、明確な碗Cを伴わない点からⅡ期前半の14世紀前半と考えておきたい。(武田)

○鉄製品・土製品

鉄製品は釘状の製品(1~4)のうち、1が土壙-2から、2・3が土壙-4から、4が土壙-12から出土した。5の板状品が検出中に出土した。これは全体が厚さ約4.5mmと均一で先端部も鋭くなっておらず鋸等にはならないと考えられる。土製品は検出中に6の土錘と7の土球が出土した。この他にも土錘の破片が数点認められた。

以上のように、本遺跡では13世紀後半から14世紀にかけて営まれた集落の一角が明らかになった。総社市内でこの時期の集落が明らかになったのは清水角遺跡・石原後遺跡について僅かに3例目である。(高橋)



1. 古開遺跡調査前（北東から）



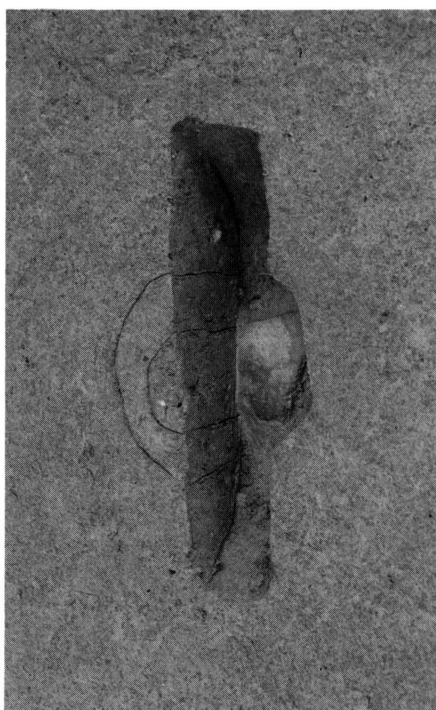
2. 調査区東半部（西から）



1. 土壇一13 (南から)



3. P-36 遺物出土状況



2. 柱礎石検出状況



4. P-40 遺物出土状況



1. 調査区西半部（北から）



2. 土壙-4 出土遺物

と 登 木 21 号 墳

所在地 総社市小寺886-1

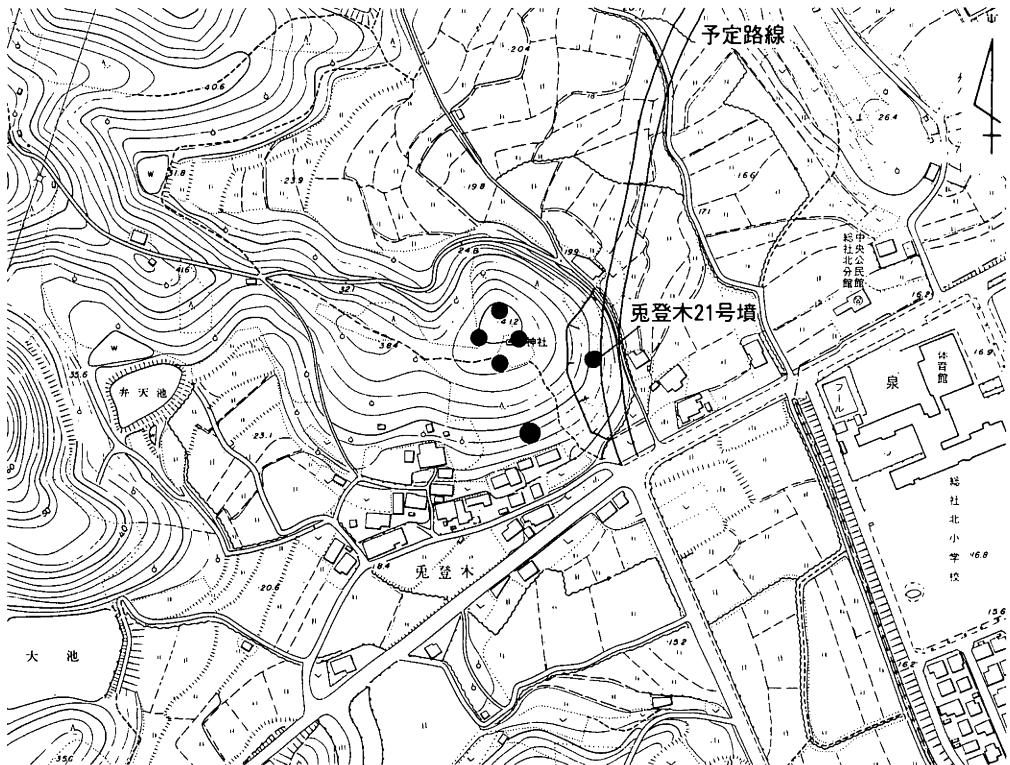
調査期間 平成7年11月13日～12月1日

調査面積 約380㎡

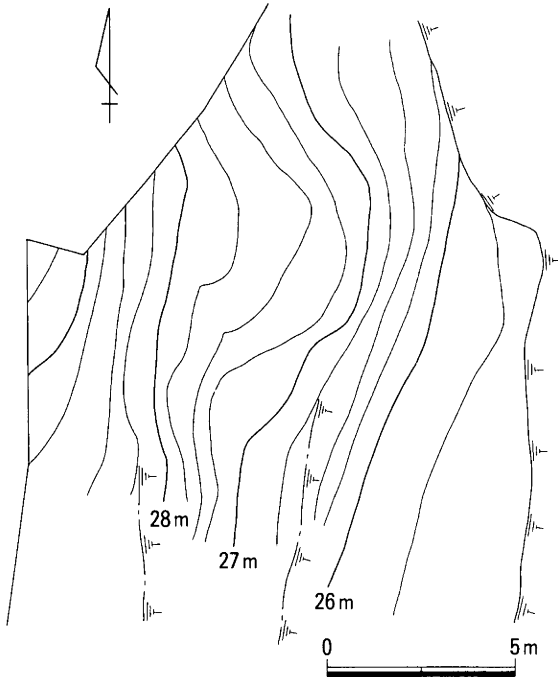
調査経緯

兎登木古墳群は、総社市街地の北辺に広がる山塊から派生する低丘陵の南端に位置しており、岡山県遺跡台帳によれば直径4～6mの円墳20基で構成されている。この地に池田地区と総社市街地を結ぶ幹線市道簸田兎登木線の建設が計画された。現況道路は非常に狭小であり、交通混雑と通行上の危険を解消するため、一部バイパスを含み、二車線片側歩道で改良するものである。この道路建設事業に伴う土砂掘削によって、南東に舌塊状に延びる丘陵の一部が削平されることになった。総社市教育委員会では、平成7年11月7日に確認調査を行い、11月13日から12月1日までの間発掘調査を実施した。

現状は山林で、特に東側は急峻な斜面である。戦後しばらくの間は畑地として利用されていたらしく、斜面が切削されて段状の畑が作られているのが痕跡として認められた。兎登木21号



第68図 位置図 (S = 1/5,000)



第69図 調査前地形測量図 (S = 1/200)

墳は、急峻な東斜面の中ほどに山側に周溝を巡らせて作られているが、墳裾まで開墾による削平が及んでいた。また丘陵斜面に重機によって約2mおきにトレンチを設定して確認を行ったが他の遺構は認められなかった。

調査概要

1. 墳丘

兎登山21号墳は標高41.2mの小丘陵の中ほどの、標高27m前後に位置している。

墳丘は一辺約6mのほぼ正方形を呈しており、山側に幅約1.5~3.0mの周溝が巡らされている。墳丘盛土は高さ約40cm残存していたが、墓壙底面までは

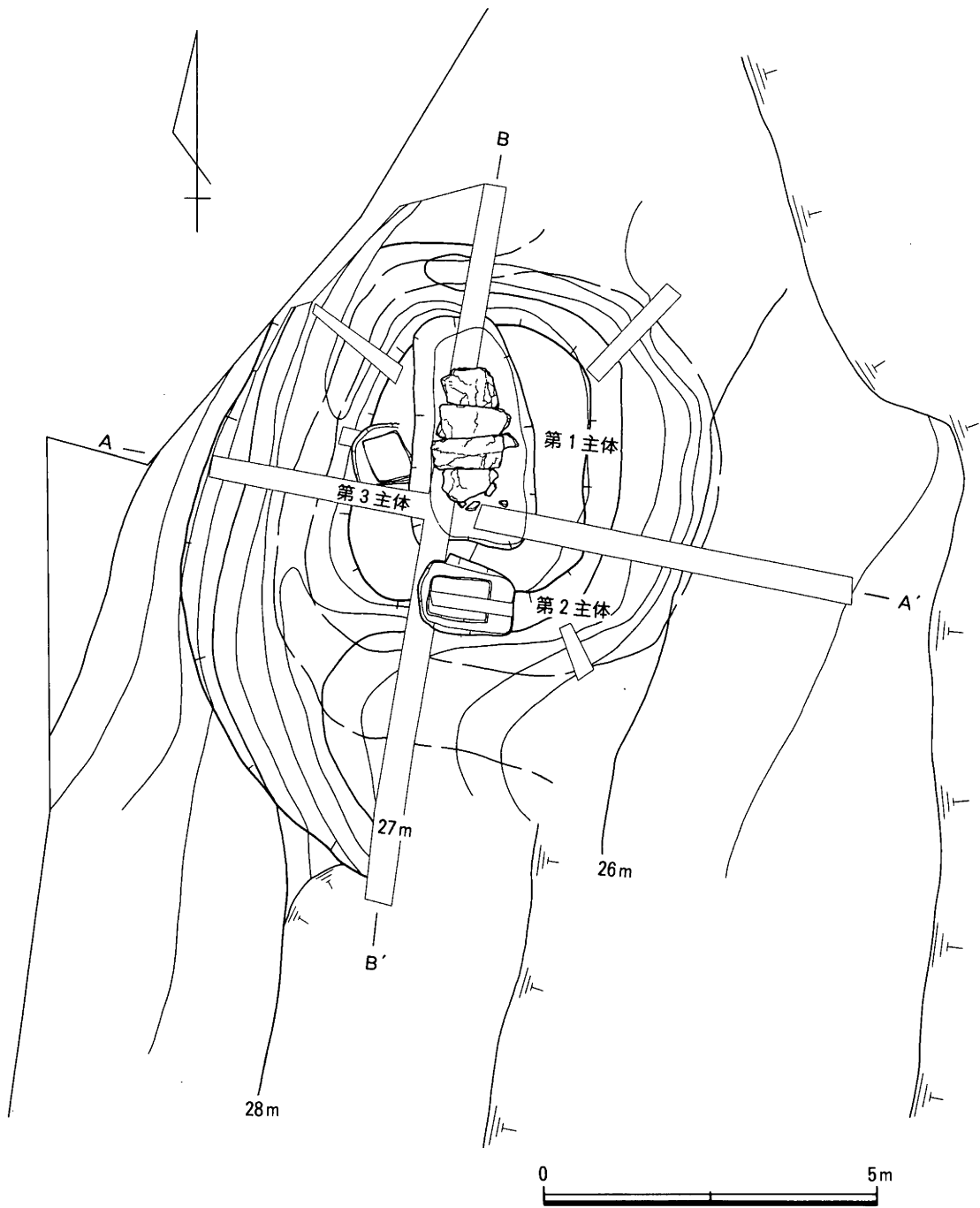
2. 埋葬主体

本墳には箱式石棺1と木棺2の合計3つの埋葬主体が検出された。このうち第3主体は他の主体と軸線の向きが異なることや、出土した土器が古いことなどから本墳の主体部にならない可能性も残る。

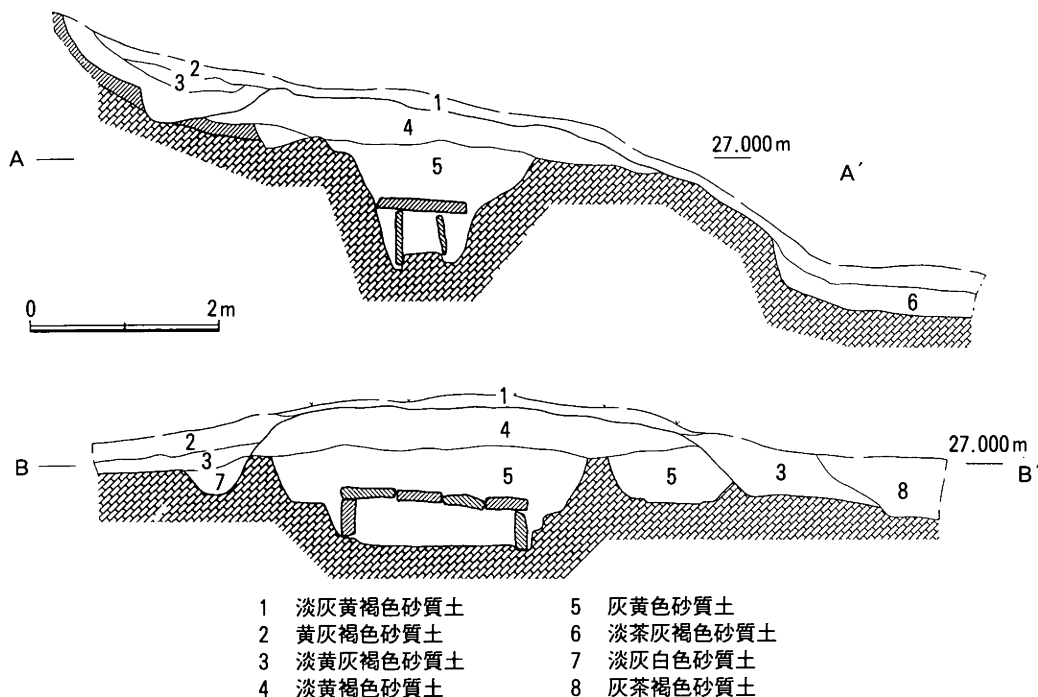
第1主体

第1主体は本墳の中心主体と考えられ、方墳の主軸とはややずれているが、ほぼ南北方向に主軸をとっている。墓壙掘り方は南北3.3m、東西1.2~1.8mを測る不整な長方形であり、幅は南側がやや広く、北側がやや狭くなっている。墓壙掘り方の中央にさらに箱式石棺の掘り方があり、南北2.4m、東西1.1mを測るやや胴張りの長方形を呈している。

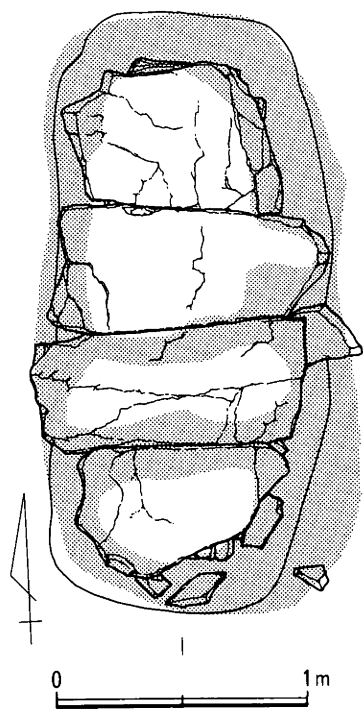
蓋石は4枚で、淡灰青色のキメ細かな粘土でしっかりと目張りされていた。目張粘土の中には棺内の床面に敷かれている小円礫とほぼ同じ礫が混じっていた。箱式石棺の側壁は大小11枚



第70図 調査後墳丘測量図 (S = 1/100)



第71図 墳丘断面図 (S = 1/80)

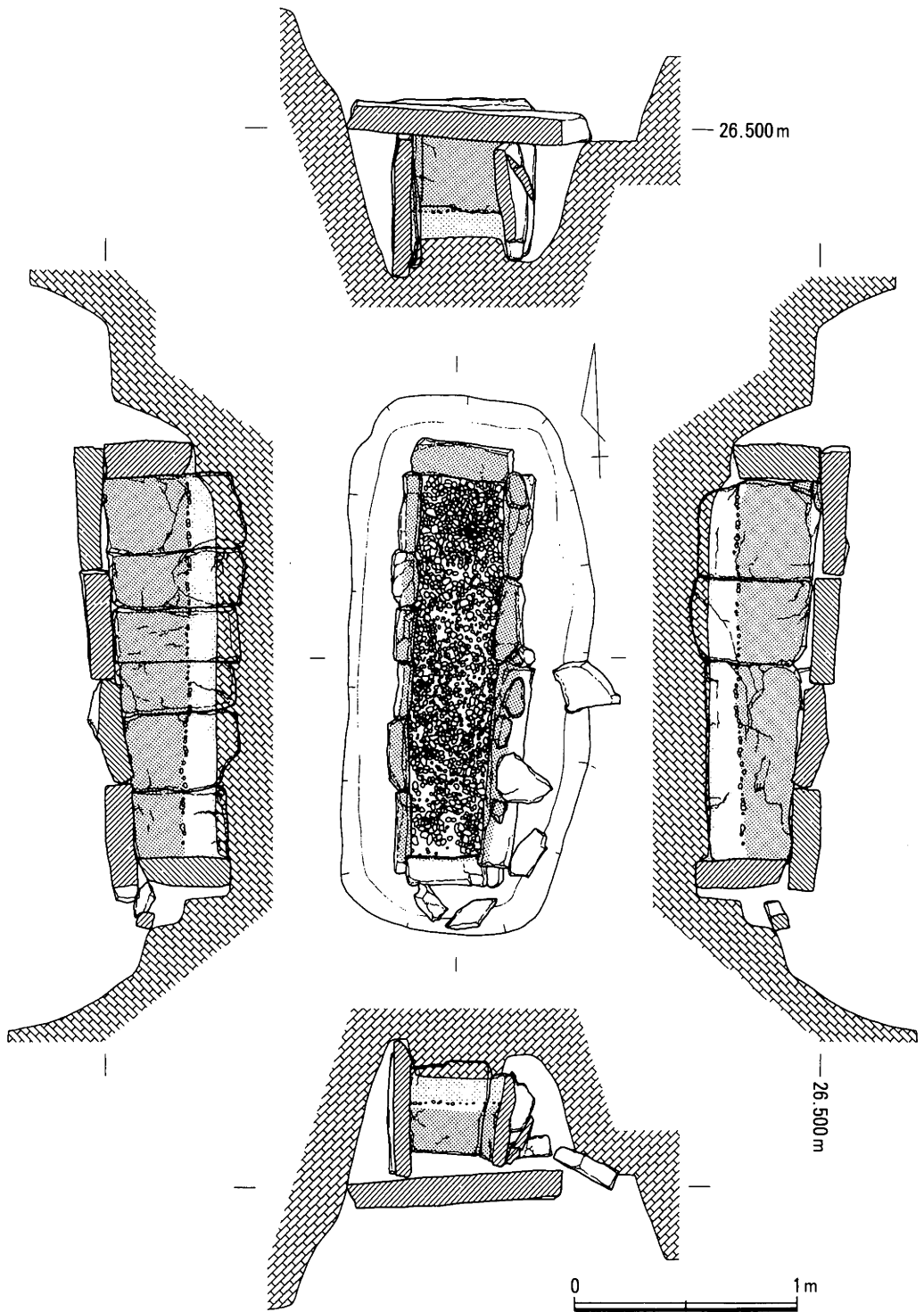


第72図 蓋石検出状況 (S = 1/30)

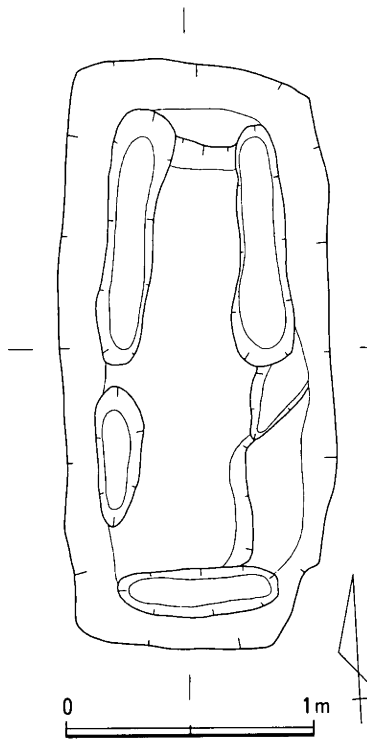
の板石で構成されている。東側壁はやや大型の石3枚で作られており、西側壁はやや小型の石6枚で作られている。長さはほぼ50~60cmでそろっているが、北側小口石は長さ約40cmと短く、据え付けの掘り方もやや高く削り残されている。また側壁の裏込めにも同様の粘質土が詰められており、粘質土と砂質土が互層状に入れられていた。

石棺の内法は長さ1.70m、幅36.0~42.0cmを測り、やや胴張りで床面には円礫が敷かれていた。石棺の内側小口幅は北側37cm、南側35.5cmとほぼ同じであるが、石材の使い方や床の円礫が北側が密になっていることなどから頭位は北と推定される。側壁の内面と蓋石の裏側にはやや暗い赤色の顔料が塗られていた。石棺内には流土があまり入っておらず、床面の敷石が露出していた部分もあった。石棺内の排土は全て洗浄したが、遺物は出土しなかった。

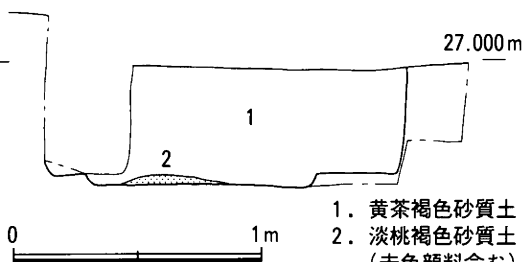
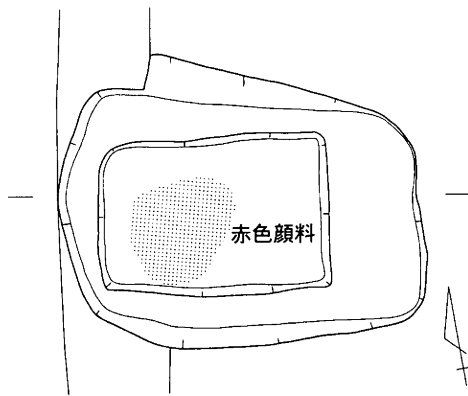
石材を除去した後の墓壙から、石材の据え付けの掘り方が明らかになった。北側小口の石材の下は一段高く掘り残され



第73図 第1主体平・断面図 (S = 1/30)



第74図 第1主体掘り形平面図
(S = 1/30)



- 1. 黄茶褐色砂質土
- 2. 淡桃褐色砂質土
(赤色顔料含む)

第75図 第2主体平・断面図 (S = 1/30)

ており、北半分の側壁は2～3石分を一度に掘を込んでいた。側壁石材の下には細かい淡灰黄色の置土が認められた。掘り方の底面と床面の円礫との間には汚れの少ない灰黄褐色砂質土が入れられていた。

第2主体

箱式石棺の主軸にはほぼ直行して南側で検出された。墓壙掘り方は約1.5×1.2mの隅丸方形を呈しており、埋土は黄茶褐色砂質土であった。墓壙中央のやや西よりに約90×65cmの長方形の木棺痕跡が認められ、その床面中央のやや西よりに淡赤色の顔料の分布が認められた。木棺外側の墓壙内埋土は、底面近くでは淡灰白色砂質土層と淡茶褐色土層とが互層状になっていたのが観察できた。

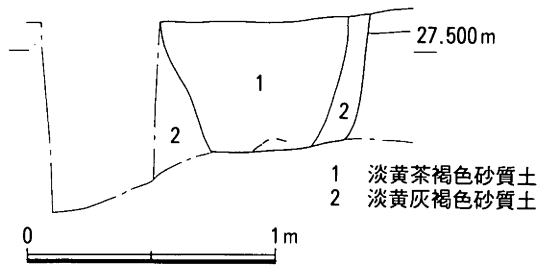
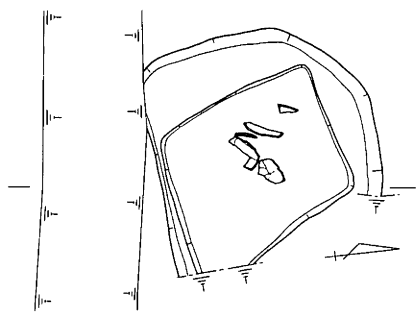
第3主体

箱式石棺の西側で検出された。箱式石棺を完掘した後に検出されたため、一部削られているようである。主軸は南北方向からやや西に振っており、他の主体と主軸を異にする。墓壙内埋土は汚れの少ない淡黄茶褐色であった。棺内埋土はやや暗く炭化物小片を少し含んだ淡黄茶褐色砂質土であった。棺の床面近くで高坏の坏部の破片が2個体出土している。いずれも約1/5個体の破片であるが弥生時代後期のものと考えられる。主軸が他の主体部と異なることもあり、この第3主体は本墳の主体部ではなく、弥生時代の土壙墓である可能性も否定できない。

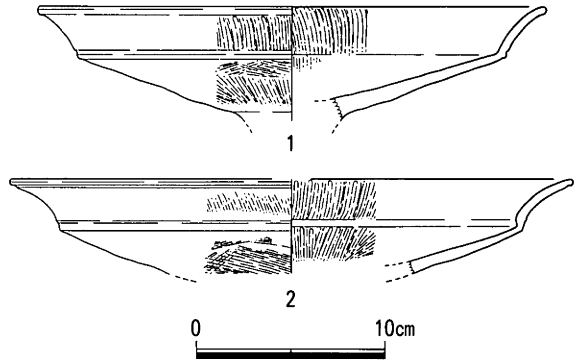
3. 墳丘出土遺物

墳丘と周溝から若干の土器片が出土している。1は淡黄褐色を呈する壺形土器で、口縁部の約2/3が残存している。4は弥生土器と考えられ、古墳の上方から流入したものであろう。

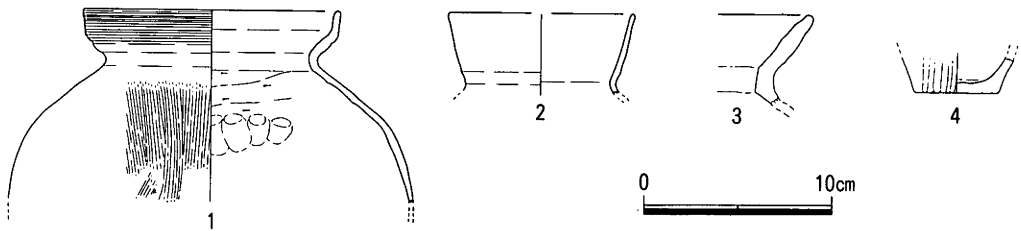
4. まとめ



第76図 第3主体平・断面図 (S = 1/30)



第77図 第3主体出土遺物 (S = 1/4)



第78図 墳丘出土遺物 (S = 1/4)

以上のように兎登木21号墳は墳丘出土の土器及び中心主体部である箱式石棺より、古墳時代初頭に造営されたと考えてよいと思われる。本墳の周辺には兎登木の大家塚と呼ばれる西の塚と東の塚（消滅）があり、また山頂の牛神には小円墳4基などが知られているが発掘調査はあまり行われていない。近隣では北西約1kmに位置する西山周辺古墳群・小寺古墳群が住宅団地造成、北約1kmに位置するすりばち池古墳群が市道建設及び公園造成に、また北約1.5kmに位置する福井大塚古墳群が住宅団地造成及び小規模ほ場整備事業に伴って発掘調査が行われている。いずれも古墳時代後半期の造営と考えられ、前期古墳と考えられるものは調査されていない。また西約700mには、全長約50mの前方後円墳である井山古墳が存在し、西約1.2kmでは佐野山古墳が発掘調査されている。このうち佐野山古墳は5世紀代に造営されたと考えられる箱式石棺を主体部にもつ一辺約25mの方墳であることが判明している。今回の調査では総社市街地の北縁に形成された古墳群の一端を明らかにすることができた。

(高橋)



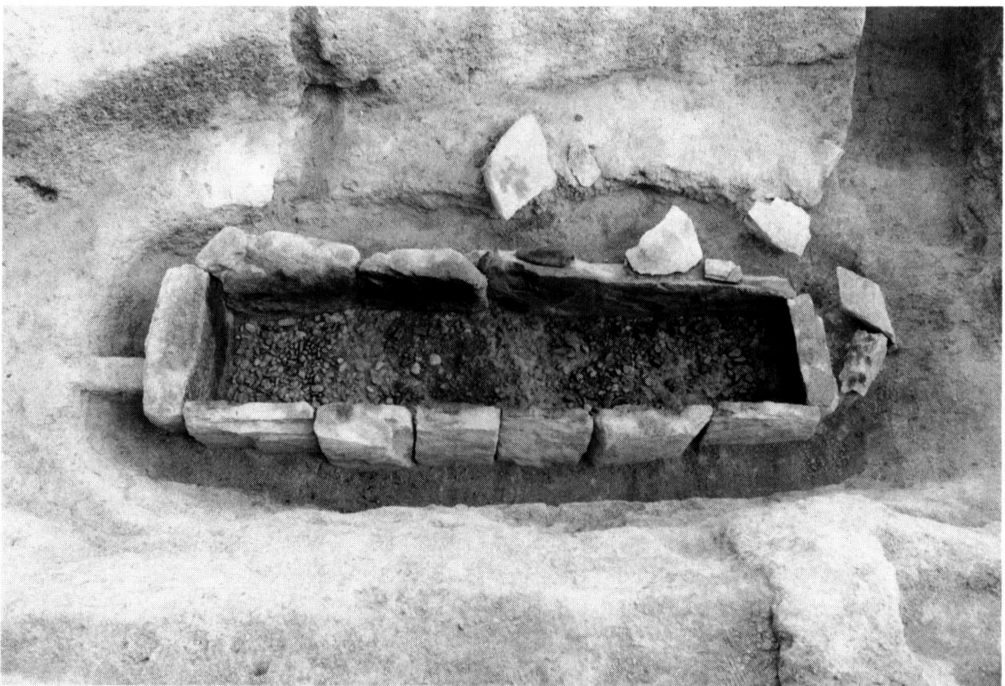
1. 調査地遠景



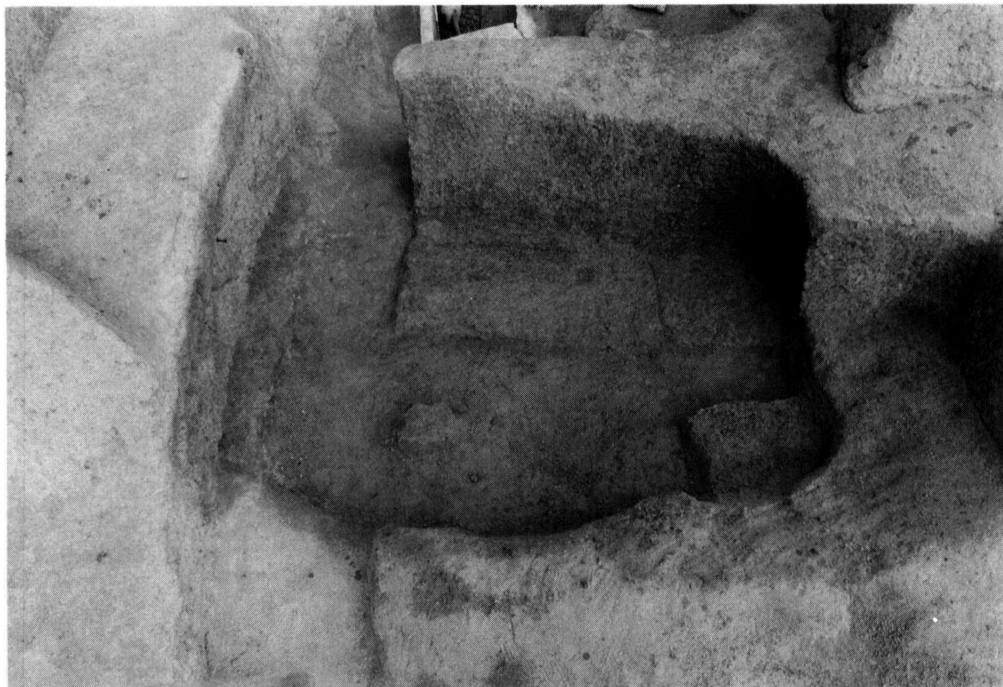
2. 21号墳全景



1. 第1主体蓋石検出状況（目張粘土）



2. 第1主体蓋石除去後



1. 第2主体



2. 第3主体 土器出土状況

報告書抄録（記載様式案）

| ふりがな | そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんまう | | | | | | | |
|----------------|---|----------------|------------------|-------------|---------------------------|---------------------------|------------------------|-------------------------------|
| 書名 | 総社市埋蔵文化財調査年報 6 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 総社市埋蔵文化財調査年報 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 6 | | | | | | | |
| 編著者名 | 高田明人, 谷山雅彦, 武田恭彰, 平井典子, 前角和夫, 高橋進一 | | | | | | | |
| 編集機関 | 総社市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒719-11 岡山県総社市中央1-1-1 TEL 08669-92-8363 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 1996年11月20日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東緯 ° ' " | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| なか 中須賀 | 岡山県総社市 三須 | 33-208 | | | | 1995.04.19~ 1995.04.26 | 約100m ² | ガソリンスタンド 建設に伴う事前調 査 |
| ふる 古開 | 総社市中央 | 33-208 | | | | 1995.04.04~ 1995.04.18 | 約500m ² | ビル建設に伴う 事前調査 |
| ととぎ 兎登木21号墳 | 総社市小寺 | 33-208 | | | | 1995.11.13~ 1995.12.01 | 約380m ² | 道路（市道藪田 兎登木線）建設 に伴う事前調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 中須賀 | 集落跡 | 弥生 古墳 古代 | 溝状遺構 住居址 | | 弥生土器 須恵器, 土師器 瓦 | | 6C後半の鍛冶関 連遺跡か | |
| 古開 | 集落跡 | 中世 | 土壇 柱穴 溝状遺構 | | 土師器, 須恵器 磁器, 鉄器, 土錘 | | 13C後半~14Cの 集落跡 | |
| 兎登木 21号墳 | 古墳 | 古墳 | 古墳1基 | | 土師器 弥生器 | | 20基からなる古墳 群中の1基 | |

総社市埋蔵文化財調査年報 6

1996年 11 月 20 日 印刷

1996年 11 月 20 日 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

